行っていない。口縁部の形態により、Aは6種、Bは2種に分類した。

A_1　口縁部が短く外反し、くの字状を呈するもの

A_2　口縁部が短く外反し、肥厚あるいはやや内弯しながらくの字状を呈するもの

A_3　口縁端部が須恵器口縁部形態に近似し、ヨコナデにより面とり状、つまみあげ状に成形されるもの

A_4　口縁部が長く外反し、くの字状を呈するもの

A_5　口縁部が長く内弯し、袋状あるいは肥厚するもの

A_6　口縁部が肥厚して直に立ち上がるもの

B_1　口縁部がくの字状に開くもの

B_2　口縁部がコの字状に近く屈曲するもの

小形甕　口径が15 cm以下のものを小形甕とし、26個体を確認した。口径が12～14 cmのものが一般的といえる。成形調整方法から、ロクロ調整しているAと武蔵型Bに分けられる。Aの口縁部形態は、甕に準ずるものであるが、甕ほど明確な変化が認められない。底部は平底で回転糸切りのものと静止ケズリにより調整されるものがある。体部調整は大多数のものが内外面ロクロ調整痕を残すのみであるが、154は胴部中位からケズリ調整されている。87は器肉が厚く、他の小形甕と異質であり、胴部中位からケズリ調整され、底部は丸底に近い。

鉢　口径と比較して、器高の減じた器種を鉢とし、口縁部形態から以下に分類した。

A　口縁部が大きく外反し、ロクロ調整され、胴部中位からケズリが施され胴が張らずにナベ形を呈するもの　(33)

B　口縁部が外反し、ロクロ調整され、口縁端部形態が須恵器に近似し面とり状に成形されるもの　(111)

C　ロクロ調整され、口縁部から胴部にかけくびれが無く直で、外面にケズリが施され、内面がカキメ調整によるもの　(251)

②須恵器

坏　底部の切り離し方法から、ヘラ切りされるものをA（68・102)，回転糸切りのままで未調整のものをBとし、さらにBを色調、焼成の程度により4種類に分類した。

B_1　赤紫系を混えた色調で堅い焼のもの

B_2　灰青色あるいは灰黒色で堅い焼のもの

B_3　灰白色あるいは灰黄色で堅い焼のもの

B_4　灰白色あるいは灰黄色でやわらかい焼のもの（摩耗している場合が多い）

法量は、口径が12～14 cmのものが46個体で大多数であり、器高は3.6～4.0 cmのものが20個体で半数近くを占める。詳細は別表で示した。形態は、底部立ち上がりから口縁部へかけて、なだらかに開いている。その中で103は、底部の立ち上がりから口縁部へかけて直であり、底部回転糸切りも他の坏が右回りであるのに対して左回りである。

高台付坏　底部から口縁部への立ち上がりが直となり、底部回転糸切りの後、回転ケズリにより調整し、高台を付すものである。「径高指数」＝$\frac{器高}{口径}$×100 により以下に分類した。

A　径高指数が40以上のもの　（9・18・30・43）

B　径高指数が25前後のもの　（82・98・99・100）

9は形態はAに属するが径高指数が34であり、AとBの中間のものと思われる。A・Bともに完形品は存在しない。

壺　頸部まで残存し、長頸壺と確認できるものは53、219のみである。底部に高台の付されるものを壺とし、その形態からAとBに分類した。

A　胴部が直のもの　（15・53）

B　胴部が丸みをおびているもの　（219・221・240・241・290・291・292）

四耳壺　胴部に突帯と4つの耳をもち、もっとも退化した無孔の形態を有する　（158）

横瓶　口縁部は外反し、胴部はタタキ成形痕を残すもので、自然釉がかかっている　（108）

甕　口縁部が短かく、大きく外反し、かすかに凹線をもつもの（54）、口縁部が短かく外反し、胴部タタキで成形されるもの（6）、口径が大きいもの（242・243・266）がある。完形品は存在しない。

蓋　つまみ部の形態から、扁平なつまみをもつもの（23・96・264・300）と、丸みをもつもの（265）とに分類される。完形品は存在しない。

鉢　口径と比較して、器高の減じた器種を鉢とし、以下に分類した。

A　口縁部が外反し、胴部中位からタタキ成形されているもの　（86・143）

B　口縁部から胴部にかけ、くびれが無く直で、酸化焔焼成されているもの　（156）

③　灰釉陶器

B地点検出面で皿126、D地点8号住で椀が1点（図示はして無い）、D地点11号住で椀194・195、壺201、D地点12号住で椀238の計6点が出土した。

④　坏の法量比

土師器坏は、口径13～14 cm、器高4～4.5 cmのものが一般的であるが、大形の一群も存在する。須恵器坏は土師器坏に比較して、口径、器高に規格性が認められ特に大形となるものは存在しないが、底径値はこれに反して大きな巾をもつものがある。土師器坏と同様に底径5.6～6.5 cmをとるものが多い中で、7.1 cm以上の値をとるものが認められ、形態的に底径が大きく、口縁の立ち上がりが直に近くなる一群が把握される（64・68・103）。本稿においては、土師器須恵器坏の分類上、法量に関して未分析であったが、法量比による分類も器種の細分に有効な手段となることが明らかであり、今後の課題としておきたい。

⑤　土器構成と様相

平安時代の土器群は、以上により分類されてきたが、当然のことながら同群には年代巾が認められるべきところである。時間差の把握においては器種構成の変化に着目することとし、遺構別器種分類表により古様相と新様相とを抽出してみたい。

表８　平安時代遺構別器種構成表

様相	住居	土師器																			須恵器										灰釉
		坏							台坏	台皿	甕								その他	坏					台坏	壺	甕	蓋	その他	
		A1	A2	B1	B2	C1	C2	D			A1	A2	A3	A4	A5	A6	B1	B2		A	B1	B2	B3	B4						
古	B5		31				32					34 35					36		33 鉢			25 28 29	26 27		30			23 24		
	B10												11												9					
	B11												59 ～ 63				57 58									53	54 55			
	B16			16																		13	12			15		14		
	B20			66		67						69								68		64								
	B23			104		106～					112		113				(109)		111 鉢	102		103			98 ～ 101	107		96 97	108 横瓶	
	D7			150		151					155 157											149							156 鉢	
中	B7					45		44				51		50	49							39 40 42	41		43			37 38		
	B18											21			22								17		18					
	B21			83		84							90 ～ 92	94	93 95								78 ～ 80		82			81	86 鉢	
	D5			135		134							141	139 142	140						131	132	133						143 鉢	
	D9							180	181					183 184				+			173 175	174 176			178	182				
	D10			188	189							190			191								186	185	187					
	D11			198					197 200	196					206									192 199						194 195 201
	D12					246	247	245		244		258 259			256 257				251 鉢				237	236		239 ～ 241	242 243			238
	D14							275	272 273	269 ～ 271 274					282	283		(276)				260		261 262	263	267 268	266	264 265		
	D15			294				295						299	298	297					286	285 288	284 287		289	290 ～ 292				
新	B2							5							7									1 ～ 4			6			
	B22								74							75 ～ 77														
	D6															146 147								144			148			
	D8						163	160 ～ 162 165 166							169 ～ 171	172								159 167					158 四耳壺	+
	D13							216 ～ 218	214 215	212 213				229 230	231 ～ 233	234		228						207 ～ 211		219 ～ 221				

○　器種分類に基づき各住居址単位の伴出状況を示した。表中の数字は遺物番号と対応する。

○　土師器高台坏、高台皿、須恵器高台坏、壺、甕は、細分類されていない。

○　土師器甕Ｃ類、小形甕は掲載されていない。ただし、小形甕Ｂ類に関しては( )内に示した。

○　未実測個体中存在が確認されたものは＋で示した。

古様相

土師器坏はB_1・C_1に限られ、底部回転糸切りによると思われる切り離しの後、回転・静止ケズリにより丁寧に調整されるものである。ロクロ調整によらないA_2もこれに共伴している。土師器甕は口縁部が短く折立するA_1～A_3に限られ、外面にカキメが存在するものも認められる。これに武蔵型甕B_1とハケ甕が共伴する。須恵器坏はB_1～B_3であり、ヘラ切りによるAが伴う可能性がある。須恵器は他に高台付坏、蓋、横瓶、鉢があり器種は豊富といえる。

新様相

土師器坏は底部回転糸切りのままで調整されていないDが主流となる。土師器甕はA_4～A_6に限られ、口縁部が長い。これに武蔵型甕B_2が共伴する。土師器には新たに高台付坏、高台付皿が登場する。須恵器坏は粗雑なB_4に限られる。

以上抽出された様相を整理すると、土師器坏は$\left(\begin{smallmatrix}B_1\\C_1\end{smallmatrix}\right)$→D、土師器甕は$A_1$～$A_3$→$A_4$～$A_6$、$B_1$→$B_2$、須恵器坏は$B_1$～$B_3$→$B_4$、須恵器高台付坏→$\left(\begin{smallmatrix}\text{土師器高台付坏}\\\text{土師器高台付皿}\end{smallmatrix}\right)$へと移行する時間的な器種構成の移動、変化が把握されることになる。年代に関しては共伴する灰釉陶器が有力な手がかりとなる。その詳細については次章にゆずることとし、本稿においては目安としての年代観を呈示するにとどめたい。古様相には、ほぼ9世紀代の中葉前後を、新様相には10世紀代中葉前後をその実年代として想定しておく。

なお、D地点集石土壙資料（図85－300～303）は古様相をさかのぼり8世紀代の遺物として把握される可能性があり、今後の検討を要する。　　（中殿章子）

表9　平安時代土器観察表

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形調整施文 外面	内面	備考
B地点2号住	1	S	坏	14.0	6.8	4.3	1/4	h	j	粗	底部一糸切		
	2	S	坏	13.0	5.5	3.5	1/3	h	h	粗	底部一糸切		磨耗
	3	S	坏	13.2	6.2	3.7	1/5	h	h	粗	底部一糸切		磨耗
	4	S	坏	13.0			1/4	i	i	粗			磨耗
	5	H	坏	12.8	6.0	3.2	1/2	e	ⓐ	良	底部一糸切	ミガキ	磨耗
	6	S	甕	20.0			1/4	j	l	良	平行タタキ	無文タタキ	
	7	H	甕	23.0			1/8	e	e	良		ハケ？	磨耗
B地点10号住	8	S	坏		6.0		1/2	j	j	良	底部一糸切		
	9	S	坏	11.4	6.8	4.1	1/6	m	m	優	底部一糸切		高台付
	10	H	鉢				1/5	e	e	良	ハケ→ミガキ	ナデ	古墳時代混入品？
	11	H	甕	23.2			1/8	e	e	良	ケズリ		ピット内

ⓐ—黒磨　b—黒褐　c—灰褐　d—黄褐　e—赤褐　f—赤　g—灰　h—灰白　（表9－1）
i—灰黄　j—灰青　k—青　l—灰黒　m—灰赤

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形調整施文 外面	内面	備考
B地点16号住	12	S	坏	13.1	6.3	4.1	3/5	h	h	良	底部一糸切		
	13	S	坏	12.7	5.3	3.4	1/2	j	j	良	底部一糸切		
	14	S	蓋	11.0			1/8	l	j	良			
	15	S	壺		12.8		1/2	l	j	良	底部回転ケズリ→ナデ		高台付
	16	H	坏	13.8	4.6	5.2	1/6	e	ⓐ	良	底部～周縁静止ケズリ	ミガキ	
B地点18号住	17	S	坏	12.2	6.2	3.8	1/4	h	h	良	底部—糸切		
	18	S	坏	12.0			1/6	l	j	優			高台付
	19	H	坏	13.2	6.2	4.0	1/4	e	ⓐ	良	底部—ケズリ？	ミガキ	
	20	H	甕		6.4		1/2	e	c e	良	底部—糸切		
	21	H	甕	26.0			1/8	e	e	良			カマド内
	22	H	甕	21.7			1/6	e	e	良		カキ目	
B地点5号住	23	S	蓋	16.4			1/4	m	j m	優	つまみ部回転ケズリ		カマド内
	24	S	蓋	16.6			1/4	m	j	良			
	25	S	坏	12.7	7.0	3.5	完	j	j	良	底部—糸切		
	26	S	坏	12.8	6.4	4.0	1/2	i	i	良	底部—糸切		
	27	S	坏	13.4	6.6	4.0	完	h	h	良	底部—糸切		
	28	S	坏	11.4	4.8	3.9	1/3	j	j	優	底部—糸切		カマド内
	29	S	坏	12.6			1/4	l	j	優			
	30	S	坏	9.4			1/3	l j	j	良			高台付
	31	H	坏	11.2		4.7	3/5	d	ⓐ	良	ケズリ？—ミガキ	ナデ→ミガキ	ロクロ未使用
	32	H	坏	17.0	8.4	5.4	完	e	ⓐ	良	底部～周縁回転ケズリ(糸切)	ミガキ	
	33	H	鉢	30.4			1/4	e	e	良	ケズリ	カキ目	外面炭化物
	34	H	甕	20.5		32.1	完	e	e	良	カキ目→ケズリ	カキ目中位以下ハケ	外面炭化物
	35	H	甕	26.4			1/4	e	e	良	ケズリ	板状工具による回転ナデ	
	36	H	甕	21.8	4.6		1/3	e	b	良	頸部下ヨコケズリ以下タテケズリ	ナデ	武蔵型甕
B地点7号住	37	S	蓋	13.8			1/5	j	j	良	つまみ部回転ケズリ		
	38	S	蓋	16.8			1/6	h	h	粗	つまみ部回転ケズリ		
	39	S	坏	13.4	6.0	4.0	1/4	j	j	良	底部—糸切		
	40	S	坏	12.6	6.6	3.6	完	j	j	良	底部—糸切		カマド
	41	S	坏	13.0	7.2	4.2	3/4	i	i	良	底部—糸切		

（表９—２）

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形調整施文 外面	内面	備考
B地点7号住	42	S	坏	11.9	5.7	3.2	3/5	j	j	良	底部一糸切		
	43	S	坏？	15.4			1/8	l j	j	良			
	44	H	坏	17.2	7.2	5.0	1/6	e	a e	良	底部一糸切	ミガキ	
	45	H	坏	13.0	5.8	4.0	3/4	e	e	良	底部～周縁 回転ケズリ	ミガキ	
	46	H	坏	17.8			1/6	a e	ⓐ	良		ミガキ	カマド
	47	H	甕	12.9	6.6	11.1	1/3	e	e	良	底部一糸切	ロクロ調整のまま	磨耗 カマド
	48	H	甕	12.5			1/4	e	e	良			カマド
	49	H	甕	19.2			1/5	e	e	良	カキ目	カキ目	
	50	H	甕	21.8			1/4	e	e	良	ケズリ	カキ目	カマド
	51	H	甕	24.6			1/6	e	e	良		カキ目	カマド
	52	H	甕				1/4	c	c	良	ハケ→ケズリ	ハケ	
B地点11号住	53	S	壺		10.8		完	h j	j	良	底部糸切→回転ケズリ		高台付
	54	S	甕	20.8			1/4	j	j	良	タタキ→ナデ	工具痕一押さえ？	カマド付近
	55	S	甕		15.0		1/2	j	j	良	タタキ→ナデ	ハケ→ナデ	54と同一個体
	56	H	甕	12.8			1/4	e	e	良			
	57	H	甕	18.6			1/4	e	e	良	頸部下ヨコ方向ケズリ	ナデ	武蔵型甕
	58	H	甕	21.4			1/4	e	e	良	頸部下ヨコ方向ケズリ	ナデ	武蔵型甕
	59	H	甕	24.6			1/2	e	e	良	ケズリ	タテ　ハケ→カキ目	カマド
	60	H	甕	17.2			1/3	e	e	良	ケズリ		
	61	H	甕	23.2			1/4	e	e	良		カキ目	磨耗
	62	H	甕	24.2			1/4	e	e	良	ケズリ		
	63	H	甕	25.2			1/2	e	e	良	ハケ→ヨコ方向ナデ →ケズリ	タテ　ハケ→カキ目	カマド
B地点20号住	64	S	坏	13.0	8.0	3.4	1/3	j	j	良	底部一糸切		カマド
	65	S	坏		6.8		1/2	h	h	良			
	66	H	坏	13.8	7.5	3.6	完	e	ⓐ	良	底部～周縁 静止ケズリ（糸切）	ミガキ	
	67	H	坏		6.4		3/4	e	ⓐ	良	底部～周縁 回転ケズリ	ミガキ	
	68	S	坏	14.2	8.0	3.1	1/6	e	e	良	底部一ヘラ切り？ →ナデ		酸化焔焼成
	69	H	甕	22.2			1/6	e	e	良		カキ目	
	70	H	甕	24.2			1/4	e	e	良	ナデ→ハケ	ナデ　頸部付近にハケ痕か？	ハケ甕
	71	H	甕	22.8			1/5	e	e	良	ナデ→ハケ	ナデ	ハケ甕

（表9－3）

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形調整 外面	内面	施文	備考
20住	72	H	甕		9.4		1/2	e	e	良	ハケ、底部付近ケズリ	ナデ		ハケ甕
B地点22号住	73	S	坏		6.2		1/3	h	h	粗	底部一糸切			
	74	H	坏		7.2		1/2	e	ⓐ	良	底部一糸切	ミガキ		高台付
	75	H	甕	21.4			1/3	e	e	良		カキ目		カマド一括
	76	H	甕	25.4			1/8	e	e	良	ケズリ	カキ目→ハケ (中位以下)		
	77	H	甕	22.4			1/6	e	e	良		カキ目		カマド一括
B地点21号住	78	S	坏	12.1	6.5	3.0	1/3	h	j	良	底部一糸切			
	79	S	坏	12.9	5.3	4.3	3/5	j	j	良				
	80	S	坏	13.2	6.4	3.9	1/5	h	h	良	底部一糸切			
	81	S	蓋	14.4			1/6	j	l	良	つまみ部一回転ケズリ			
	82	S	坏	15.6	10.0	4.7	3/4	j	j	優	底部一回転ケズリ			高台付
	83	H	坏	13.2	6.4	4.4	1/5	a e	ⓐ	良	底部～周縁 静止ケズリ	ミガキ		底部ハクリ
	84	H	坏	14.4	6.2	4.8	3/4	a e	ⓐ	良	底部～周縁 回転ケズリ	ミガキ		
	85	H	坏	15.6			1/6	e	ⓐ	良		ミガキ		底部ハクリ
	86	S	鉢	26.2			1/8	j	j	良	タタキ→ロクロナデ			
	87	H	甕	12.6		13.0	3/5	e	b d	良	ケズリ			
	88	H	甕	13.9			1/8	e	e	良				
	89	H	甕	12.5			1/8	c	c	良				
	90	H	甕	24.8			1/5	e	e	良		カキ目		
	91	H	甕	21.5			1/6	e	b e	良	ケズリ	ロクロナデ→ハケ		
	92	H	甕	19.4			1/6	e	e	良	ケズリ	カキ目→ハケ		カマド
	93	H	甕	22.2			1/3	e	e	良		カキ目		カマド
	94	H	甕	24.2			1/4	e	e	良				胴部外面 炭化物
	95	H	甕	22.8			3/4	d	b d	良	ケズリ	カキ目→ハケ		カマド
B地点23号住	96	S	蓋				1/4	j	h	良	つまみ部一回転ケズリ			
	97	S	蓋	13.6			1/3	j	j	良	つまみ部一回転ケズリ			
	98	S	坏	12.8	8.2	4.2	1/3	l j	j	良	底部一糸切→回転ケズリ			高台付
	99	S	坏	12.4	8.8	4.0	1/3	l j	j	良	底部一糸切→回転ケズリ			高台付
	100	S	坏	13.7	10.4	4.1	1/6	m	m	良				高台付
	101	S	坏		9.0		完	j	h	良	底部一回転ケズリ			高台付

(表9－4)

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形調整施文 外面	内面	備考
B地点23号住	102	S	坏	13.3	7.0	3.9	2/3	j h	j	良	底部一ヘラ切り？→ナデ		
	103	S	坏	12.8	8.2	4.1	3/4	j	j	良	底部一糸切		カマド 左回り糸切
	104	H	坏	12.4	6.0	3.6	2/3	e	ⓐ	良	底部～周縁 静止ケズリ	ミガキ	黒斑
	105	H	坏	15.8			1/6	e	ⓐ	良		ミガキ	
	106	H	坏	16.6	8.2	6.0	完	a e	ⓐ	良	底部～周縁 回転ケズリ（ヘラ切）	ミガキ	磨耗
	107	S	壺				2/3	l h	h	優			
	108	S	横瓶	11.2			1/2	h l	m j	優	タタキ		自然釉
	109	H	甕	11.3	4.0	10.5	2/3	e l	e l	良	頸部下一ヨコケズリ 以下一タテケズリ	ナデ	武蔵型甕
	110	H	甕	13.4	7.0	12.5	1/2	b	e	良			カマド 底部磨耗
	111	H	鉢	15.6	8.8	12.2	2/3	c e	e	良	底部一静止ケズリ		
	112	H	甕	25.9			1/4	e	e	良	ケズリ	カキ目→ハケ	磨耗
	113	H	甕	27.8			1/5	e	e	良	ケズリ	カキ目	カマド
B地点1号土壙	114	S	蓋	16.0			1/8	j	j	優	つまみ部一回転ケズリ		
	115	S	坏	14.6	8.2	4.1	1/6	j m	j m	良	底部一糸切		
	116	S	坏		5.8		1/3	h	h	良	底部一糸切		
	117	H	甕	18.8			1/6	e	e	良	カキ目		
	118	H	甕	12.2			1/6	b	b	良			
2号土壙	119	H	坏	12.0	6.5	3.8	3/4	e	ⓐ	良	底部一糸切	ミガキ	
8号住南西隅	120	H	坏	13.4			1/4	b e	b e	良	底部一糸切	ミガキ	高台付
	121	H	甕	11.9	6.7	14.1	完	b e	b e	良	底部一糸切		
	122	H	甕	23.0		30.2	1/2	b e	b d	良	ケズリ	カキ目→ハケ	
B地点検出面・2号溝	123	S	坏	13.2	7.2	4.6	1/2	j	j	良	底部一糸切		
	124	S	坏	12.4	6.4	3.7	1/2	h	h	粗	底部一糸切		
	125	S	坏	13.0	6.8	3.5	1/3	j	j	優	底部一糸切		
	126	K	皿	15.6	8.2	2.6	1/8	h	h	良	施釉ハケぬり	施釉ハケぬり？	高台付
	127	H	坏		5.8		完	e	ⓐ	良	底部一糸切	ミガキ	2号溝
	128	H	坏	11.2	7.0	4.8	1/2	a e	ⓐ	良	底部一ナデ	ミガキ	高台付 2号溝
	129	H	甕	23.0			1/6	e	b e	良		カキ目	
	130	H	甕				1/3	e	e	良	ケズリ→ナデ	ハケ	
D5住	131	S	坏	13.8			1/3	m	m	良			

（表9－5）

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形調整施文 外面	内面	備考
D地点5号住	132	S	坏	12.8	6.2	3.7	4/5	j	j	良	底部—糸切		
	133	S	坏	13.2			1/3	h	h	良			
	134	H	坏	15.6	6.2	5.1	1/2	e	ⓐ	良	底部～周縁回転ケズリ	ミガキ	
	135	H	坏	15.0	2.9	4.9	1/5	h	ⓐ	良	底部～周縁静止ケズリ	ミガキ	
	136	H	坏	13.0	6.4	4.2	1/4	e	ⓐ	粗		ミガキ	磨耗
	137	H	坏	15.4			1/5	d	ⓐ	良		ミガキ	外面黒斑
	138	H	甕	12.2			1/6	b e	b d	良			内面黒斑
	139	H	甕	17.8			1/8	d	d	良		カキメ	
	140	H	甕	24.0			1/8	d	b	良			
	141	H	甕	20.0			1/12	d	d	良		カキメ	内外面炭化物
	142	H	甕	23.4			1/4	b	b	良		カキメ	内外面炭化物
	143	S	鉢	48.7			1/5	j m	m	良	平行タタキ	同心円タタキ	11号住に同一個体
D地点6号住	144	S	坏	14.0			1/4	i	i	粗			磨耗
	145	H	坏	13.0	4.5	4.2	1/5	b	ⓐ	良	底部～周縁静止ケズリ	ミガキ	
	146	H	甕	26.0			1/12	e	e	良	ケズリ	カキメ→ナデ	
	147	H	甕	26.0			1/8	d	b	良		カキメ	
	148	S	甕		8.4		1/2	i	i	粗	底部—糸切		
D地点7号住	149	S	坏	12.6	5.0	3.9	3/4	j	j	良	底部—糸切		
	150	H	坏	15.3	6.6	5.3	3/4	b d	ⓐ	良	底部～周縁静止ケズリ	ミガキ	
	151	H	坏	13.1	5.5	4.2	4/5	b d	ⓐ	良	底部～周縁回転ケズリ（糸切）	ミガキ	磨耗
	152	H	甕	8.2	4.2	8.1	1/2	b e	b d	良	底部～周縁静止ケズリ		外面磨耗
	153	H	甕		5.6		1/3	b	b	良	底部—糸切		
	154	H	甕	13.2	6.6	14.2	1/2	b d	d	粗	胴中以下からケズリ		磨耗
	155	H	甕	16.0			1/4	d	d	良			磨耗
	156	S	鉢	25.0			1/4	e	m	良			酸化焔焼成
	157	H	甕	24.0			1/8	e	b	良	ケズリ	ナデ	
D地点8号住	158	S	四年壺				1/4	j	j	良	タタキ→ナデ		
	159	S	坏	13.4	6.2	4.1	1/6	i	i	粗	底部—糸切		
	160	H	坏	13.0	4.7	4.0	2/3	e	ⓐ	良	底部—糸切	ミガキ	
	161	H	坏	13.2	5.6	3.9	完	e	ⓐ	良	底部—糸切	ミガキ	外面黒斑

（表9－6）

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形 調整 施文 外面	内面	備考
D地点8号住	162	H	坏	13.6	5.0	3.6	3/4	b d f	b f	良	底部一糸切		内面黒斑
	163	H	坏	14.6	5.5	4.4	3/4	e	ⓐ	良	底部一糸切→回転ケズリ	ミガキ	外面黒斑
	164	H	坏		5.2		1/4	a	a	良	底部一糸切		
	165	H	坏	17.0	6.0	5.2	1/2	b	ⓐ	良	底部一糸切		磨耗
	166	H	坏	13.6	5.1	3.9	2/3	b d e	b d e	良	底部一糸切		内面黒斑
	167	S	坏	13.2			1/4	j h	j h	粗			
	168	H	甕	12.8			1/4	d g	d	良			
	169	H	甕	21.6			1/4	e	e	良		カキメ	
	170	H	甕	23.6			1/4	e	e	良		カキメ	
	171	H	甕	22.4			1/4	d	d	良			
	172	H	甕	23.6			3/4	e	e	良	タタキ→ケズリ	押さえ痕→カキメ→ハケ	外面黒斑
D地点9号住	173	S	坏	12.0	6.2	3.7	1/8	m	m	優	底部-糸切		
	174	S	坏	12.8	5.4	3.9	3/4	j	j	良	底部一糸切		
	175	S	坏	12.9	5.5	3.7	3/4	j m	j m	優	底部一糸切		
	176	S	坏	13.6	7.0	3.6	7/8	j h	j h	良	底部一糸切		
	177	S	坏		6.0		1/5	h	h	粗	底部一糸切		
	178	S	坏		8.0		1/6	j	j	良			高台付
	179	H	坏	15.4			1/5	e	ⓐ	良		ミガキ	磨耗
	180	H	坏	11.7	5.6	4.3	5/8	e	ⓐ	良	底部一糸切	ミガキ	磨耗
	181	H	坏				1/5	e	ⓐ	良		ミガキ	高台付
	182	S	壺				1/2	j	j m	良			
	183	H	甕	17.8			1/4	d	d	良	ケズリ	ナデ	
	184	H	甕	21.2			1/5	d	b	良	ケズリ	カキメ→ハケ	
D地点10号住	185	S	坏	12.8	5.6	3.4	1/3	i	i	粗	底部一糸切		
	186	S	坏	13.1	5.7	4.3	2/3	h	h	良	底部一糸切		
	187	S	坏		8.6		完	j	m	良	底部一糸切→回転ケズリ		高台付
	188	H	坏	12.6	6.0	4.3	1/2	b e	ⓐ	良	底部～周縁静止ケズリ	ミガキ	磨耗
	189	H	坏		5.4		1/2	e	ⓐ	良	底部～周縁静止ケズリ（糸切）	ミガキ	
	190	H	甕	23.0			1/8	e	e	良			
	191	H	甕	21.4		30.0	1/3	c d	b c	良	ケズリ	カキメ→ハケ	外面赤変

（表9－7）

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形調整施文 外面	内面	備考
D地点11号住	192	S	坏	14.2	7.0	4.6	1/8	i/h	h	粗	底部一糸切		
	193	S	坏		5.6		1/2	h	h	粗	底部一糸切		
	194	K	埦		9.2		1/4	h	h	良	底部一回転ケズリ	施釉、ハケぬり？	高台付
	195	K	埦	18.2			1/5	h	h	良		施釉、ハケぬり？	
	196	H	皿	11.0	6.6	2.7	4/5	c/d/e	a/e	良		ミガキ	高台付 内外面黒斑
	197	H	坏				1/2	d	ⓐ	良	底部一回転ケズリ	ミガキ	高台付
	198	H	坏	13.0	6.0	4.9	1/2	e	b/e	良	底部～周縁 静止ケズリ（糸切）	ミガキ	内外面黒斑
	199	S	坏	12.6	5.8	4.0	1/4	i/h	h	粗	底部一糸切		
	200	H	坏	13.6			1/4	b	ⓐ	良		ミガキ	高台付？
	201	K	壺				1/5	h	h	良	施釉上半部		
	202	H	甕		5.8		1/3	e	e	良	底部一糸切		
	203	H	甕		5.6		1/4	b	b	良	底部一糸切		
	204	H	甕		2.4		完	d	a	良	ケズリ→ナデ		磨耗
	205	H	甕	9.8			1/8	b	e	良			
	206	H	甕	23.8			1/4	b	b	良		カキメ	内面黒斑
D地点13号住	207	S	坏	12.0	5.0	4.0	1/2	h	h	粗	底部一糸切		燈芯痕
	208	S	坏	11.4	5.4	4.2	1/4	h	j/h	粗	底部一糸切		磨耗
	209	S	坏	13.6	4.0	4.1	完	h/i	h/i	粗	底部一糸切		黒斑 磨耗、カマド
	210	S	坏	13.4	5.4	3.9	3/4	h/m	l/m	粗	底部一糸切		黒斑 カマド
	211	S	坏	13.4	6.2	3.9	1/4	h	l	粗	底部一糸切		内外面黒斑
	212	H	皿	12.2			3/4	e/g	ⓐ	良	底部一回転ケズリ		高台付
	213	H	皿	15.0	8.0	3.3	5/8	ⓐ	ⓐ	優	ミガキ	ミガキ	高台付 カマド
	214	H	坏		6.8		1/3	ⓐ	ⓐ	優	ミガキ 底部一回転ケズリ	ミガキ	高台付
	215	H	皿				4/5	ⓐ	ⓐ	良	ミガキ 底部一回転ケズリ	ミガキ	高台付
	216	H	坏	14.0	6.0	4.6	1/2	d	ⓐ	良	底部一糸切	ミガキ	ピット内
	217	H	坏	14.4	5.6	4.6	2/3	e	ⓐ	粗	底部一糸切	ミガキ	
	218	H	坏	13.4	6.8	4.4	5/8	d	ⓐ	良	底部一糸切		
	219	S	壺		7.0		1/4	i/j	j	優			高台付 自然釉
	220	S	壺		10.6		1/2	j/h	h	良			高台付
	221	S	壺				3/4	j	j	良			高台付

（表９－８）

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形 調整 施文 外面	内面	備考
D地点13号住	222	H	甕	13.5			1/5	e	b	良		カキ目	カマド
	223	H	甕	12.7	6.8	12.7	1/4	e	e	粗	底部一糸切		カマド
	224	H	甕	14.8			1/4	e	b	良			磨耗
	225	H	甕		6.0		1/2	e	e	優	底部一糸切		カマド内
	226	H	甕		7.6		1/2	b	c	良	底部付近一ケズリ 底部一静止ケズリ		内外面に黒斑 カマド内
	227	H	甕		3.0		完	bc	b	粗	ケズリ	ハケ	
	228	H	甕	18.6			1/4	e	e	粗	頸部下ヨコ方向ケズリ		武蔵型カメ
	229	H	甕	24.0			1/5	d	d	良		カキ目	カマド 横ピット
	230	H	甕	24.0			1/8	d	bd	良		ナデ	カマド
	231	H	甕	24.8			1/5	c	a	良		カキ目	カマド
	232	H	甕	23.2			1/9	d	e	良		ハケ	
	233	H	甕	26.6			1/8	e	c	粗		カキ目	
	234	H	甕	24.6			1/4	e	e	粗	ケズリ	カキ目	カマド
	235	H	把手				完	d	d	良			
D地点12号住	236	S	坏	13.0	5.6		5/6	h	h	粗	底部一糸切		
	237	S	坏	13.0	6.0	3.4	1/2	h	h	良	底部一糸切		
	238	K	埦		6.4		1/4	g	g	良	底部一回転ケズリ	施釉	
	239	S	壺				3/4	m	m	優			
	240	S	壺		7.6		完	j	h	良			高台付
	241	S	壺		6.8		2/3	l	j	良	底部一回転ケズリ		高台付
	242	S	甕	46.8			1/6	h	h	良	平行タタキ→ロクロナデ		
	243	S	甕	46.4			1/8	j	j	良			
	244	H	坏		7.9		完	e	ⓐ	良		ミガキ	高台付
	245	H	坏	12.0	6.0	4.2	1/2	e	ⓐ	良	底部一糸切	ミガキ	
	246	H	坏	13.0	6.0	3.9	3/4	ad	ⓐ	良	底部～周縁 回転ケズリ	ミガキ	
	247	H	坏	13.8	6.8	5.1	完	e	ⓐ	良	底部～周縁 回転ケズリ（糸切）	ミガキ	
	248	S	坏	13.4	7.7	4.2	1/2	i	i	粗	底部一糸切		
	249	H	坏	12.0			1/4	ad	ⓐ	良	底部～周縁 静止ケズリ	ミガキ	ピット内
	250	H	坏	10.6			1/3	ad	ⓐ	良		ミガキ	カマド横 ピット
	251	H	鉢	28.4			1/4	e	d	良	ケズリ	カキ目	内外面黒斑

（表9－9）

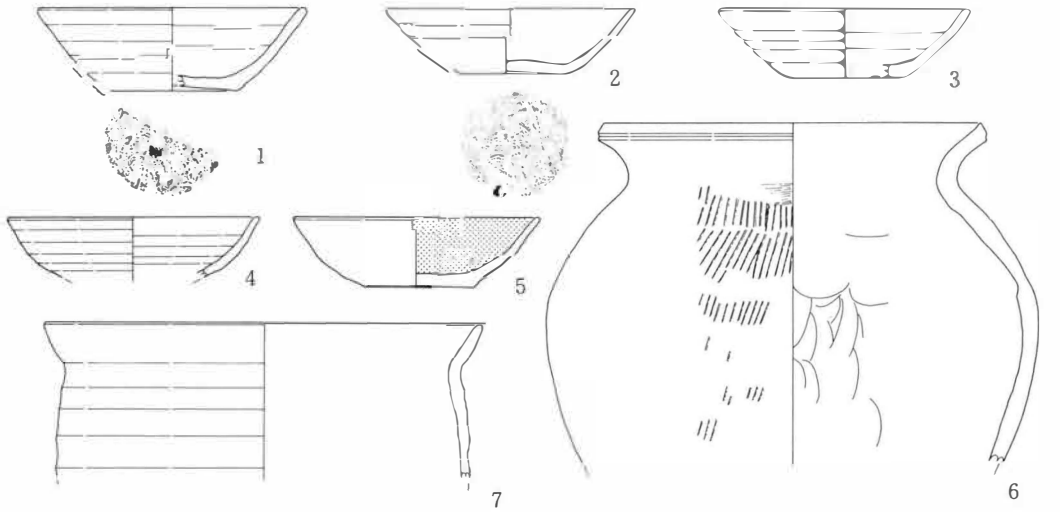
出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形 調整 施文 外面	内面	備考
D地点12号住	252	H	甕	13.4			1/6	e	b	良			
	253	H	甕	11.0			1/3	e	be	良			カマド横ピット
	254	H	甕	13.8			1/5	e	c	良			カマド横ピット
	255	H	甕	13.2			1/3	e	b	良			
	256	H	甕	20.0			1/4	e	e	良		カキ目	
	257	H	甕	23.0			1/8	c	c	良		カキ目	カマド横ピット
	258	H	甕	24.4			1/5	c	ce	良			
	259	H	甕	26.0			1/6	c	c	良		カキ目	カマド横ピット
D地点14号住	260	S	坏	13.2	6.0	3.4	1/3	j	j	良	底部—糸切		
	261	S	坏	13.6	6.2	3.2	完	h	h	粗	底部—糸切		磨耗 カマド
	262	S	坏	12.2	6.2		完	h	h	粗	底部—糸切		
	263	S	坏		8.7		1/4	j	j	良	底部—糸切		高台付
	264	S	蓋				1/2	mh	jm	粗	回転ケズリ		
	265	S	蓋				1/2	m	m	良	回転ケズリ		
	266	S	甕	23.4			1/3	j	j	良			カマド及び周辺
	267	S	壺				1/2	lj	j	良			
	268	S	壺				1/2	j	h	粗			
	269	H	皿	12.4			1/4	ⓐ	ⓐ	良	ミガキ	ミガキ	
	270	H	皿	15.6	6.5	2.6	1/2	e	ⓐ	良	底部—糸切	ミガキ	高台付
	271	H	皿	15.4			4/5	e	ⓐ	良	底部—糸切	ミガキ	高台付
	272	H	坏	14.3	7.3	5.7	1/3	e	ⓐ	良		ミガキ	高台付
	273	H	坏	16.8			1/3	e	ⓐ	良			高台付
	274	H	坏		6.3		1/3	ⓐ	ⓐ	良	ミガキ	ミガキ	高台付
	275	H	坏	13.0	4.8	4.4	1/5	e	ⓐ	良	底部—糸切	ミガキ	外面口縁に黒斑
	276	H	甕	12.6			1/3	e	e	良	頸部下ヨコ方向ケズリ	ナデ	武蔵型甕
	277	H	甕	12.5	6.5	13.5	完	d	d	良	頸部下—カキ目 底部—糸切		
	278	H	甕	10.4			1/8	be	c	良			
	279	H	甕		5.5		完	e	e	良	底部—糸切		
	280	H	甕		6.4		完	e	e	良	底部—糸切		
	281	H	甕	13.8			1/4	e	e	良			

(表 9—10)

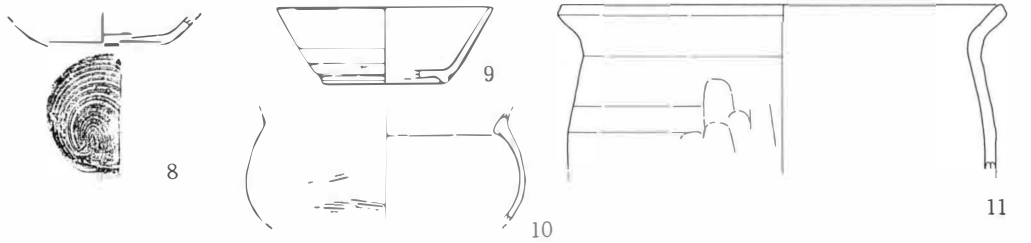
出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形調整施文 外面	内面	備考
14号住	282	H	甕	22.4			1/6	c	b	良	ケズリ	カキ目	
	283	H	甕	24.6			1/4	c	c	良			
D地点 15号住	284	S	坏	13.0	6.0	3.8	完	h	h	良	底部一糸切		カマド
	285	S	坏	12.6			1/4	j	j	良			
	286	S	坏	12.6	6.0	3.4	1/4	m	m	良	底部一糸切		
	287	S	坏	13.2	5.6	4.5	5/8	i	i	良	底部一糸切		内外面黒斑有
	288	S	坏	13.4			1/4	j	j m	良	底部一糸切		
	289	S	坏		9.8		1/4	j	j	粗			高台付
	290	S	壺				1/2	l j	j	優			高台付
	291	S	壺		10.2		1/4	j	j	良			高台付
	292	S	壺		15.0		1/4	j	h	優			高台付
	293	H	坏	17.2			1/4	b d	ⓐ	良		ミガキ	
	294	H	坏	14.6	7.2	4.3	1/3	d	ⓐ	粗	底部一静止ケズリ	ミガキ	
	295	H	坏		5.8		1/4	d	ⓐ	良	底部一糸切	ミガキ	
	296	H	甕		7.2		1/2	b	a	粗	庭部一糸切		
	297	H	甕	24.6			1/2	d	b	良		カキメ	カマド周辺
	298	H	甕	22.0			1/2	b d f	b	粗	ケズリ	カキメ→ハケ	
	299	H	甕	21.4			1/4	d	b	良	ケズリ	カキメ	
D地点集石土坑	300	S	蓋	16.7		3.6	3/4	i	i	良	つまみ部一回転ケズリ		
	301	S	坏	12.4			1/12	m	m	優			
	302	H	坏	10.0	6.0	3.3	1/2	e	e	良	ナデ→静止ケズリ	ミガキ	ロクロ未使用
	303	H	甕	21.3			1/4	e	e	良	ケズリ	カキメ	
	304	H	甕	20.4	9.0		1/2	b	b	良	ケズリ	ナデ	堀り込み遺構
D地点検出面	305	S	坏		7.5		1/3	h	h	粗			高台付
	306	H	坏	11.4			完	d	ⓐ	良	ミガキ	ミガキ	高台付
	307	H	坏	16.0	7.0		1/3	f	b	良	底部～周縁 回転ケズリ	ミガキ	
	308	H	甕	25.2			1/4	d	d	良	ケズリ	まもう	
	309	H	甕	23.8			1/4	e	e	良		ナデ	
	310	H	甕	18.0			1/5	e	e	良		カキメ	
	311	H	甕	23.0			1/5	b d	b	粗	ケズリ	底部近く一ナデ	

(表9—11)

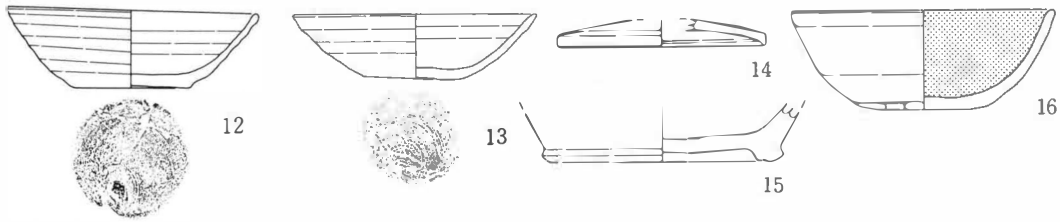
2 号住



10号住



16号住



18号住

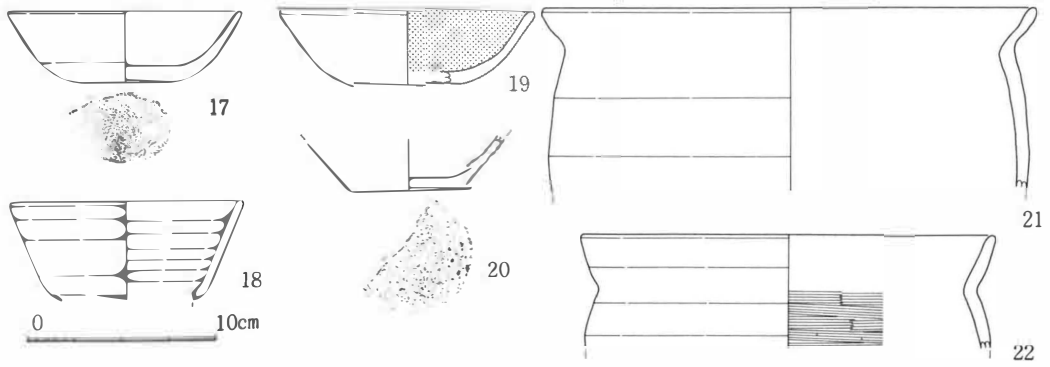


図68　B地点2号住、10号住、16号住、18号住 出土土器

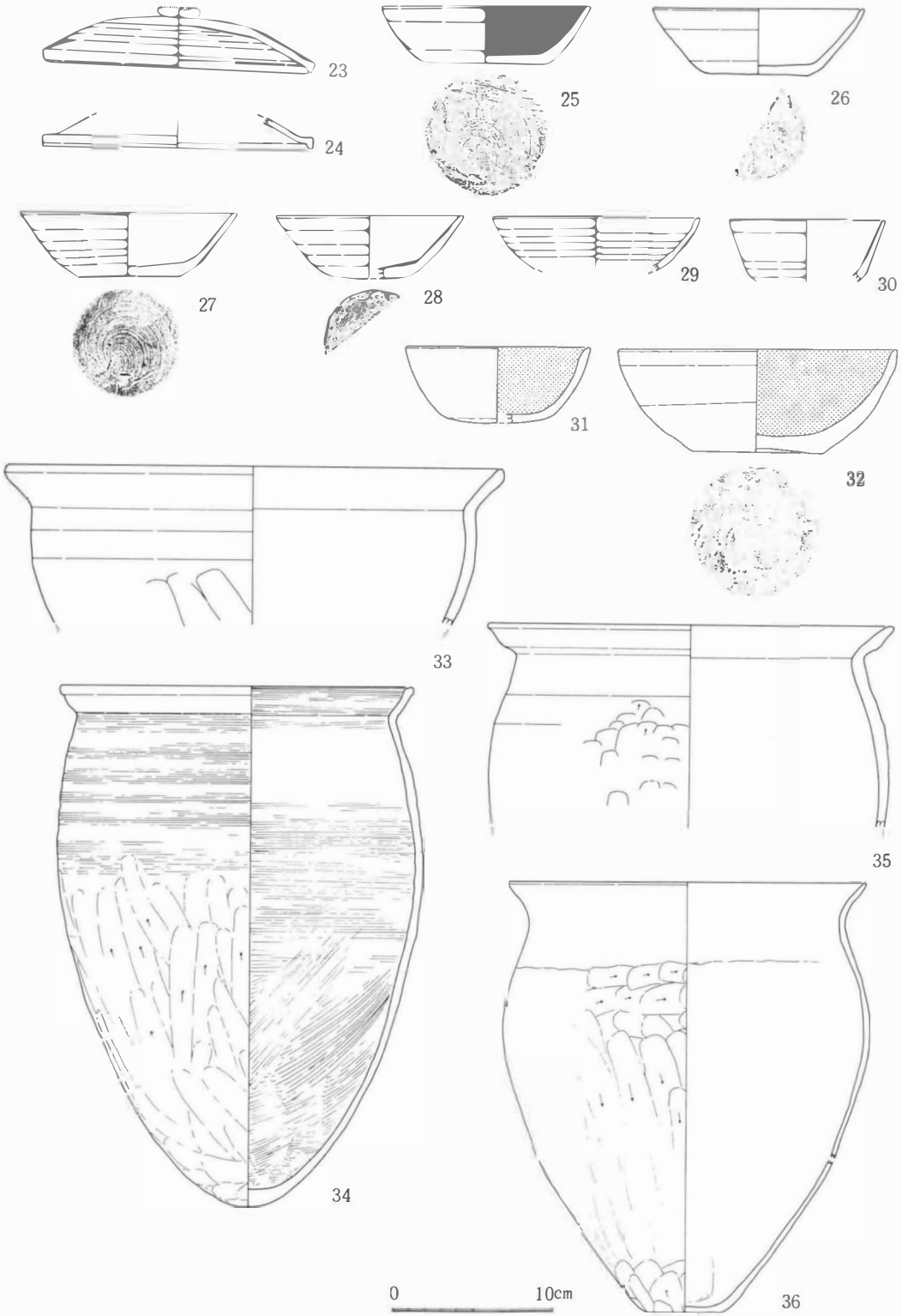


図69　B地点5号住出土土器

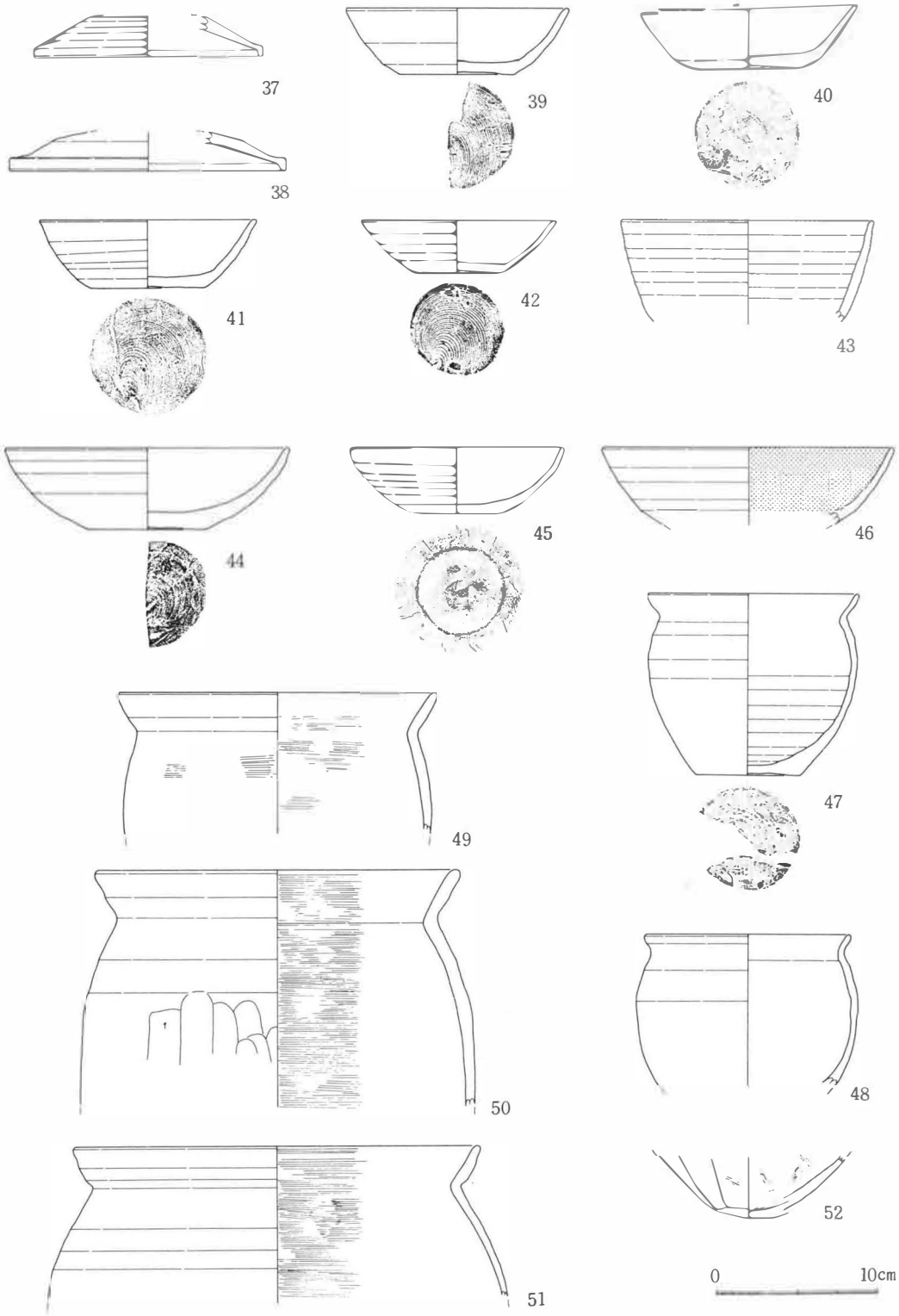


図70　B地点7号住出土土器

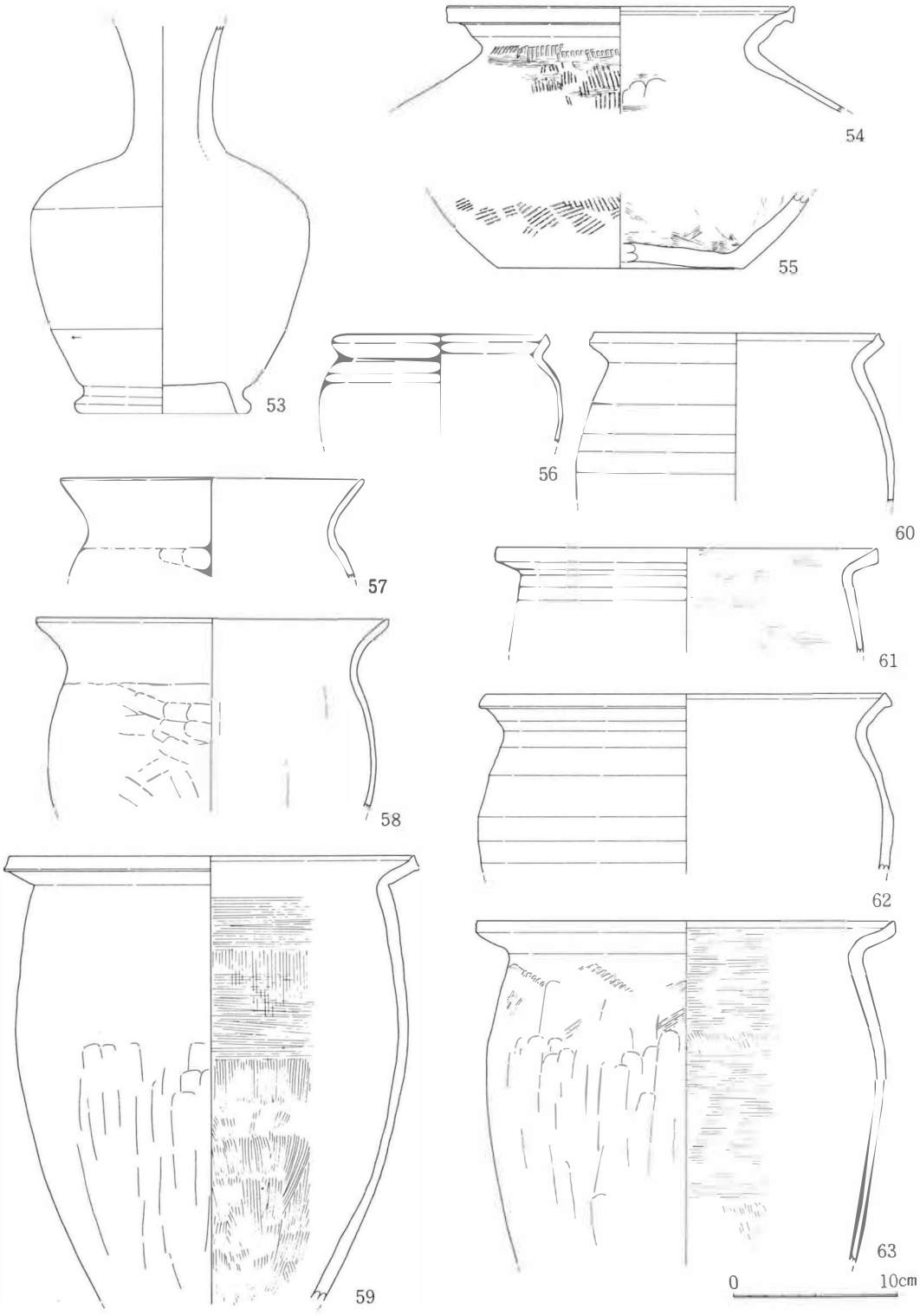
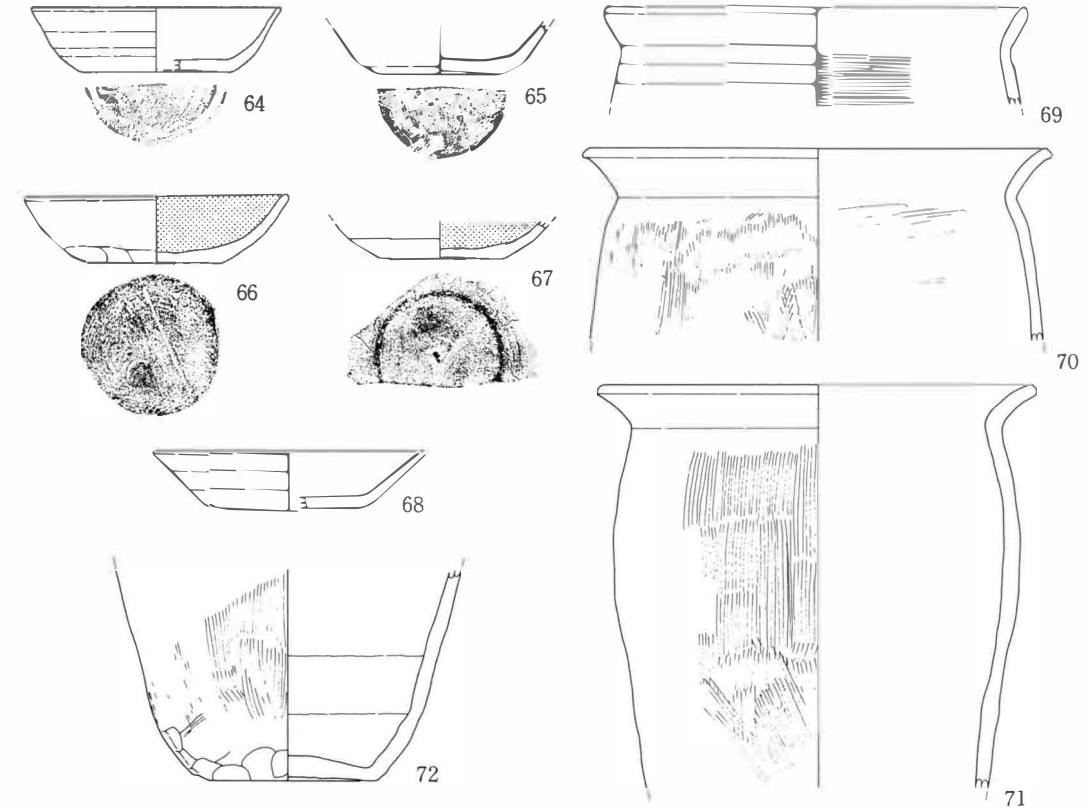


図71　B地点11号住出土土器

20号住



22号住

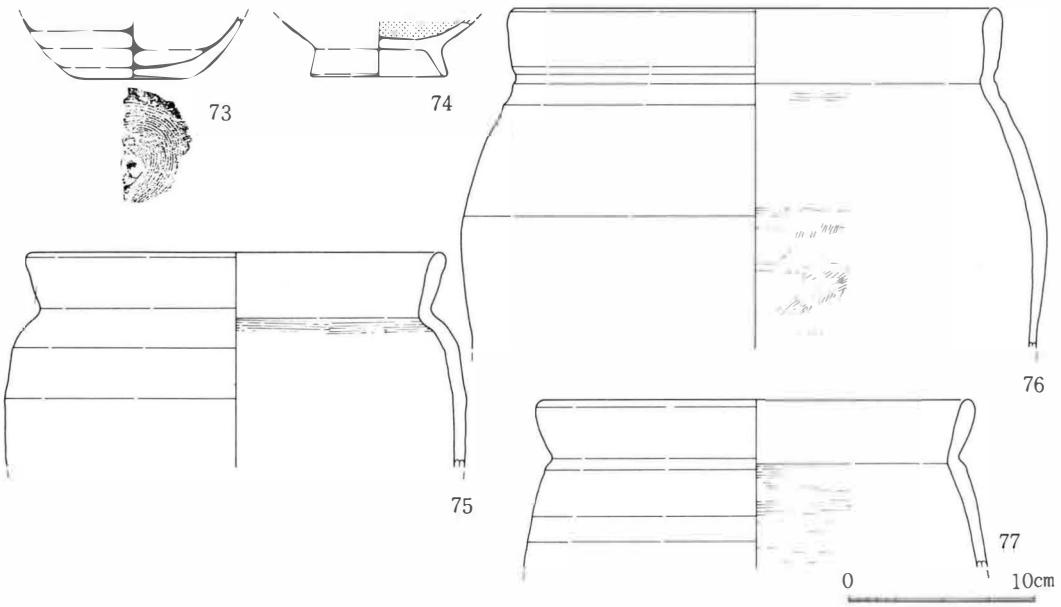


図72　B地点20号住、22号住出土土器

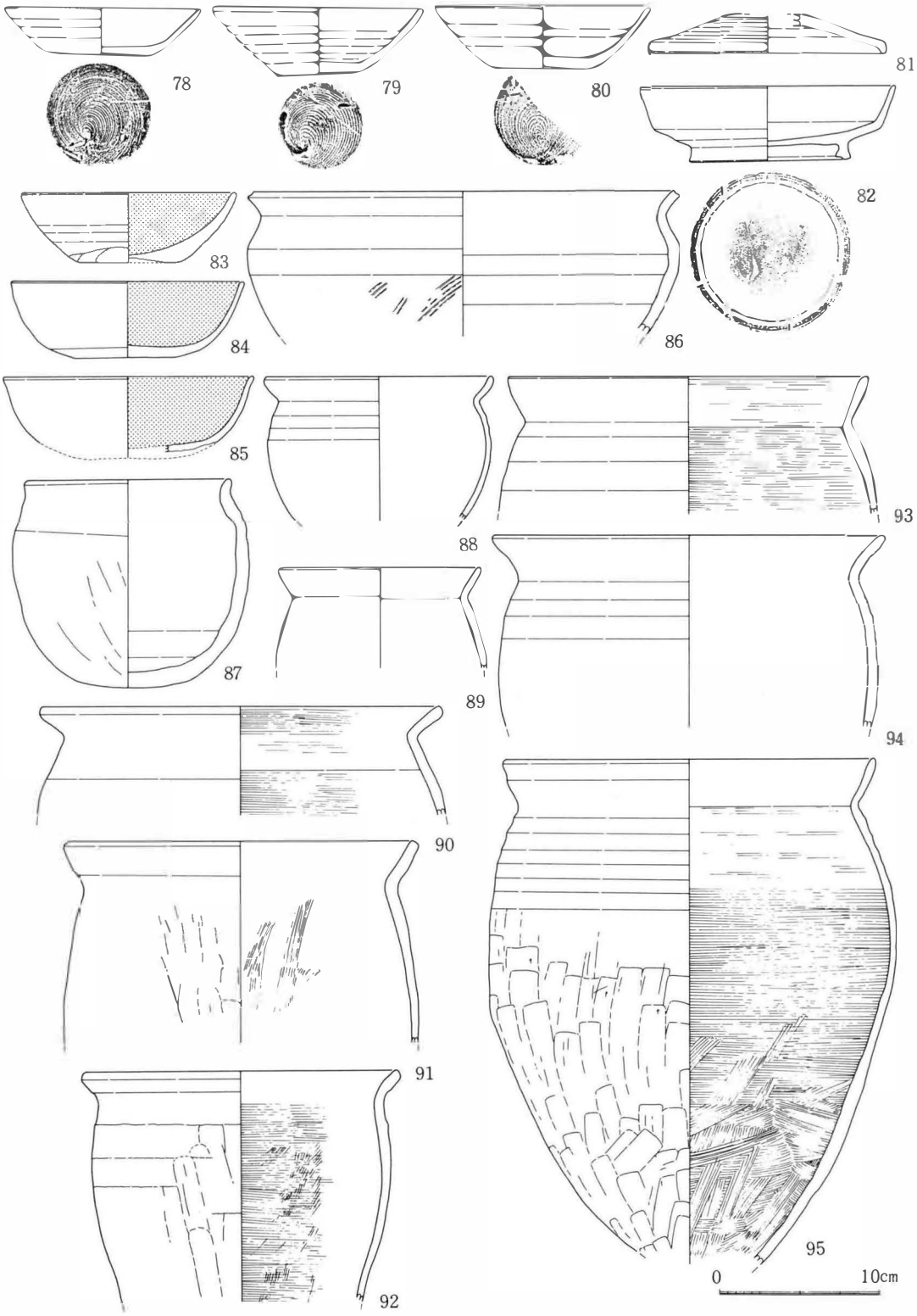


図73　B地点21号住出土土器

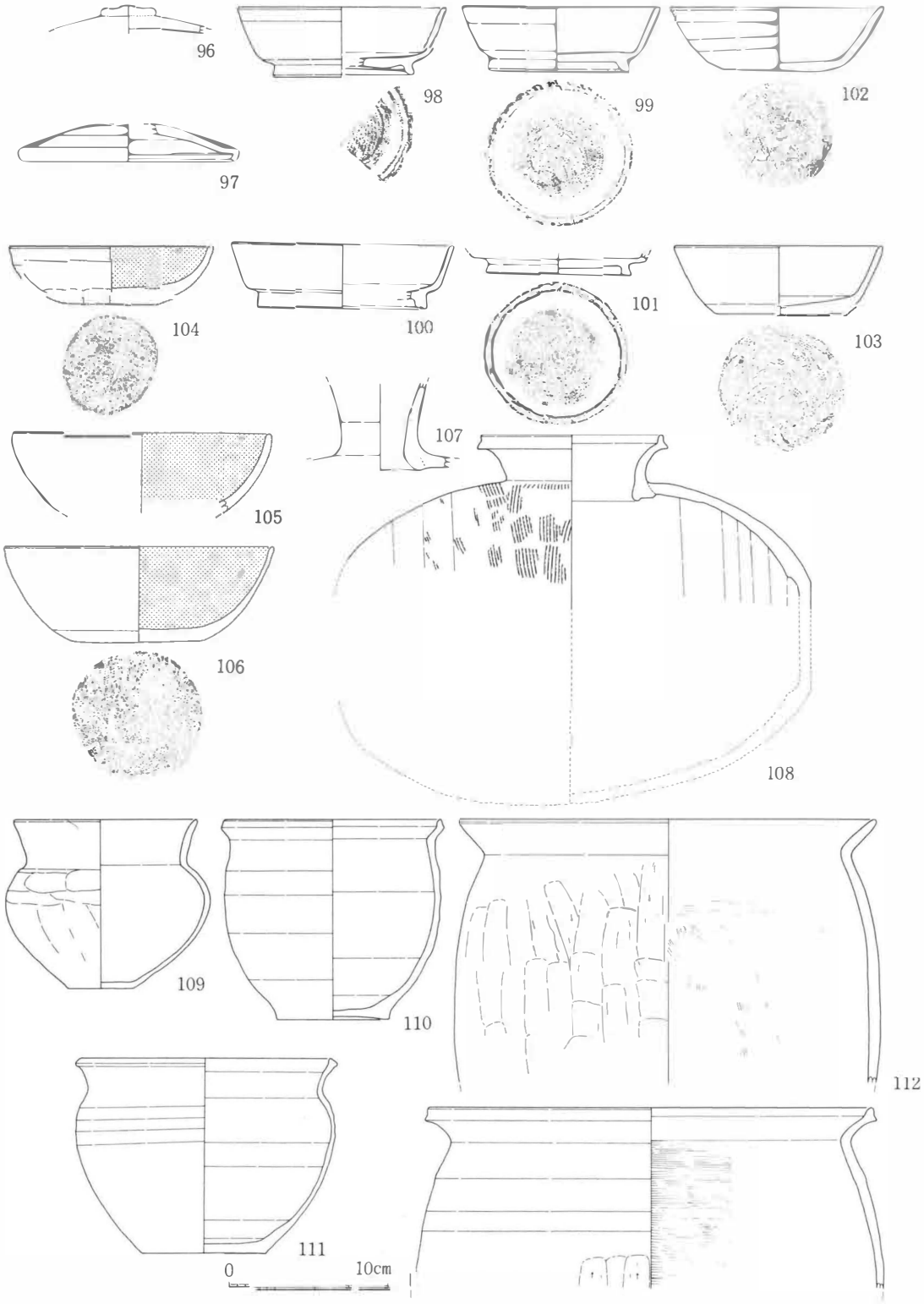


図74　B地点23号住出土土器

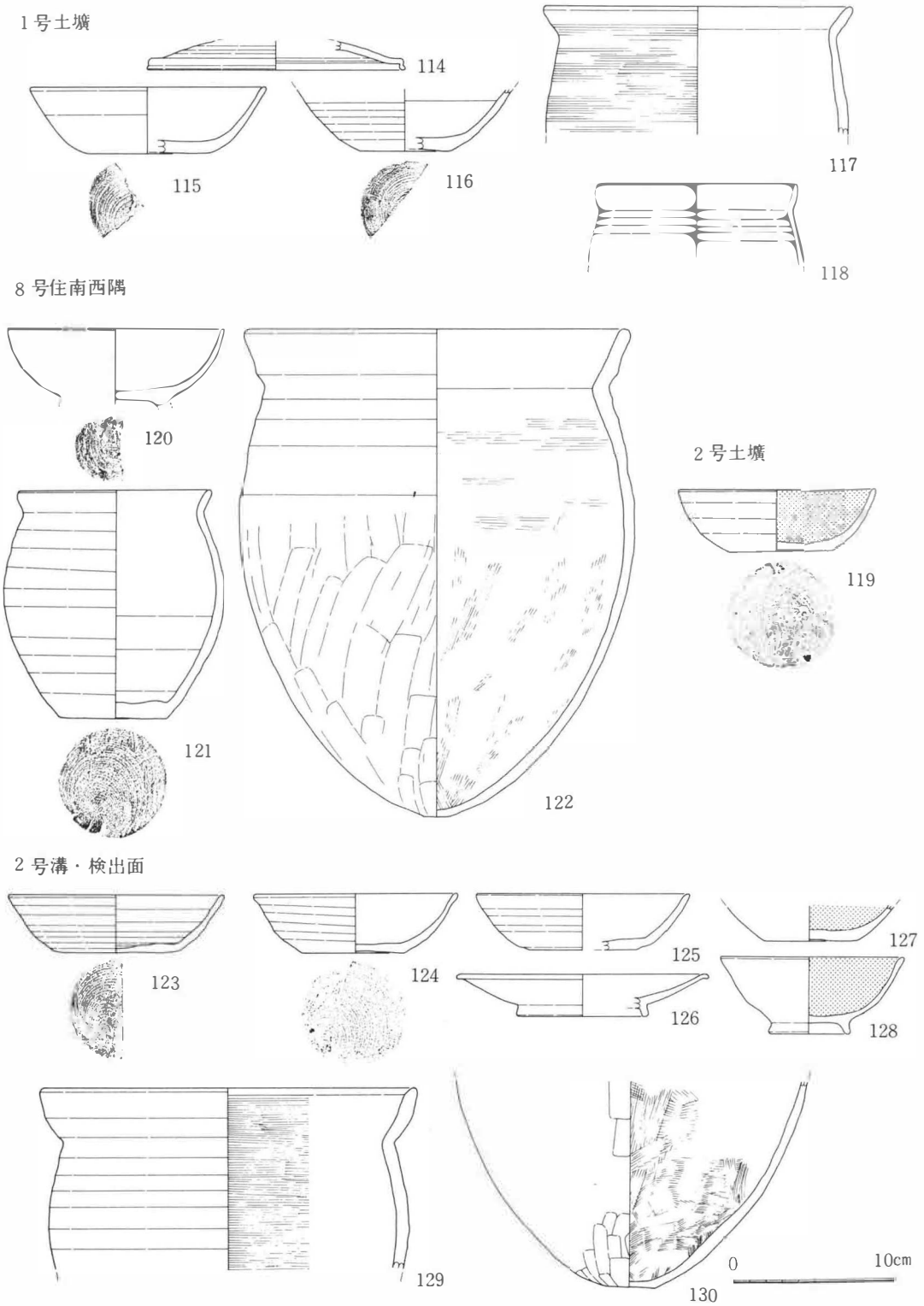


図75　B地点1号土壙、2号土壙、8号住南西隅、2号溝、検出面出土土器

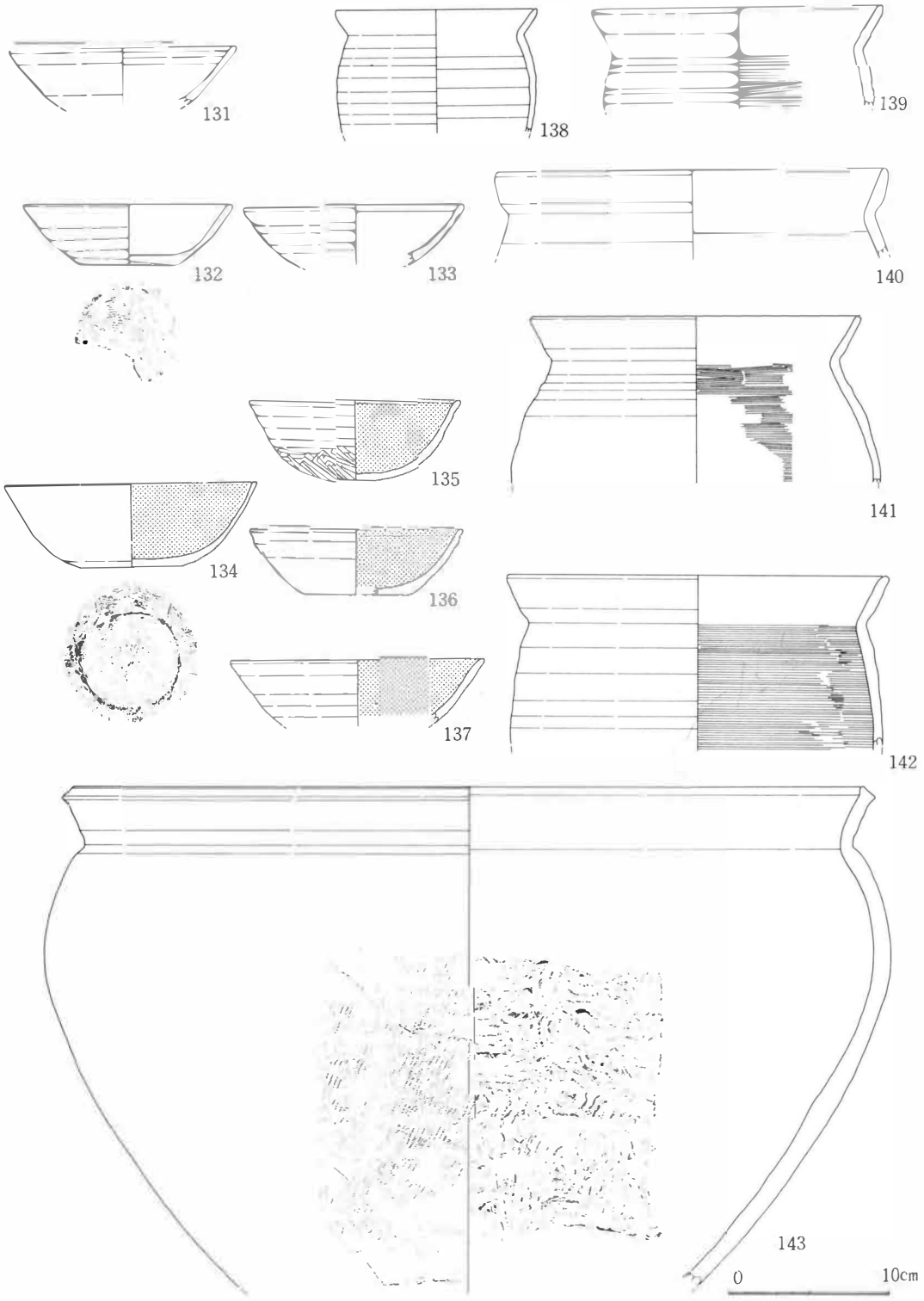
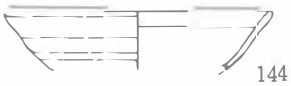
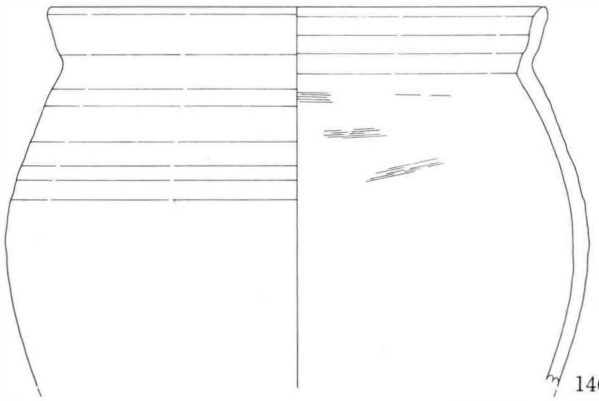
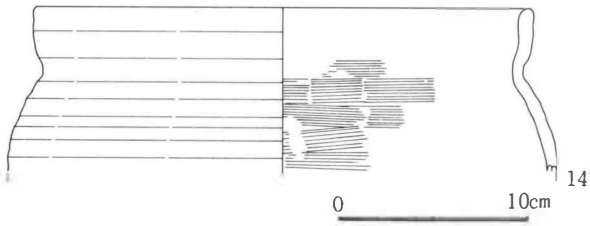


図76　D地点5号住出土土器

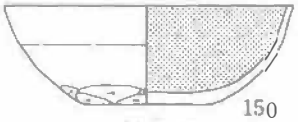
6号住

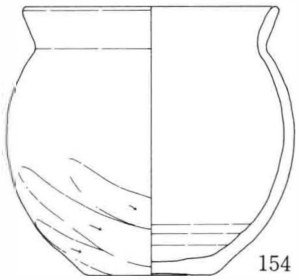


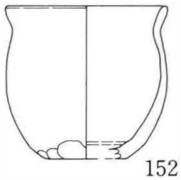


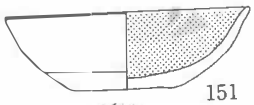


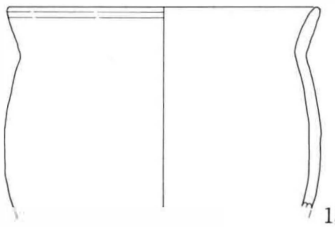
7号住

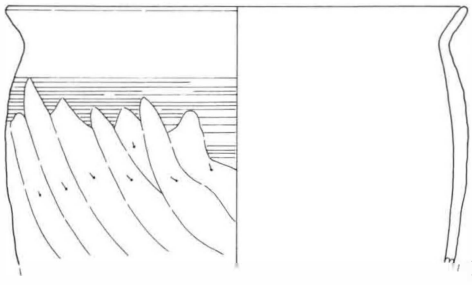












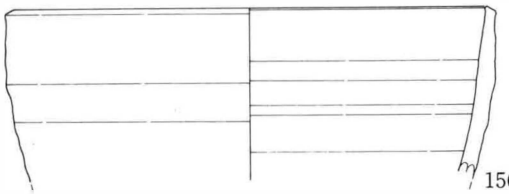


図77　D地点6号住・7号住出土土器

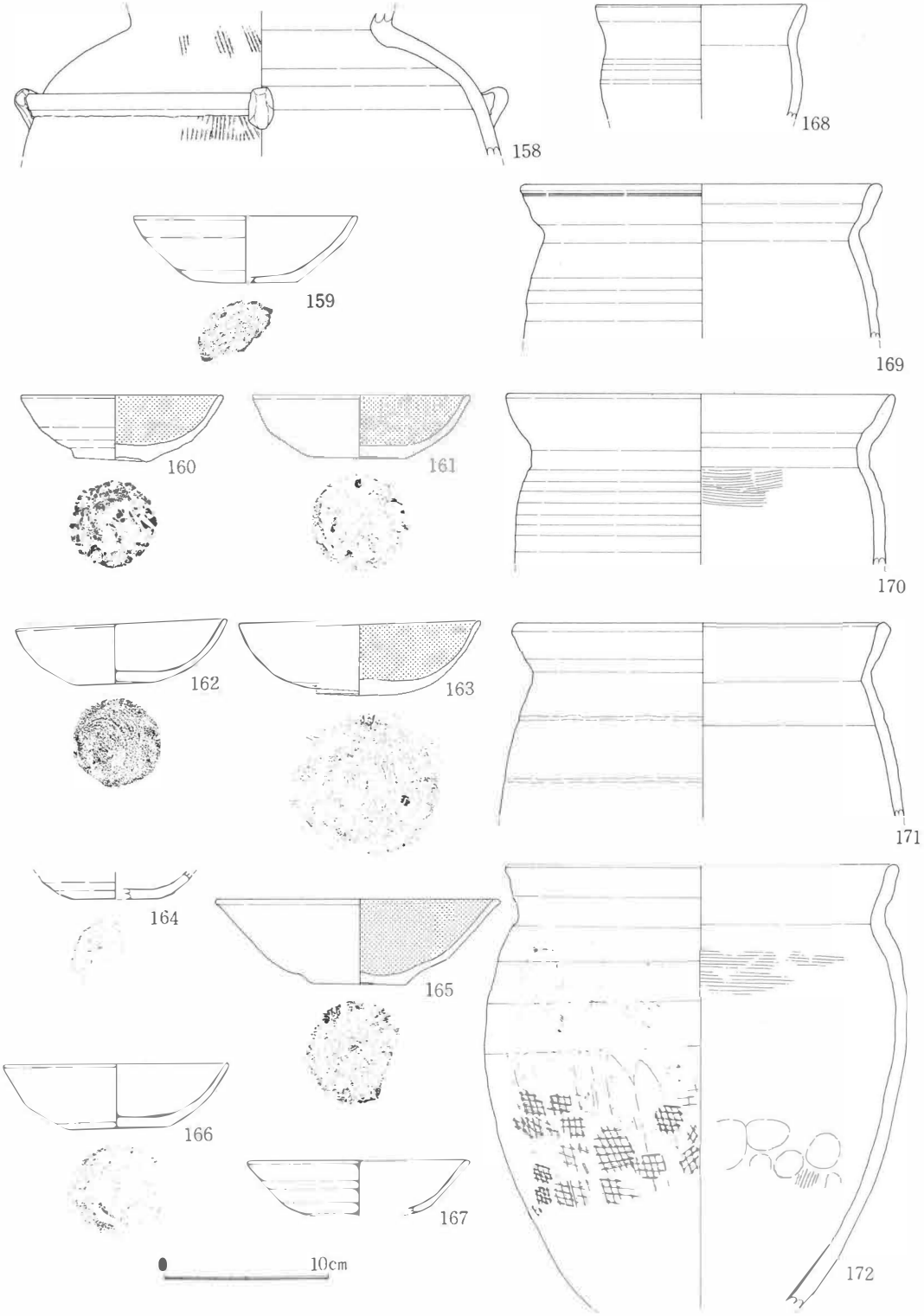
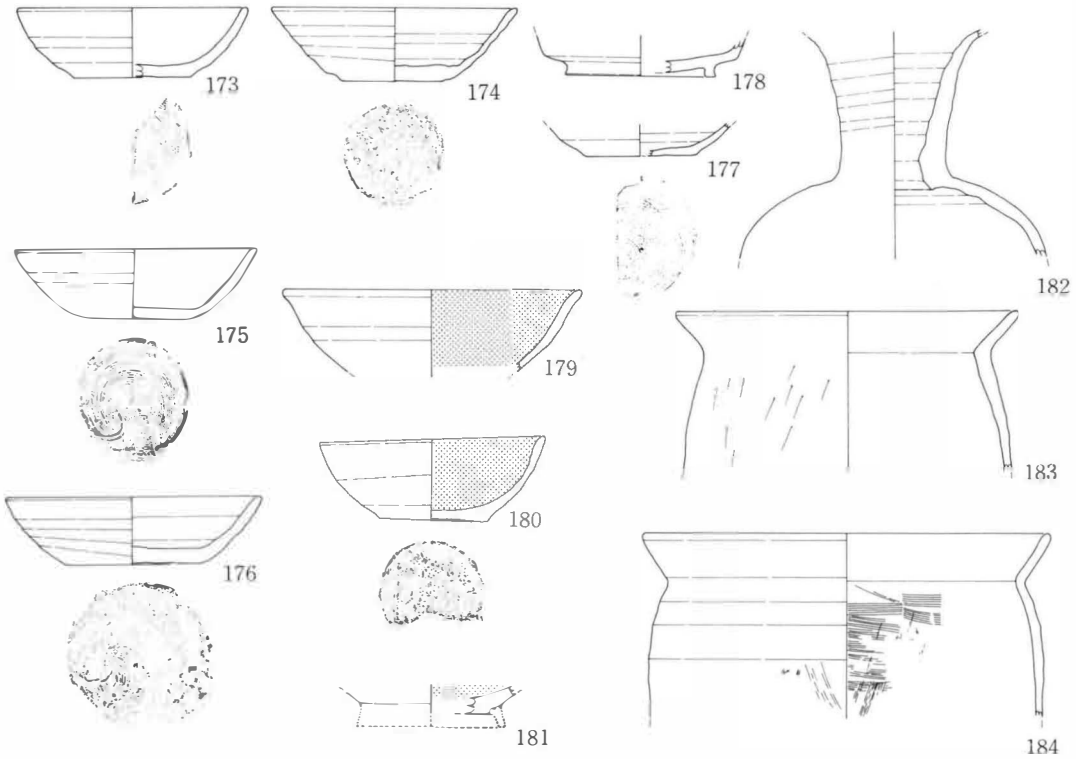


図78　D地点８号住出土土器

9号住



10号住

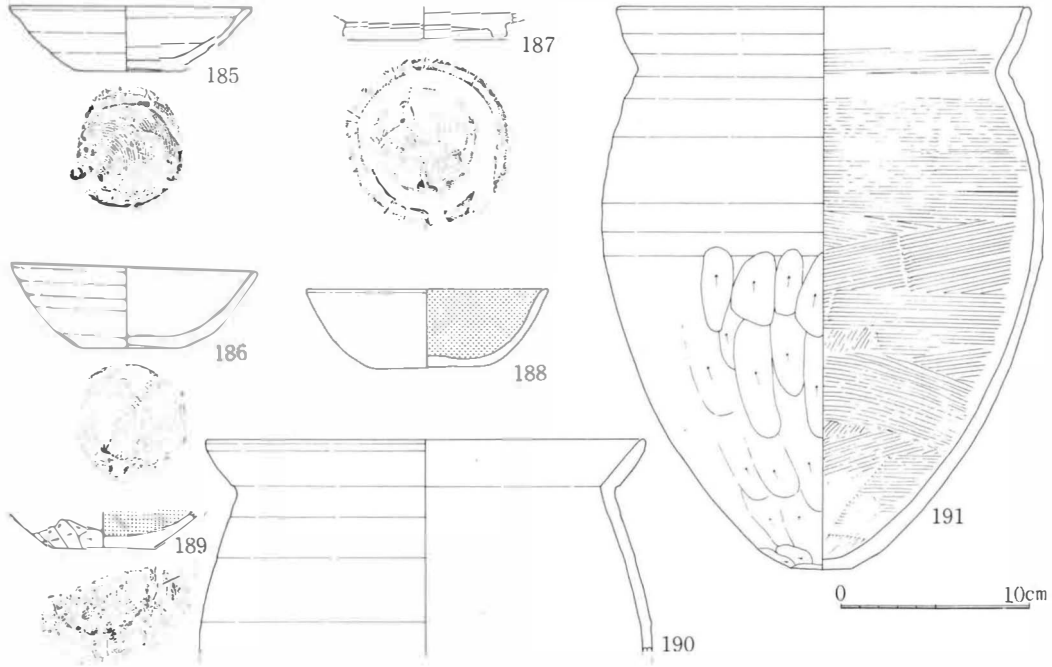
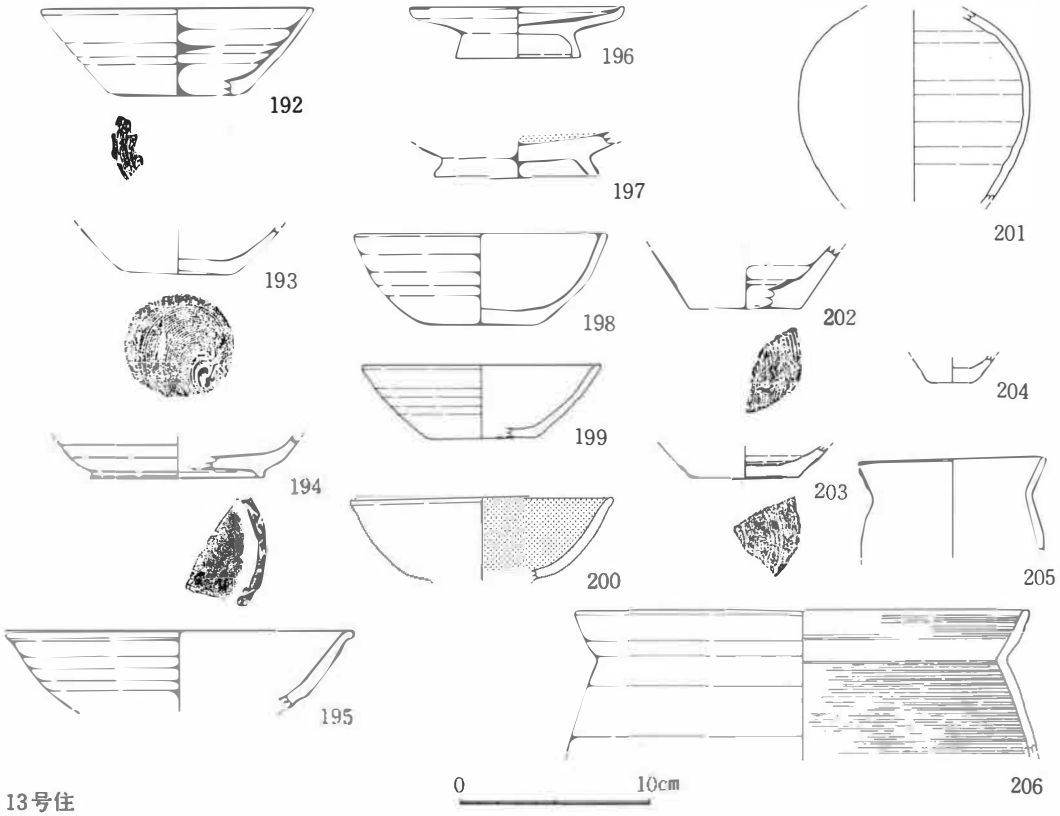


図79　D地点9号住・10号住出土土器

11号住



13号住

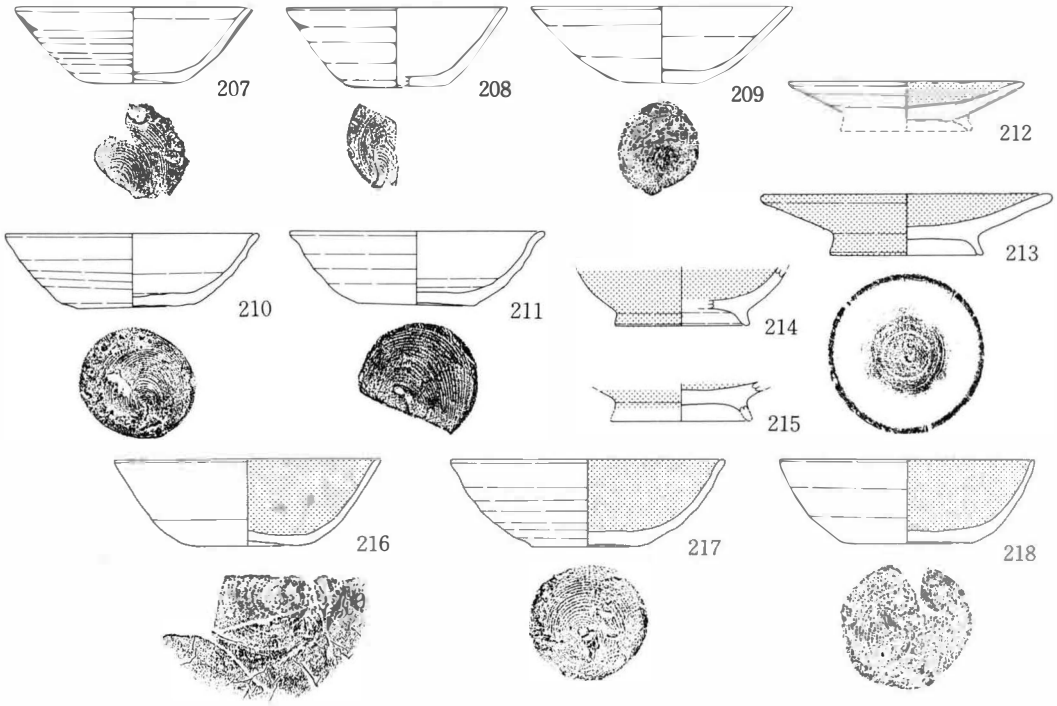


図80　D地点11号住、13号住(1)出土土器

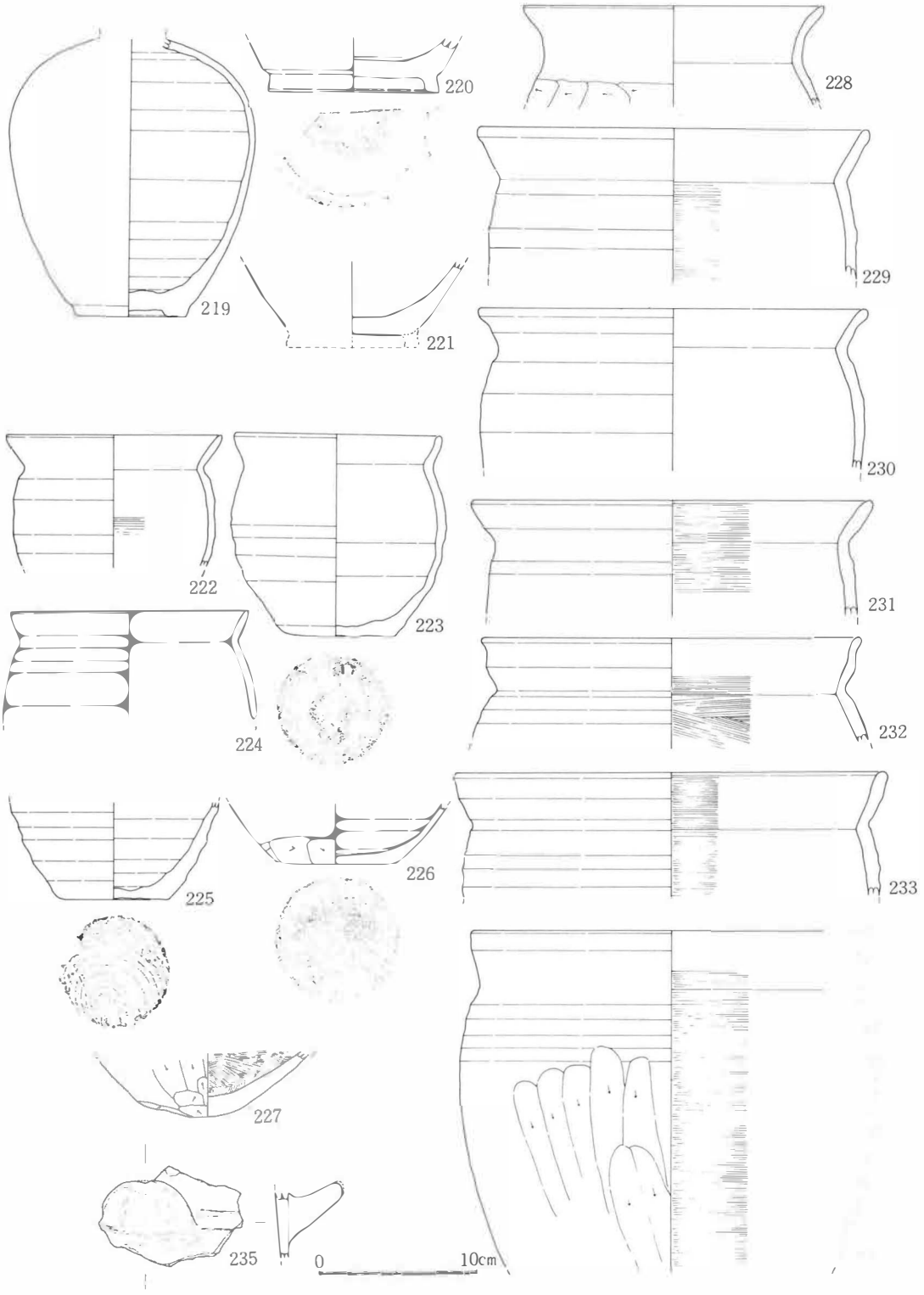


図81　D地点13号住(2)出土土器

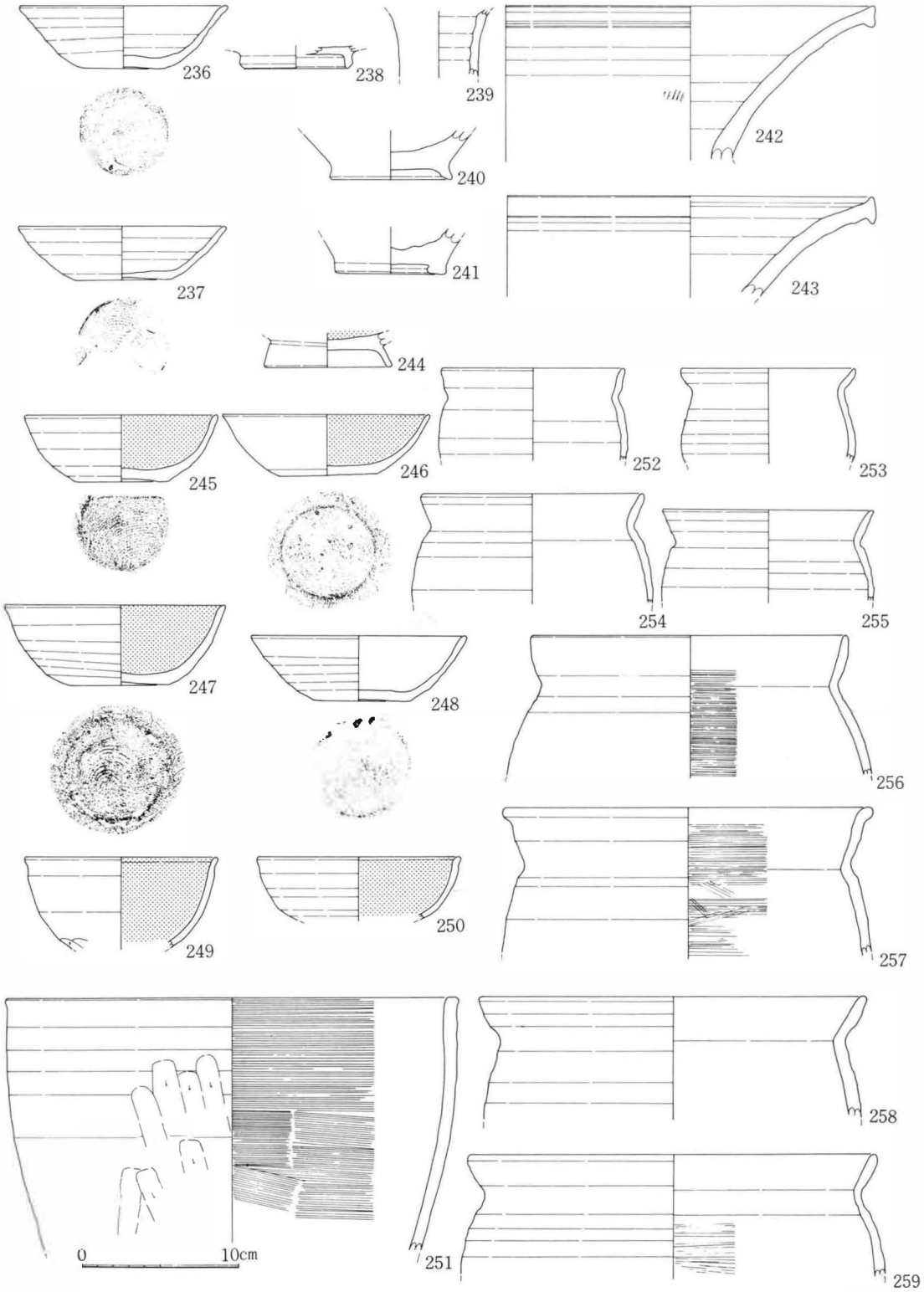


図82　D地点12号住出土土器

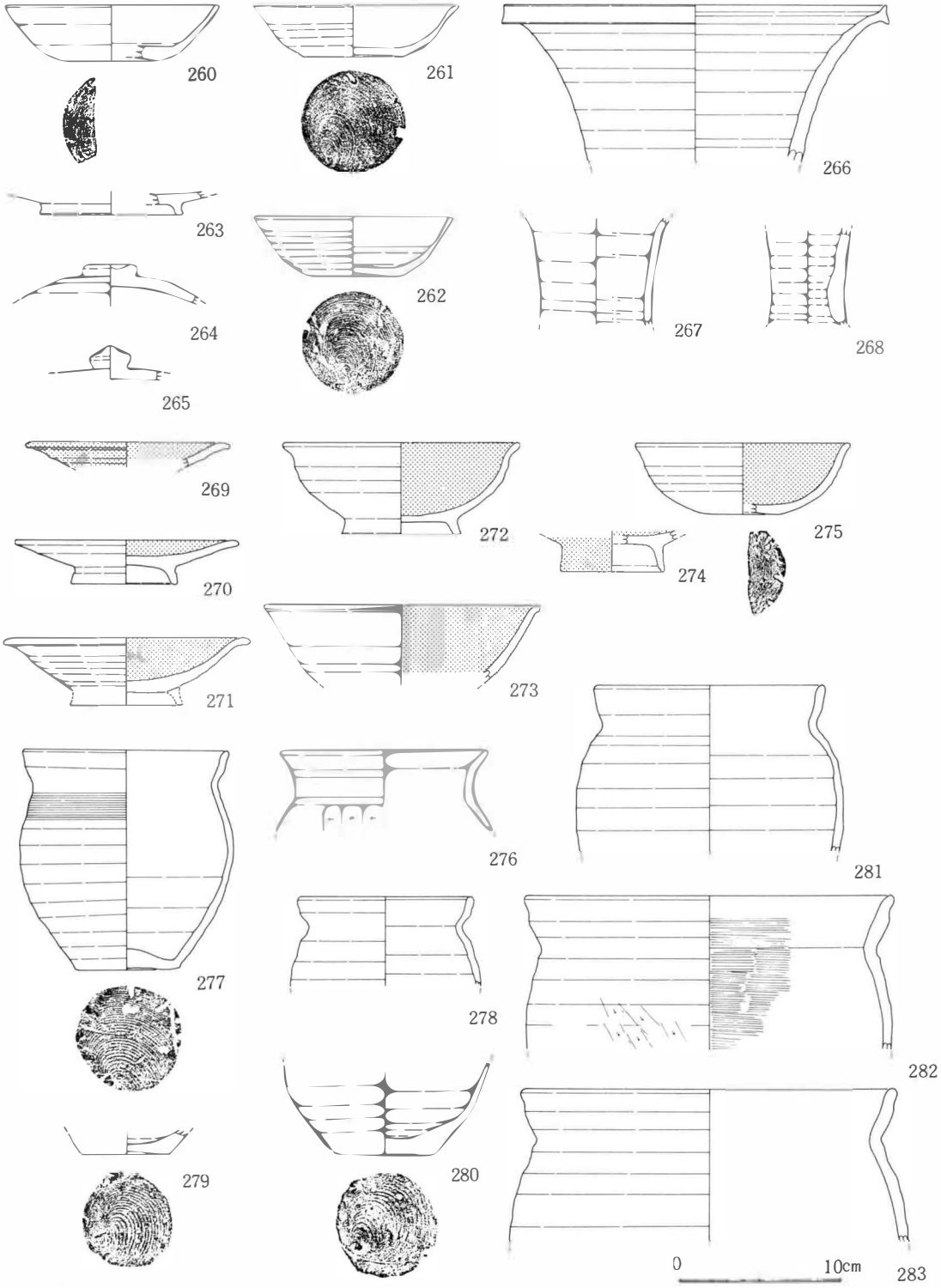


図83　D地点14号住出土土器

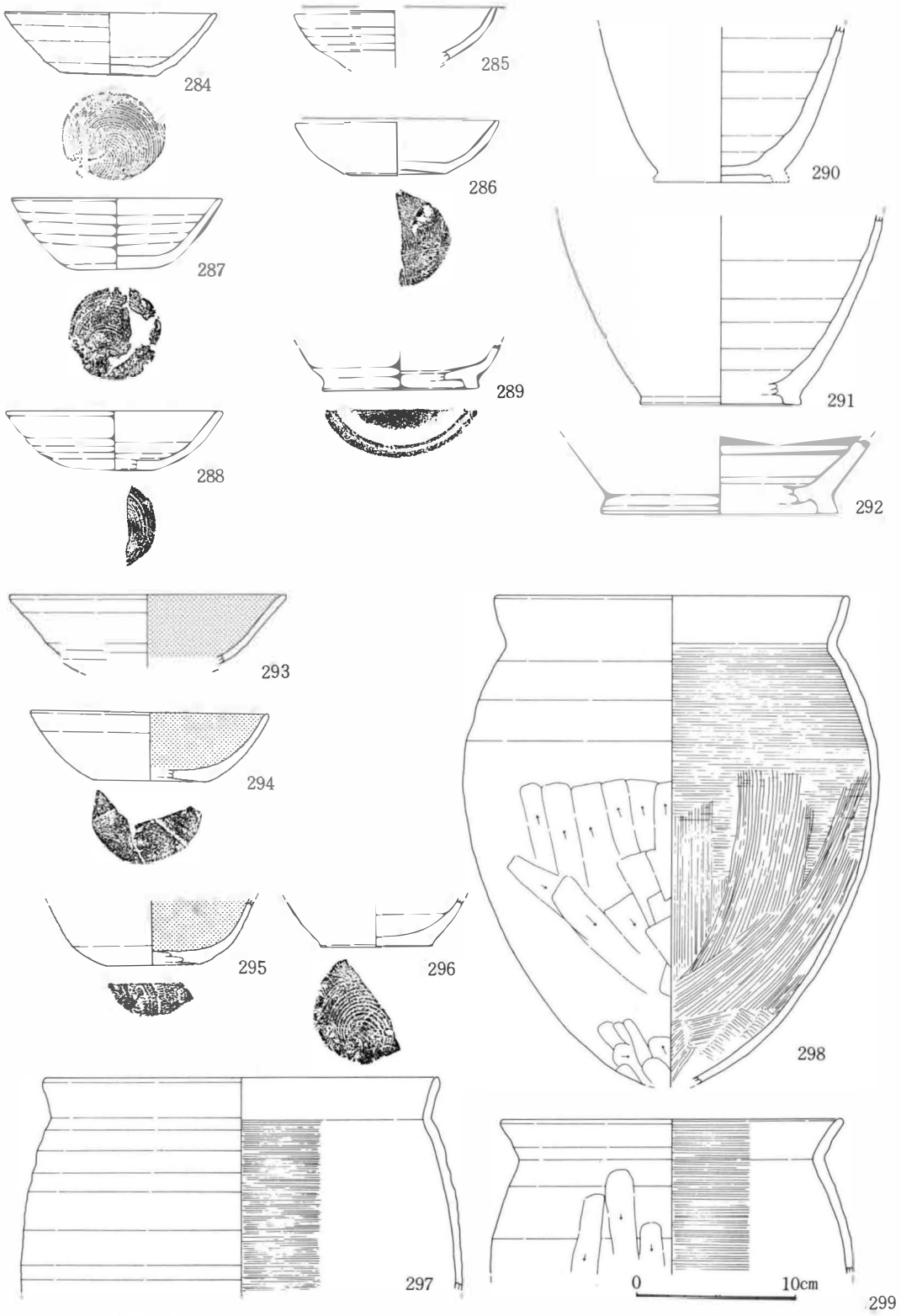


図84　D地点15号住出土土器

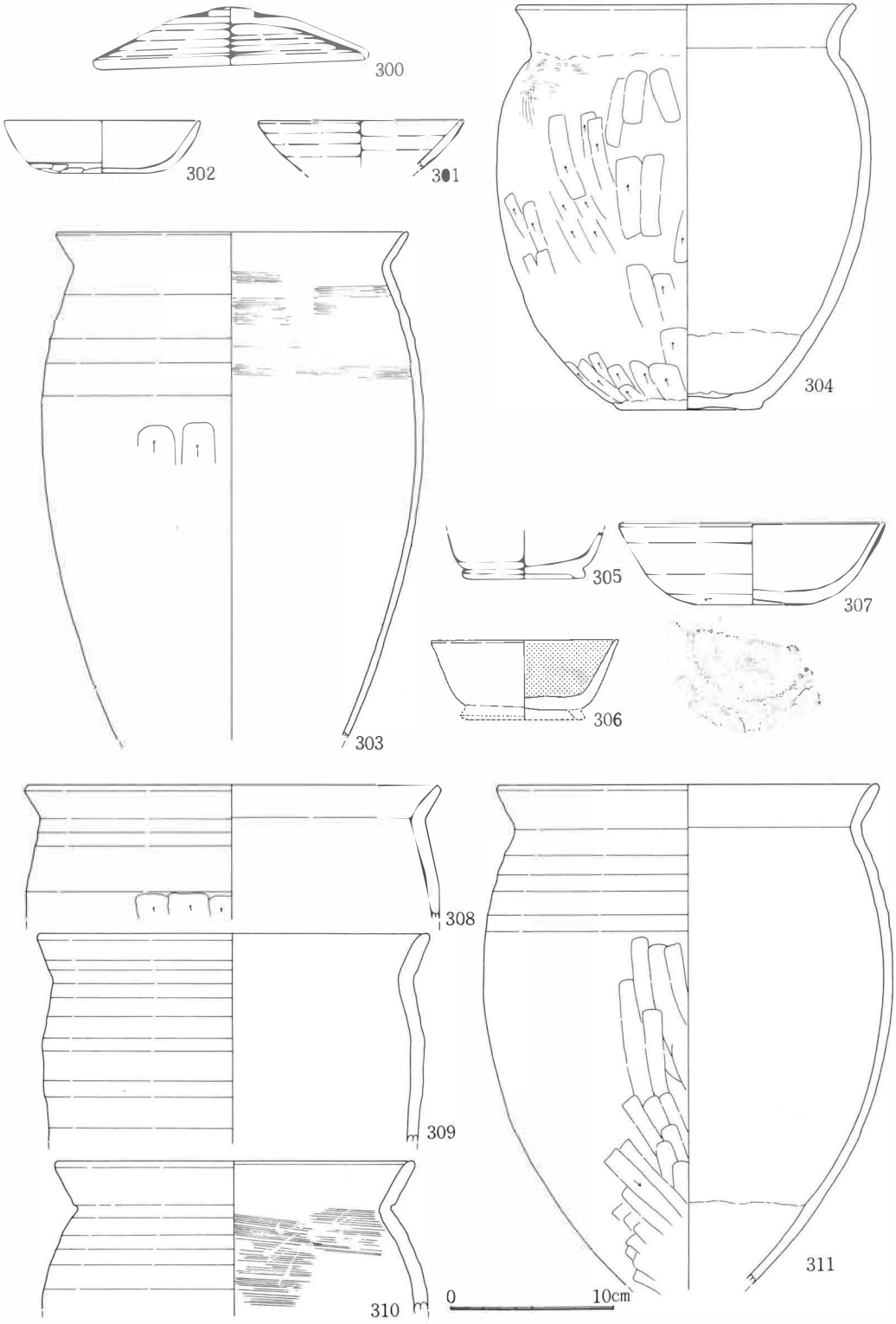


図85　D地点掘り込み遺構(304)・集石土壙(300～303)・検出面(305～311)出土土器

(2)　金属製品（図86）

青銅製品では丸鞆、鉄製品では紡錘車、刀子、錐などが出土している。

丸鞆（1）：縁辺部が欠損しているため全形は明らかではないが、楕円形状の丸鞆になるものと思われる。厚さ1.5mmと薄手に出来ており無文である。

紡錘車（2）：径5.2cm、厚さ4mmの紡錘車に、径6mmの軸部が中心から上下に伸びている。軸部はほとんど欠損している。紡錘車はほぼ完形であるが、縁辺部に腐蝕がみられる。軸部が接続する部分は錆による盛り上がりがみられる。重量は43.2gである。

刀子（3）：腐蝕のため刀子の先端部から中央部にかけて欠損がみられる。辛うじて残った基部と柄部も腐蝕が進んでいる。刀部の断面は厚さ5mmの楔形、柄部は厚さ2mmの長方形を呈しており、作りは薄手である。

錐（4）：先端部と頭部は欠損し、残存部分は腐蝕の進行が著しく、実体の倍程度の大きさにまで膨らんでいる。断面は頭部で厚く、先端に近づくにしたがって薄くなっており、現存している先端部の形状から考えると、本来は、かなり鋭い錐先を有していたものと思われる。

鉄製品（5～9）：上記された以外に、現状で「L」字状に屈曲する断面方形の棒状製品（5）、扁平な槍先状をなす製品（6）、断面が丸く釘状になると考えられる製品（7・9）、断面が半月形状の棒状製品（8）などの出土がみられる。いずれの鉄製品も欠損部分が多い上に、残存部分は腐蝕が進んでいるため品種の判断は困難である。　（田中寿賀子）

(3)　瓦（図87～94）

D地点で多量に出土した他に、B、C地点においても遺構に伴い少量が検出され、軒丸瓦3点軒平瓦10点、丸瓦23点、平瓦170点を数える。地点、遺構別の出土状況は表11を参照されたい。以下項目別に概容を述べることとする。なお瓦当文様については次章に詳述されている。

平瓦桶巻き作り

軒平瓦8の凹面には模骨痕とともに粘土紐巻き上げの痕跡が残されている。粘土紐は巾4cm内外で9～10巻きされるもので、叩き成形の後4分割し、側面にケズリ調整を加えている。粘土板巻きつけによる桶巻き作りは確認されない。

平瓦一枚作り

平瓦17の凹面には模骨痕が存在せず、側面、端部が若干の降起を有し凸型による一枚作りによるものと思われる。凹面には布目とともに粘土板作成の際の糸切り痕が残されている。側縁・端部はナデにより調整されている。

丸瓦成形

丸瓦6の凹面には布目とともに粘土板作成の際の糸切り痕が残されており、粘土板巻きつけによる成形であるものと思われる。2分割の後、側面にケズリ調整を加えている。

平瓦凸面の成形痕

成形の際の叩き痕には次の4種が認められる。

縄叩き目　太さ2～3mmの縄を巻いた叩板による。出土資料の大多数を占める。

太縄叩き目　太さ5mm以上の縄を巻いた叩板による。(36～39) 総数5点

格子叩き目　格子刻みの叩き板による。(40～45) 総数7点

平行叩き目　平行刻みの叩き板による。(46・47) 総数5点

調整痕としては板状工具によるナデ調整が少数認められるが、未調整を一般とする。

丸瓦凸面の成形・調整痕には、縄叩き目（4）と、叩き成形後のナデ調整（5・6）が認められる。

焼成

還元焔焼成によるものと酸化焔焼成によるものとが存在する。前者には須恵質で極めて硬質な自然釉のかかる例が存在する。後者でも土師質の軟質なものはわずかであり、硬度においては前者に劣るものではない。両者とも窯体を異にするものとは考えられない。還元焔焼成によるものには、表皮がひび割れてパン皮状を呈するものと、亀裂を伴い変形したものとが含まれている。また、軒平瓦(14)は焼成途上に瓦当が剝離し、接合面に窯滓を付着させた例である。この他に焼成の際に3枚分の平瓦が窯着した例も出土しており、焼損じ品と考える根拠となっている。

軒瓦の瓦当

軒平瓦の瓦当の形成に関しては3種の技法が認められる。

① 直線顎（7・14～15）　瓦当の接合に際し、凸面に13～15cm巾で粘土をはりつける。

② 段顎（8～12）　瓦当の接合に際し、7cm巾で粘土をはりつけ、明瞭な段を形成している。

③ 曲線顎（16）　平瓦広端部を凸面側に折り曲げて瓦当を接合する。

瓦当文様は①、②が同笵の偏行唐草文によるものであるが、③は一点のみの出土であり文様は確認されていない。ただし、田中窯址出土資料(米山1978)に③と同様の技法が存在し、瓦当が均正唐草文により飾られる可能性が高い。①、②に関しては瓦当の接合成形の後の側面調整が異なり、①が側面を削らずにナデにより曲線的に仕上げるのに対し、②は瓦当文様の界線に沿って削り直しを行い直線的な側面を形成しているものである。また接合においては平瓦広端部に刻み目を施したもの（9～12・15）と、刻みの認められないものとが存在する。

①、②は同笵の瓦当文様を有しながらも、成形・調整においては歴然とした技法の違いが認められるものであり、善光寺境内より出土したものは①と同一技法によることが確認できる。

軒丸瓦に関しては、丸瓦広端部に刻みを加える手法（1・3）が軒平瓦と共通してみられる。

各地点における遺構別の出土状況は表11にまとめたが、遺棄のされ方も含めて、必ずしも一様ではなく、集落内へ瓦が持ち運ばれる要因についてはいくつかの状況が設定できよう。特にD地点においては、瓦を転用している例がなく、遺棄されたものに製品化以前の段階による焼損じ品が含まれる点注意を要する。近隣に存在すると思われる瓦窯址と集落とに有機的関連が予想されるところであり、瓦にみられる複数の製作技法とともに今後の検討を期したい。　（青木和明）

表10　平安時代金属製品観察表

(図86)

	図番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	出土遺構	備考
青銅	1	丸鞆	(2.3)	(2.8)	0.15	3.3	D地点 14号住居	縁辺部欠損

	図番号	器種	外径 (cm)	軸径 (cm)	厚さ (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	残存状態	出土遺構	備考
鉄製品	2	紡錘車	5.2	0.6	0.4			42.3	車の部分はほぼ完形	D地点　2号住居	軸部は欠損
	3	刀子			(0.5)	(24.1)	2.6	76.2		D地点　15号住居	
	4	錐?			(0.9)	(16.8)	(0.95)	83.3	先端部は欠損	D地点　14号住居	
	5	?			(0.8)	(29.5)	0.8	80.7		D地点　14号住居	
	6	?			0.3	(11.0)	2.3	32.3		B地点　15号住居	
	7	?			(0.8)	(11.1)	(0.95)	23.5		D地点　12号住居	
	8	?			(0.4)	(5.6)	(1.0)	8.4		D地点　14号住居	
	9	?			(0.6)	(4.9)	(0.6)	11.6		D地点　13号住居	

表11　遺構別、瓦出土状況

出土遺構	丸瓦		平瓦				
	ナデ	縄叩	縄叩	太縄叩	格子叩	平行叩	ナデ
B地点　21号住			2 (2)				
C地点　溝			2 (1)				
D地点　5号住	3		2				1 (1)
〃　7号住			2				1
〃　8号住			4 (1)		2 (1)		
〃　9号住			10 (6)	1		1 (1)	2
〃　10号住			2				
〃　11号住	1 (1)		9 (4)				
〃　12号住			7 (4)		1 (1)		
〃　13号住	6 (3)		23 (13)	1	1	3 (3)	
〃　14号住			4 (2)		3	1 (1)	5 (1)
〃　15号住	3 (1)	1	3 (1)				
〃　検出面	9 (5)		73 (30)	3			1 (1)
合計	22 (10)	1	143 (64)	5	7 (2)	5 (5)	10 (3)

注)

- 丸瓦分類は表面調整
- 平瓦分類は裏面調整
- 数字は個体総数
- (　)内は還元焔焼成個体
- 明確に軒瓦と認められたものは除外した。

表12　瓦観察表

名称	図番号	瓦当 径(cm)	瓦当 厚(cm)	丸瓦 厚(cm)	焼成	成形・調整・その他	出土遺構
軒丸瓦	1	16.1	1.7～2.5	(1.4)	酸化焔	円弧状接合、丸瓦端部刻み。	C地点溝
	2	(15.2)	1.3～1.8		還元焔	円弧状接合、丸瓦凹面布目、焼き歪みあり。	D地点14号住
	3			1.5～1.6	還元焔	丸瓦端部刻み、凹面布目、焼き歪みあり。	D地点検出面

名称	図番号	瓦当 巾(cm)	瓦当 厚(cm)	平瓦 厚(cm)	焼成	成形・調整・その他	出土遺構
軒平瓦	7	29.2 30.8	5.6～6.0	1.7～3.4	酸化焔	縄叩き平瓦、両側面削のちナデ、直線顎。	D地点検出面
	8		5.8～6.0	1.7～2.6	酸化焔	縄叩き平瓦、両側面削り、段顎、未使用。	D地点5号住床面
	9			1.8～2.2	酸化焔	縄叩き平瓦、端部刻み、段顎、瓦当一部残存。	D地点検出面
	10			1.8～2.2	還元焔	縄叩き平瓦、端部刻み、段顎、両側面削り。	D地点検出面
	11			2.2～2.4	還元焔	縄叩き平瓦、端部刻み、段顎、両側面削り、焼き歪みあり。	D地点11号住、12号住
	12			2.5～2.9	酸化焔	縄叩き平瓦、端部刻み、段顎、両側面削り。	D地点11号住
	13		(5.6)		酸化焔	瓦当接合面削り。	D地点13号住
	14			2.4～2.7	還元焔	縄叩き平瓦、直線顎、両側面削のちナデ、焼き歪みあり、瓦当面残存。	D地点9号住床面
	15			1.7～2.0	酸化焔	縄叩き平瓦、端部刻み、直線顎。	D地点検出面
	16			1.6～2.2	還元焔	縄叩き平瓦　端部折り曲げ接合、側面削り、自然釉。	D地点検出面

名称	図番号	厚(cm)	焼成	成形・調整・その他	出土遺構
丸瓦	4	1.8～2.2	酸	凸面縄叩き、裏面布目	D地点15号住
	5	1.1～1.2	酸	凸面ナデ、裏面布目	D地点11号住
	6	1.4～1.8	酸	凸面ナデ、裏面布目	D地点5号住床面
縄叩き平瓦	17	1.8～3.4	還	側面削りのちナデ、焼き歪みあり、自然釉あり、一枚作り？	D地点13号住
	18	1.5～2.8	酸	側面削り	D地点8号住
	19	1.7～1.8	酸	側面削りのちナデ	D地点9号住
	20	2.1～2.3	酸	側面削りのちナデ	D地点15号住
	21	1.6～2.0	還	側面削りのちナデ	D地点9号住
	22	1.8～2.3	還	側面削り、自然釉	D地点13号住
	23	1.3～1.7	酸	側面削りのちナデ	D地点5号住
	24	2.0～2.5	酸	側面削り	D地点12号住
	25	1.7～2.1	酸	側面削り	D地点13号住
	26	1.7～2.1	酸	側面削り	D地点11号住
	27	1.3～1.6	酸	側面削り	D地点13号住
	28	1.3～1.9	還	側面削り、焼き歪み、自然釉	D地点13号住
	29	2.4～2.6	酸	側面削りのちナデ、凸面ナデ	D地点9号住
縄叩き平瓦	30	1.5～1.7	酸	側面削り	D地点検出面
	31	1.3～1.6	還	側面削り	D地点検出面
	32	1.4～2.0	還	側面削り、自然釉	D地点検出面
	33	1.6～1.8	還	側面削り、自然釉	D地点12号住
	34	1.6～1.8	還	側面削り、自然釉	D地点13号住
	35	1.8～2.1	酸	端部削り	D地点12号住
太縄叩き平瓦	36	1.5～1.8	酸		D地点13号住
	37	1.7～1.9	酸		D地点9号住
	38	1.0～1.3	酸		D地点検出面
	39	1.4～1.7	酸	側面削り	D地点検出面
格子叩き平瓦	40	1.5～2.1	還	側面削り、自然釉焼き歪みあり	D地点8号住
	41	1.6～1.8	酸	側面削り	D地点13号住
	42	2.6～2.8	酸		D地点8号住
	43	1.5～2.0	酸	端部削り	D地点14号住
	44	2.0～2.2	酸		D地点14号住
	45	2.5～2.7	酸	側面削り	D地点14号住
平行叩	46	1.3～1.5	還	側面削り、凸面ナデ	D地点9号住
	47	2.5～3.9	還	側面削り？	D地点13号住

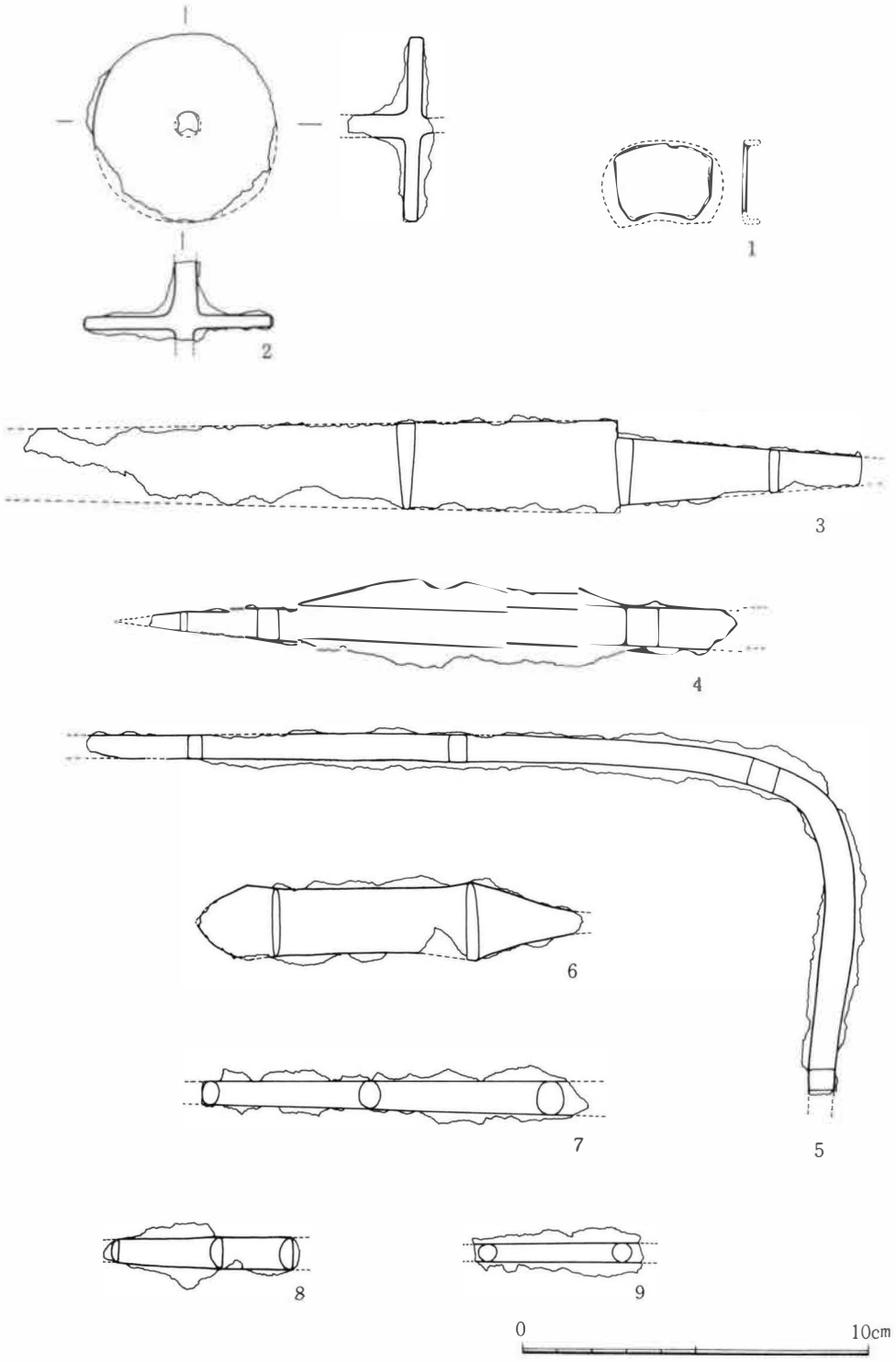


図86　B・D地点出土金属製品

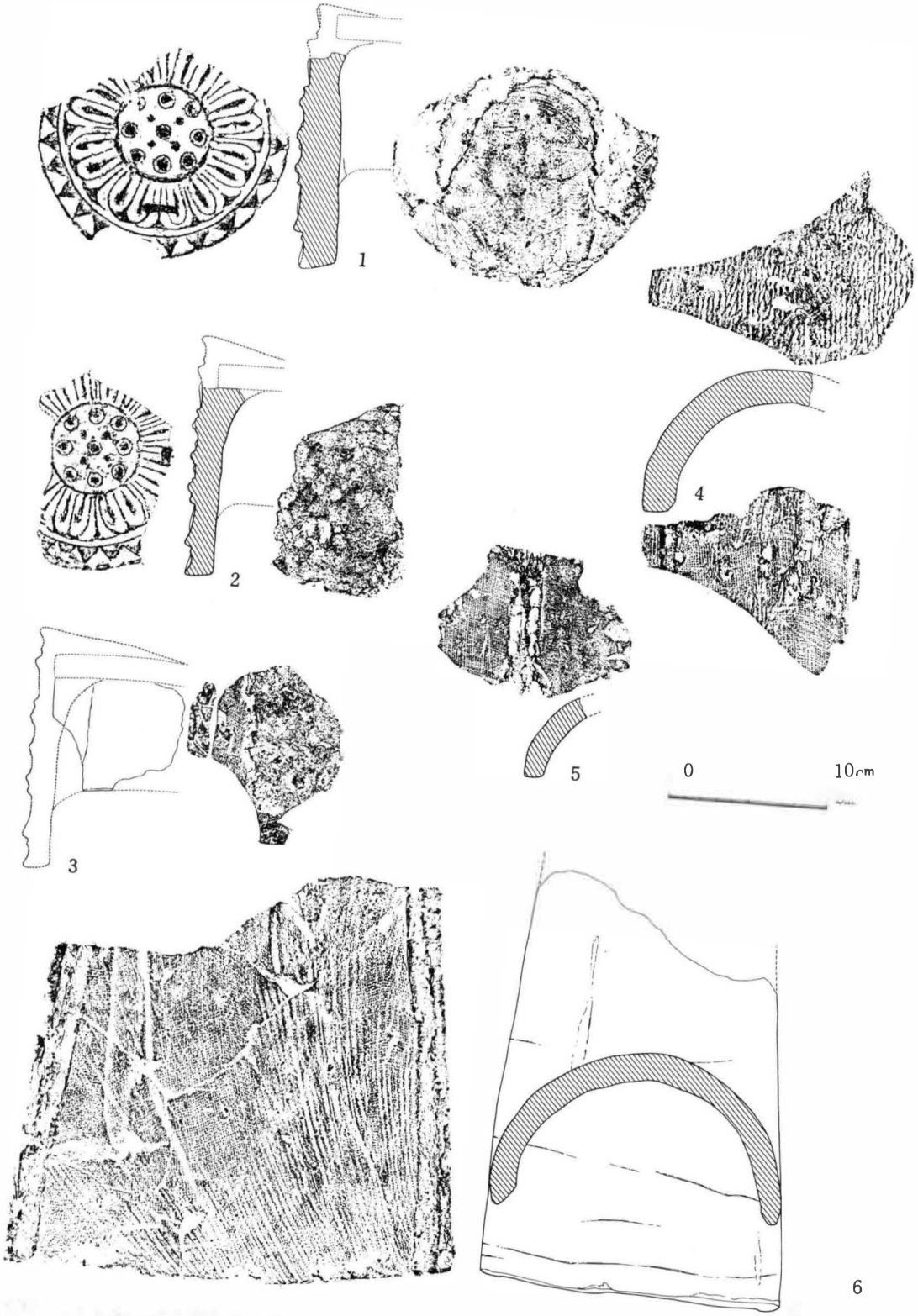


図87　C・D地点出土軒丸瓦、丸瓦

図88　D地点出土軒平瓦1

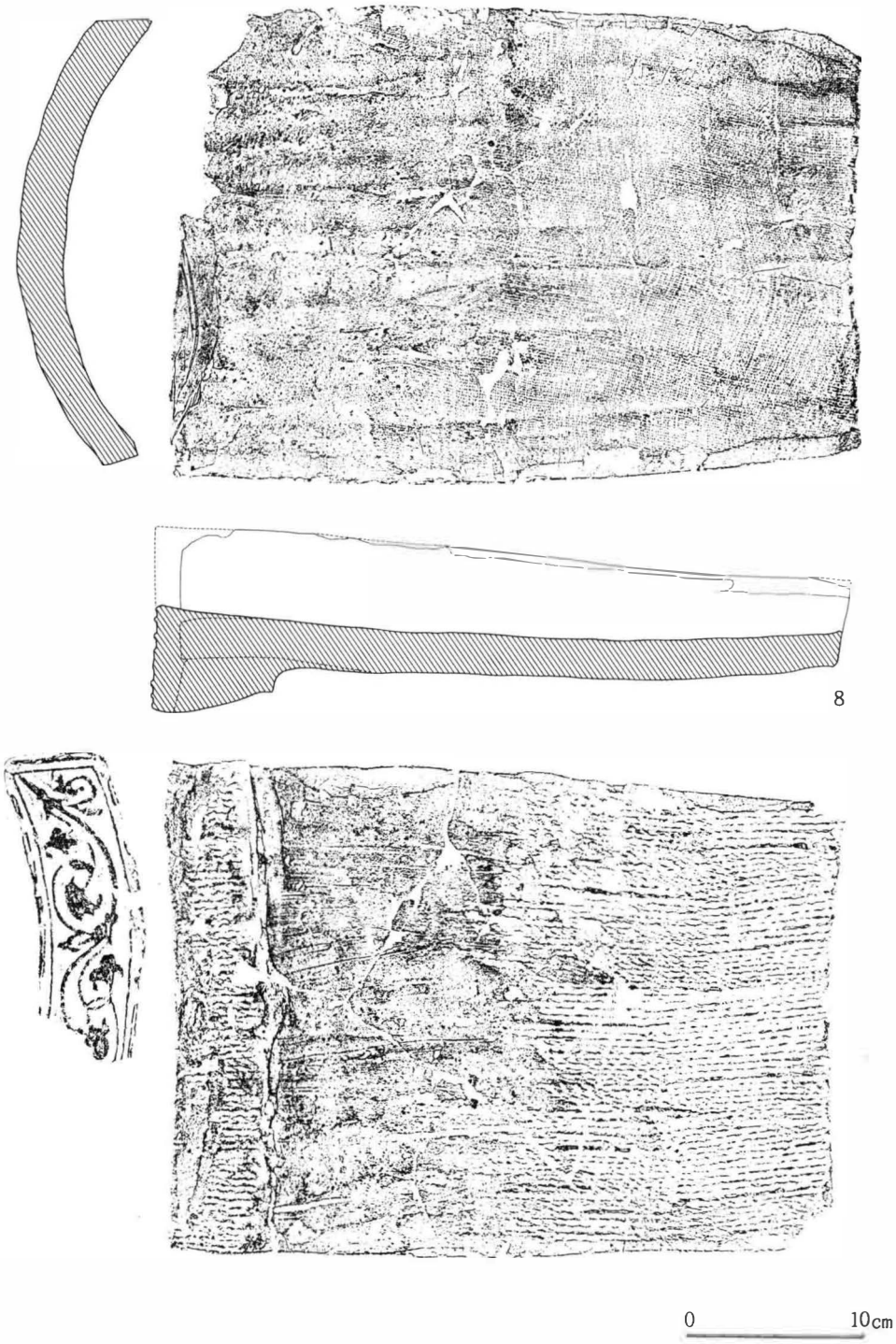


図89　D地点出土軒平瓦(2)

図90　D地点出土軒平瓦(3)

図91　D地点出土軒平瓦(4)、平瓦(1)

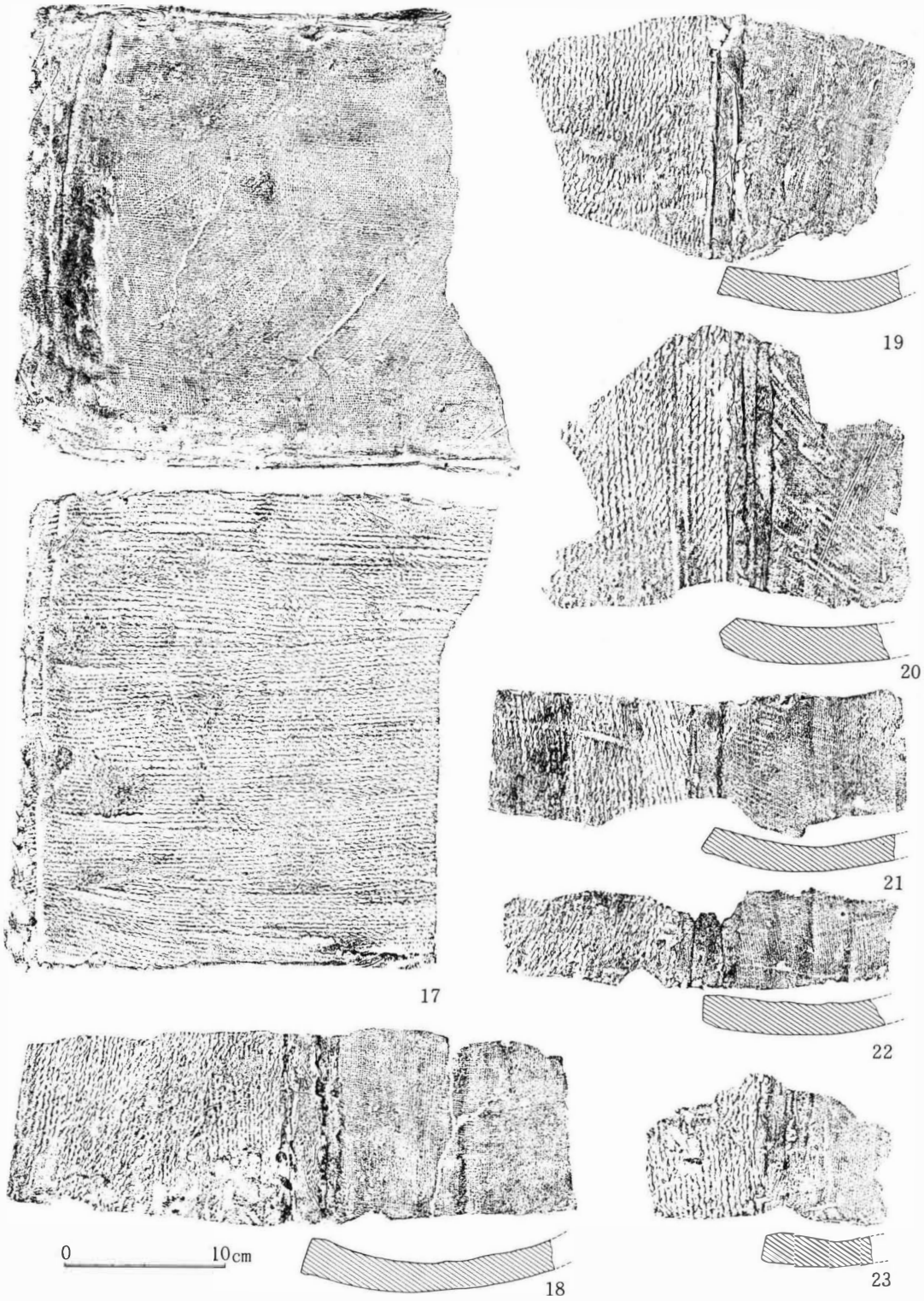


図92　D地点出土平瓦(2)

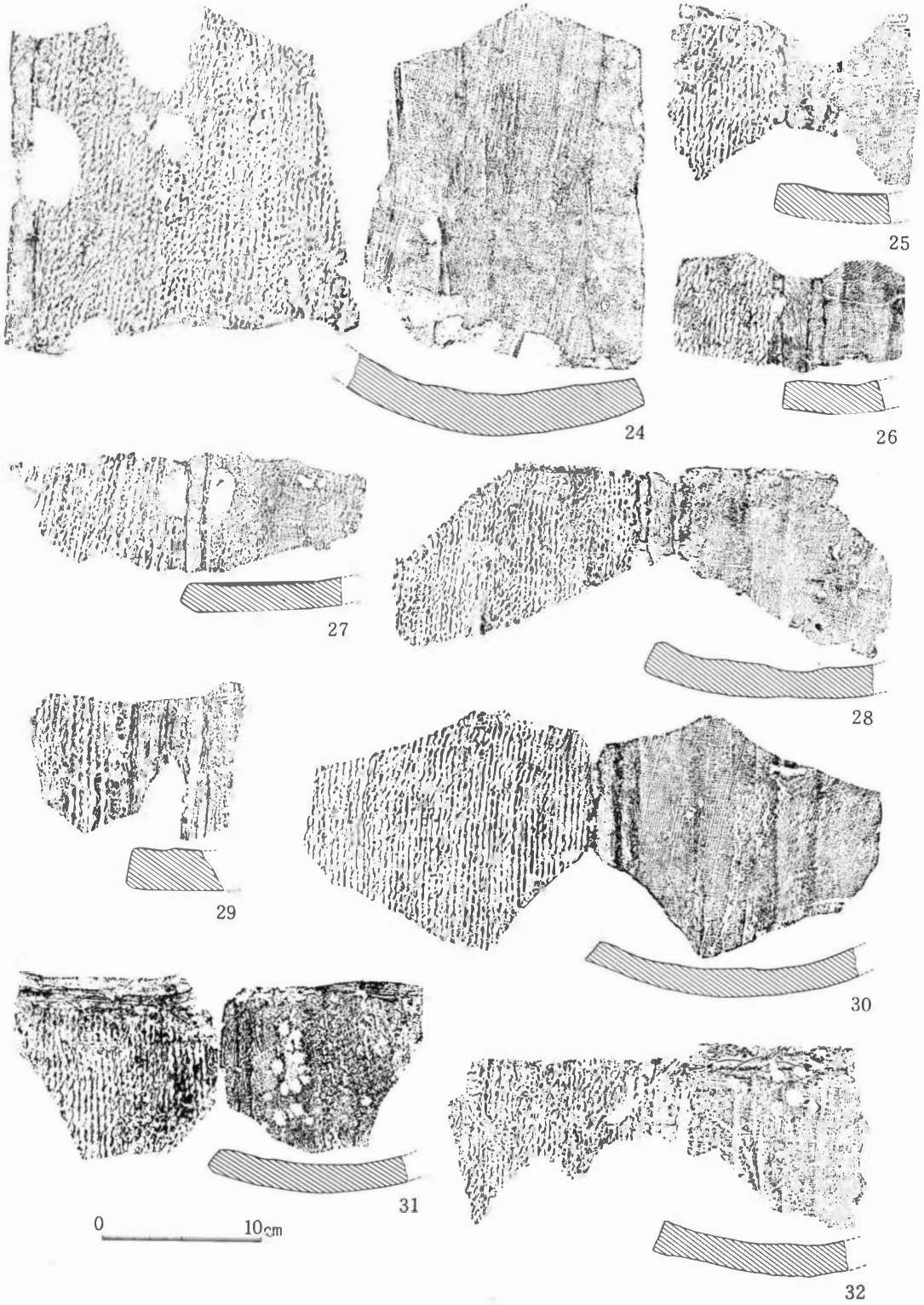


図93　D地点出土平瓦(3)

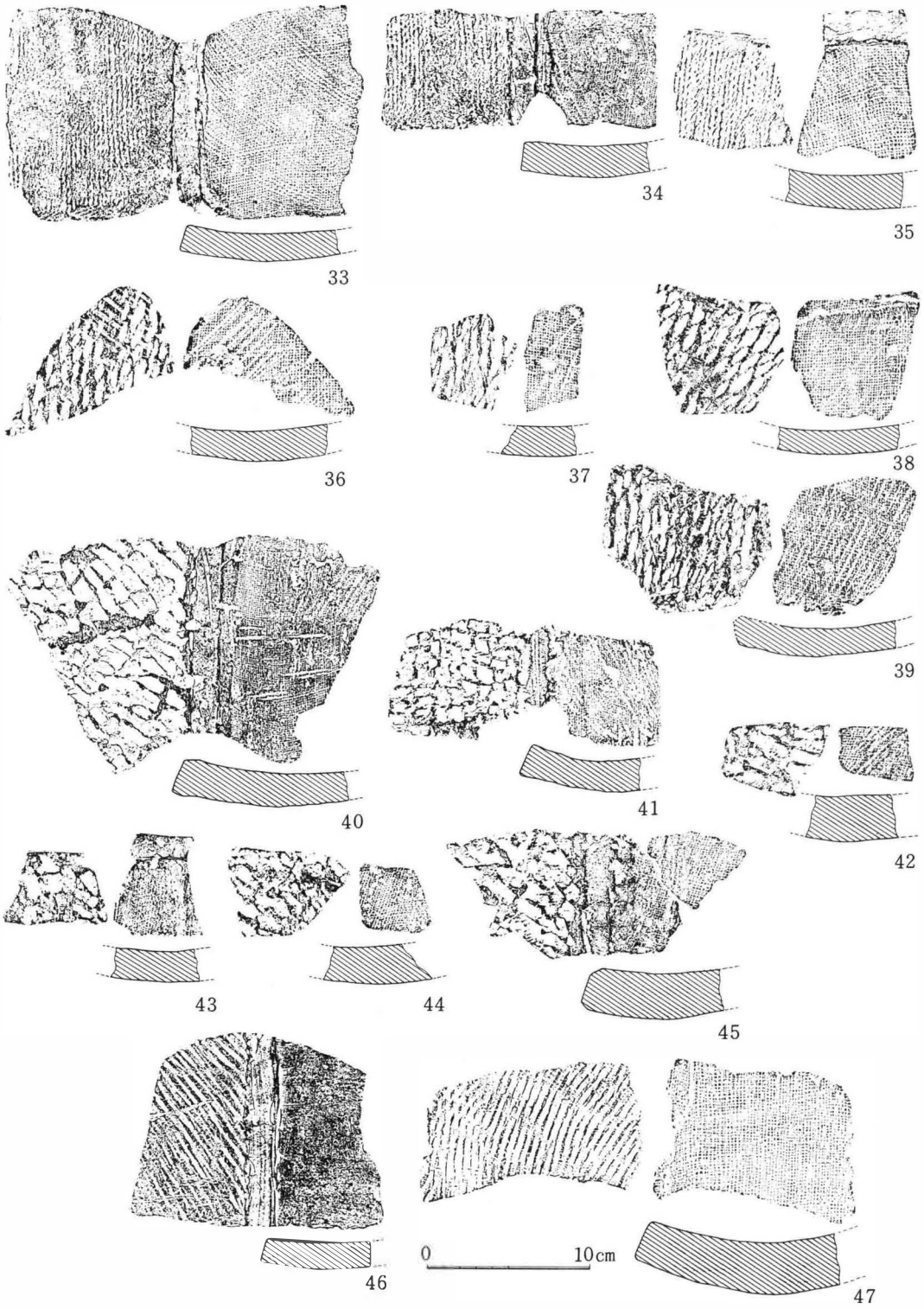


図94　D地点出土平瓦(4)

6　平安時代～中世

(1)　土　器

①土師器　　坏、高台付坏、高台付皿、甕、羽釜、耳皿、すり鉢がある。

坏　内面黒色処理されず未調整のままのものが大多数であるが、黒色処理されるものも少数認められる。底部はすべて回転糸切りのまま未調整である。片口を作り出している坏33が1個体ある。法量から次のように分類した。

A₁　器高が2～3㎝で口径が9～11㎝のもの（1～4・26・34・35・41・63・69～74）

A₂　器高が3～6㎝で口径が11～13㎝のもの（25・27・40・62）黒色処理されるもの（36・64）

A₃　器高が6㎝以上で口径13㎝以上のもの（5）

高台付坏　内面黒色処理されないものと黒色処理されるものがある。C類は1号土壙のみから検出されているもので形態的に異質と言えよう。法量から次のように分類した。

A　口径が12㎝以下で、底部の立ちあがりから口縁部まで直線的に開くか、口縁端部が外反するもの（6・75）　黒色処理されるもの（7・47）

B　口径が12～16㎝で、底部の立ちあがりから口縁部まで内弯ぎみに開くか、口縁端部が外反し椀形のもの（10・11・14・28）　黒色処理されるもの（12・15・65）

C　内面黒色処理されず、口径が12～16㎝で、底部の立ちあがりから口縁部まで直線的に開き、口縁端部がやや外反するもの（54～58）

高台付皿　口縁部までまっ直ぐに伸びているもの（17）と口縁部が内弯しているもの（18）がある。

甕　口縁部が長く、くの字状に外反しているもの（21）と口縁部が内傾しているもの（この破片ではわからないが、羽釜かもしれない）（53）がある。

羽釜　口縁部が直立し、鍔がやや上にあがるもの(22)と口縁部がわずかに外反し、鍔が平行のもの（23）と口縁部が内傾し、鍔が太くなるもの（24）がある。

耳皿　内黒で高台付である。(66)

すり鉢　内面口縁端部に波状文があり、内面に5本条線による刻みがある。(19)

②　灰釉陶器　高台付の椀の底部（16）と広口壺の口縁部（68）がある。

③　B、D地点との比較

C地点出土の土器は、坏を中心とした土師器により構成され、そこに灰釉陶器と須恵器の大形甕の口縁部破片（図示してない）が伴うものである。土師器は、坏、高台付坏、高台付皿、甕、羽釜、耳皿、すり鉢と種類が多いが、全体の8割は坏類によって占められる。

B、D地点の平安時代土器と比較すると、坏は器高が低くなり小形化が目立ち、中世のかわらけに類似している。内面黒色処理されるものが減少する。底部は回転糸切りによる切り離しのままで調整はみられない。高台付坏は大形化が目立ち、内面黒色処理されるものが多い。高台付皿

は内面黒色処理されないものだけとなり、高台はハの字状に開き、高台の器高が高い。坏、高台付坏、ともに法量に多様性が認められることが特色として考えられよう。甕は2点のみの出土であるが、羽釜がこれに代わって登場している。須恵器は1点のみの出土であり、同時期には消滅していく時代と考えられよう。

灰釉陶器(16)は高台付坏の埦の底部である。内外面灰白色で底部は回転糸切りののち高台を付けた。回転糸切りによる切り離しのままで回転ケズリによって調整されていないこと、無釉であることなどから折戸53号窯式以降の『白瓷系陶器』の可能性が考えられる。

以上により、C地点は、B、D地点より年代的に下降するものであり『白瓷系陶器』の伴出から、11世紀代以降の年代が考えられよう。（中殿章子）

表13　C地点平安時代土器観察表

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存	色調 外	内	焼成	成形調整施文 外面	内面	備考
C地点1号住	1	H	坏	9.2	3.6	3.0	1/8	e	e	良	底部一糸切		
	2	H	坏	10.5	4.6	3.0	完	b	b	良	底部一糸切		
	3	H	坏	10.0	4.2	2.8	1/2	e	e	良	底部一糸切		
	4	H	坏	10.2	4.5	3.1	完	e	e	良	底部一糸切		
	5	H	坏	13.7	4.2	6.7	1/5	e	e	良	底部一糸切		
	6	H	坏	11.0			1/3	b	e	良	底部一糸切		高台付、剥離
	7	H	坏	11.2	6.2	4.4	1/6	e	ⓐ	良		ミガキ	高台付
	8	H	坏		6.8		2/3	e	ⓐ	良	底部一糸切	ミガキ	高台付
	9	H	坏		6.9		1/2	b e	b e	良	底部一糸切		高台付
	10	H	坏	14.9			1/3	e	b	良	底部一糸切		高台付、剥離
	11	H	坏	14.6	6.8	6.1	1/6	e	e	良			高台付
	12	H	坏	14.0			1/4	b	ⓐ	良	底部一糸切	ミガキ	高台付、剥離
	13	H	坏		7.4		2/3	e	e	良	底部一糸切		高台付
	14	H	坏	15.0			3/4	b	b	良	底部一糸切	ミガキ	高台付、剥離
	15	H	坏	15.3			1/2	e	ⓐ	良	底部一糸切	ミガキ（放射状）	高台付、剥離
	16	K	埦		5.6		1/4	h	h	良	底部一糸切		高台付
	17	H	皿	13.8	7.0	3.5	1/2	e	e	良			高台付
	18	H	皿	11.0			1/2	e	e	良			
	19	H	すり鉢	29.0			1/8	h e	h e	良		口縁波状文 5本条線による刻み	
	20	H	甕		12.6		2/3	b	b	良			

ⓐ—黒磨　b—黒褐　c—灰褐　d—黄褐　e—赤褐　f—赤　g—灰　h—灰白　（表13—1）

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺体	色調 外	内	焼成	成形 調整 施文 外面	内面	備考
C地点1号住	21	H	甕	20.6			1/8	b	b	良			
	22	H	羽釜	16.2			1/8	e	e	良			
	23	H	羽釜	20.8			1/4	e	e	良			
	24	H	羽釜	24.4			1/6	e	e	良			
C地点2号住	25	H	坏	12.8	6.0	3.7	1/2	bd	bd	粗	底部一糸切		
	26	H	坏	19.6	4.0	3.0	1/4	d	d	粗	底部一糸切		
	27	H	坏	12.8	5.0	4.0	1/4	b	b	粗	底部一糸切		
	28	H	坏	14.0	6.8	6.0	1/4	b	b	粗	ミガキ 底部一糸切	ミガキ	高台付
	29	H	坏	15.4			1/8	ae	ⓐ	良	ミガキ	ミガキ	
	30	H	坏	13.0			1/2	e	e	粗			
	31	H	坏	9.0			1/4	d	d	粗			
	32	H	坏		6.6		1/4	d	ⓐ	良	ミガキ	ミガキ	高台付
	33	H	坏	12.1	5.0	4.3	完	b	b	粗	ミガキ 底部一糸切	ミガキ	片口
C地点3号住	34	H	坏	8.8	3.0	2.2	完	f	f	粗	底部一糸切		内面 タール状付着物
	35	H	坏	9.6	4.2	2.6	完	b	b	粗	底部一糸切		
	36	H	坏	13.0	4.6	4.1	1/6	d	ⓐ	粗	ミガキ	ミガキ	
	37	H	坏	14.0			1/4	b	ⓐ	粗	ミガキ	ミガキ	外面 タール状付着物
	38	H	坏	12.0			1/4	bc	bc	粗			溶滓付着
	39	H	坏		7.4		完	d	ⓐ	粗			高台付
C地点1号溝	40	H	坏	11.3	4.8	5.3	3/4	d	d	良	底部一糸切		
	41	H	坏	9.4	4.4	3.2	1/4	d	d	粗	底部一糸切		
	42	H	坏		5.2		完	d	f	良	底部一糸切	ミガキ	
	43	H	坏		4.6		完	d	d	粗	底部一糸切		内外面 タール状付着物
	44	H	坏		3.4		完	d	d	粗	底部一糸切		
	45	H	坏	14.4			1/4	b	ⓐ	良		ミガキ	外面 タール状付着物
	46	H	坏	13.0			1/2	d	d	粗			内外面 タール状付着物
	47	H	坏	9.6	5.4	4.6	1/4	d	ⓐ	良	底部一ナデ	ミガキ	高台付 内面 タール状
	48	H	坏		5.8		1/2	e	ⓐ	良	底部一ナデ	ミガキ	高台付
	49	H	坏		7.6		完	d	ⓐ	良	底部一ナデ	ミガキ	高台付
	50	H	坏		6.0		完	d	d	良	底部一ナデ		

（表13—2）

出土地点	図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺体	色調 外	内	焼成	成形調整施文 外面	内面	備考
1号溝	51	H	高台				1/2	b	b	良			内外面 タール状付着物
	52	H	高台		10.4		1/4	b	b	良			内外面 タール状付着物
	53	H	甕	19.6			1/5	bd	d	良			
C地点1号土坑	54	H	坏	15.2	6.6	5.1	1/3	e	e	良	底部—糸切		高台付
	55	H	坏	14.1	7.1	5.3	1/3	e	e	良	底部—糸切		高台付
	56	H	坏	14.4	7.2	5.3	1/3	e	e	良	底部—糸切		高台付
	57	H	坏	15.0	7.4	5.2	1/8	e	e	良	底部—糸切		高台付
	58	H	坏	15.2			1/6	e	e	良	底部—糸切		高台付、剥離
	59	H	坏		8.2		1/3	e	e	良	底部—糸切		高台付
	60	H	坏		7.2		1/2	e	e	良	底部—糸切		高台付
	61	H	坏		7.3		完	e	e	良	底部—糸切		高台付
C地点2号土坑	62	H	坏	10.1	4.7	4.6	1/3	ae	e	良	底部—糸切		
	63	H	坏	9.8	4.6	3.0	1/6	e	e	良	底部—糸切		
	64	H	坏	12.1	5.0	4.4	1/2	ae	ⓐ	良	底部—糸切		
	65	H	坏	14.1			1/8	ae	ⓐ	良	底部—糸切	ミガキ（放射状）	高台付、剥離
	66	H	耳皿		5.7	3.6	3/4	e	ⓐ	良		ミガキ	高台付
3号土坑	67	H	坏		7.2		3/4	e	c	良			高台付
5号土坑	68	K	壺	24.2			1/8	g	g	良			
C地点検出面	69	H	坏	8.9	4.3	3.0	1/2	e	e	良	底部—糸切		
	70	H	坏	9.4	5.6	3.1	1/2	e	e	良			
	71	H	坏	10.2	5.0	2.8	完	e	e	良	底部—糸切		
	72	H	坏	10.2	4.3	2.2	1/3	e	e	良	底部—糸切		
	73	H	坏	11.0	4.5	2.8	1/3	e	e	良	底部—糸切		
	74	H	坏	9.3	3.8	2.8	3/4	e	e	良	底部—糸切		
	75	H	坏	9.7	5.4	2.8	1/2	e	e	良	底部—糸切		高台付
	76	H	坏		5.6		1/2	e	e	良	底部—糸切		高台付
	77	H	坏		7.2		2/3	e	ⓐ	良		ミガキ	高台付
	78	H	坏		6.6		1/2	b	ⓐ	良		ミガキ	高台付
	79	H	高台		7.2		1/3	b	b	良			
	80	H	高台		9.6		1/2	e	e	良			

（表13—3）

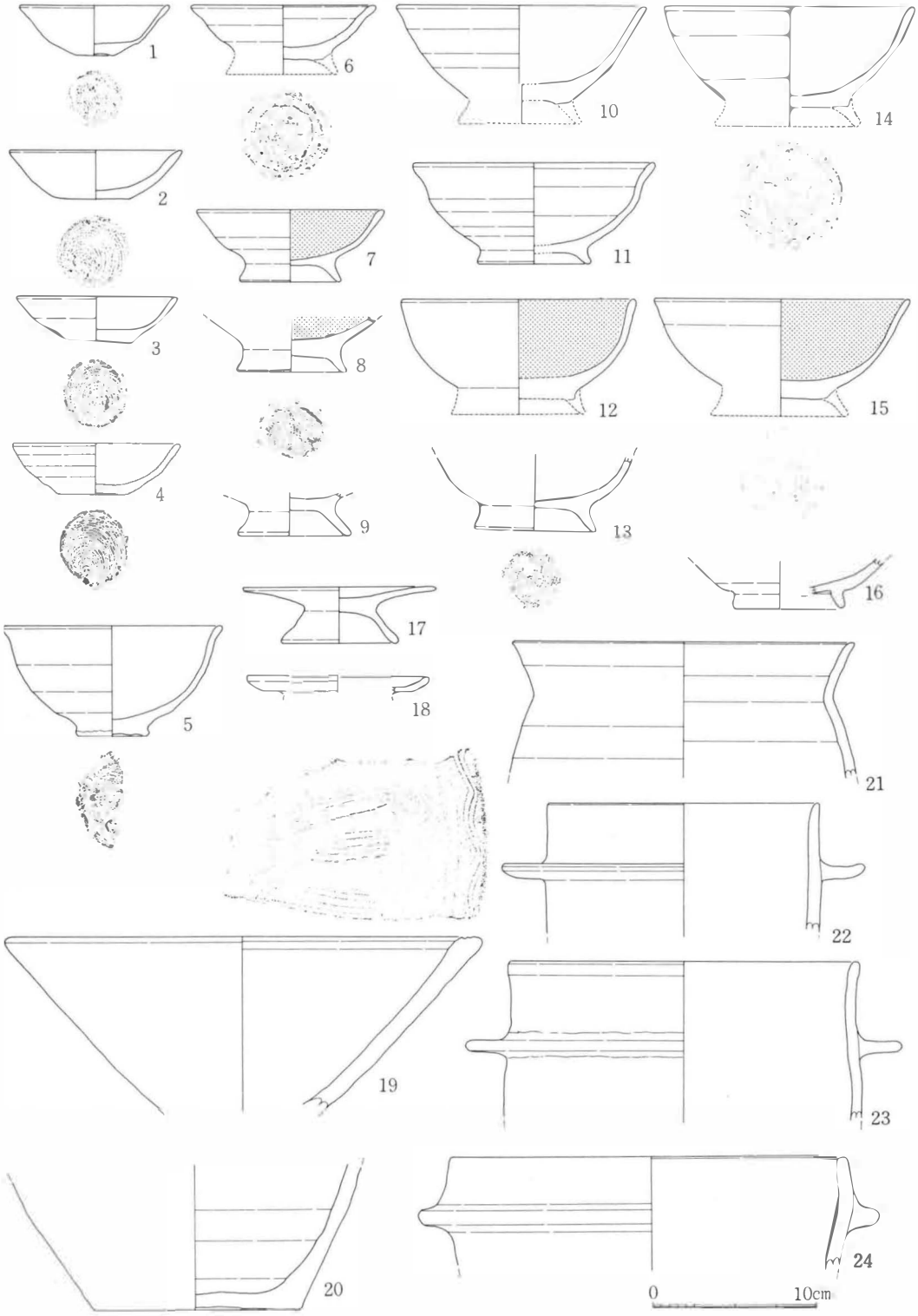
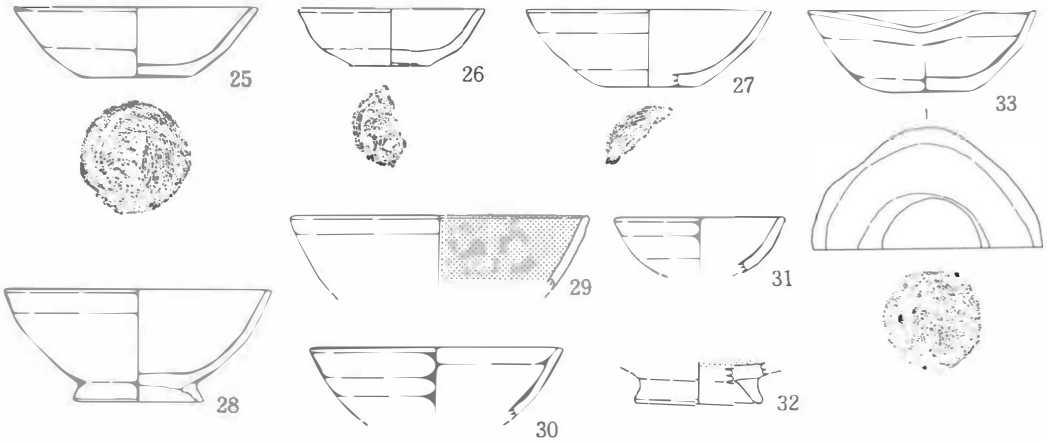
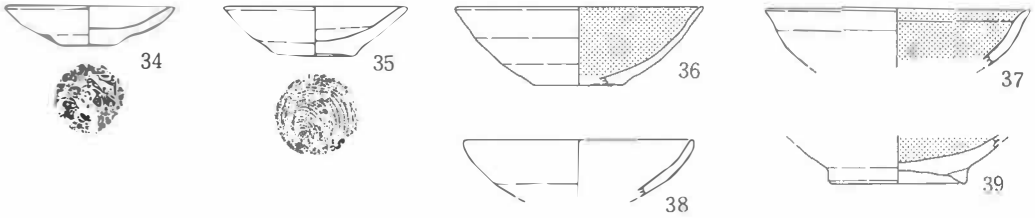


図95　C地点1号住出土土器

2号住



3号住



溝

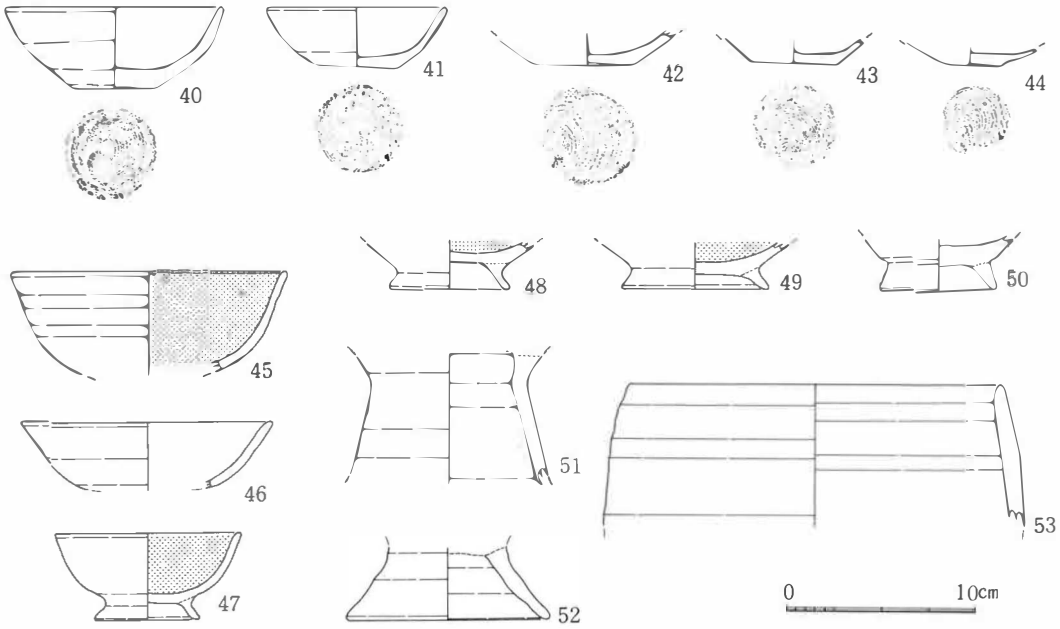
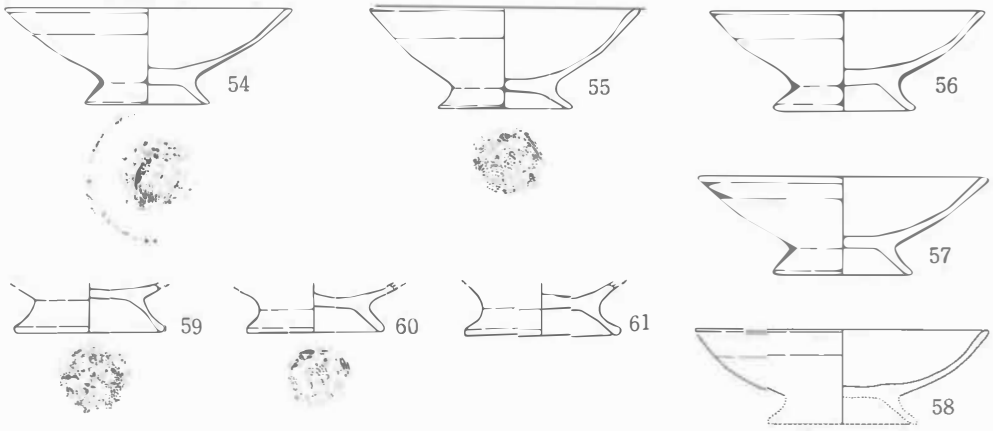
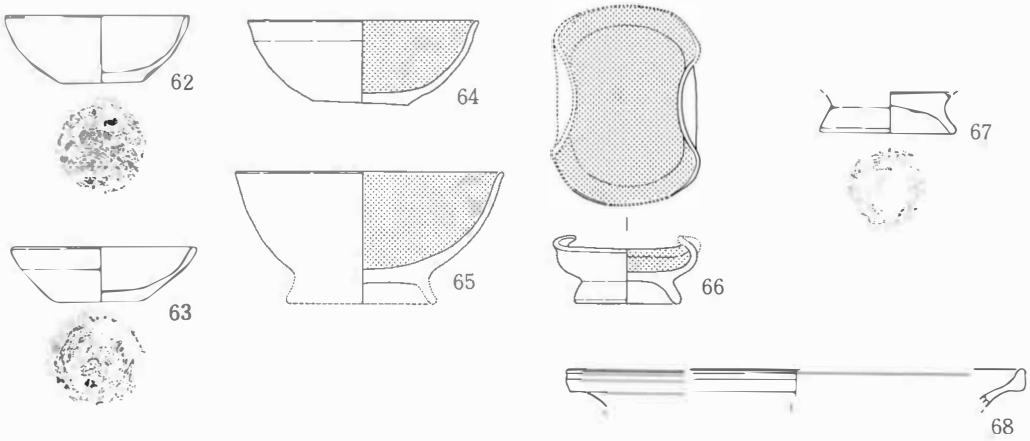


図96　C地点2号住・3号住・溝出土土器

1号土壙



土壙(62～66－2号・67－3号・68－5号)



検出面

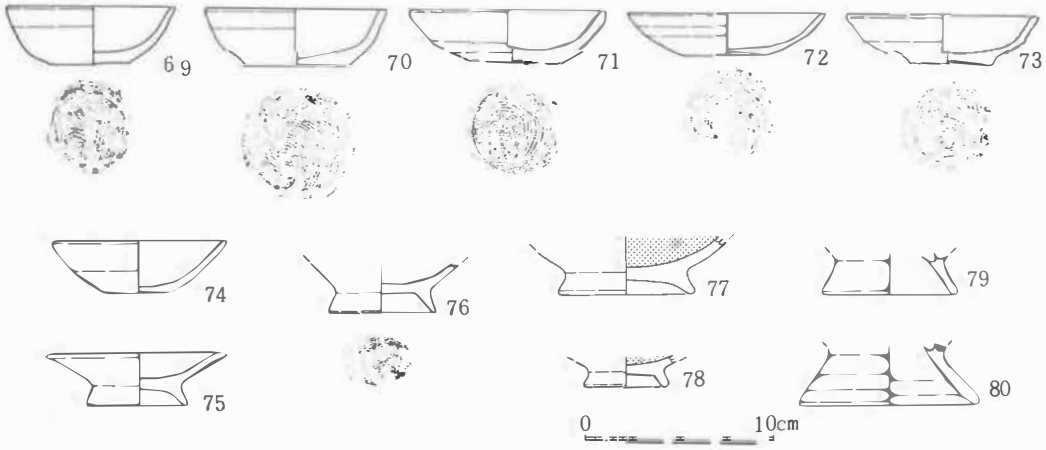


図97　C地点土壙・検出面出土土器

(2)　金属製品（図98）

銅埦(11)：厚さ1㎜の薄手の埦で口縁部2ヶ所と底部が若干損なわれ変形しているものの、ほぼ旧形を保っているものと思われる。

紡錘車（7）：径4.8㎝、厚さ2㎜の薄い紡錘車で、中心部からは径5㎜の軸が上下に伸びていたものと思われるが、軸部は欠損しているため詳細は明らかではない。重量は25.0ｇである。

その他（6）：C地点1号住居址から出土した鉄製品であるが、用途ははっきりしない。断面の形状などからは鉄釘の可能性も考えられる。

(3)　その他（第98図）

羽口（8～10）：C地点で出土している。8は先端部がほぼ完形で残っているが、熱を受けて気泡化している。10にも気泡化がみられる。胎土にはスサが混入されており、焼成は還元焔によって行われたものと思われる。

銭貨（1～5）：C地点で熙寧元宝（1068年初鋳）3枚と紹聖元宝（1094年初鋳）1枚、B地点で皇宋通宝(1039年初鋳）1枚が出土している。保存状態は不良で、縁辺部が腐蝕によって欠損している例（5）、裏面が剥離している例（2）などがみられた。　　（田中寿賀子）

表14　C地点　金属製品他観察表

（図98）

	図番号	名称	初鋳年	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土状況	備考
銭貨	1	熙寧元宝	1068年	2.3	0.7	3.9	C地点　検出面	真書、北宋
	2	熙寧元宝	1068年	2.4	0.8	2.6	C地点　8号土坑	裏面剥離、篆書、北宋
	3	熙寧元宝	1068年	2.3	0.7	3.1	C地点　検出面	篆書、北宋
	4	紹聖元宝	1094年	2.3	0.7	3.2	C地点　検出面	行書、北宋
	5	皇宋通宝	1039年	2.3	0.7	2.3	B地点　22号住居	縁部腐蝕、真書、北宋

	図番号	器種	外径(cm)	軸径(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	残存状態	出土遺構	備考
鉄	6	?			(0.4)	(6.8)	(0.6)	7.5		C地点　1号住居	
	7	紡錘車	4.8	0.5	0.2			25.0	車の部分は完形	C地点　1号住居	軸部は欠損。

	図番号	長さ(cm)	外径(cm)	内径(cm)	重量(g)	胎土	焼成	残存状態	出土遺構	備考
羽口	8	(9.3)	8.0	2.5	266.0	スサ混入	良	先端はほぼ完	C地点　3号住居	先端部は熱により気泡化。
	9	(6.9)	(8.4)	(2.6)	114.0	スサ混入	良		C地点　3号住居	
	10	(6.8)	(8.0)	(1.8)	139.0	スサ混入	良	先端部付近	C地点　1号溝	先端に近い部分は気泡化。

	図番号	器種	器高(cm)	口径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	出土遺構	備考
銅	11	坏	5.5	15.9 19.0	0.15	147.0	C地点　1号住居	腐蝕が著しい。

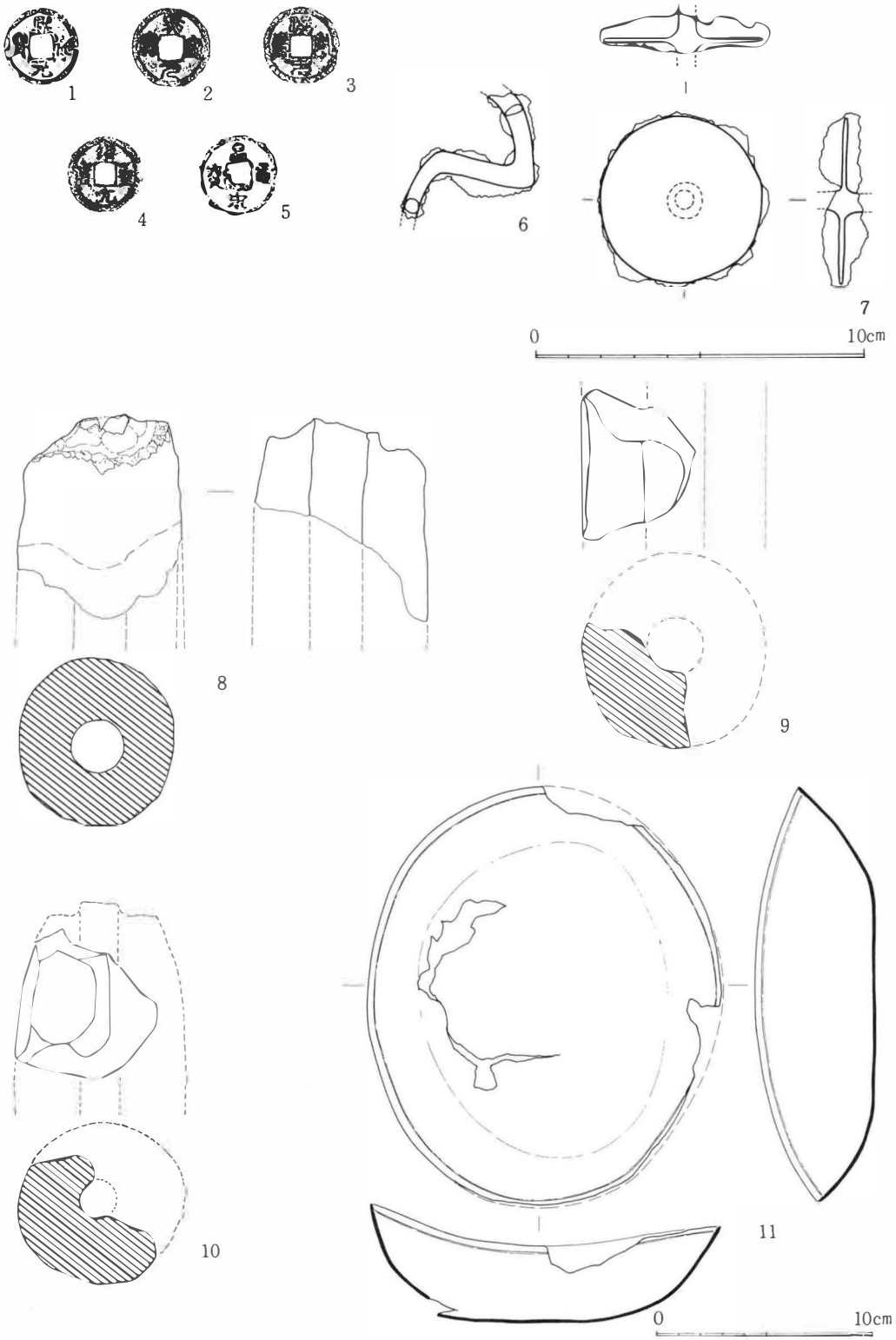


図98　C地点出土金属製品他

第Ⅶ章　調査のまとめ

1　古墳時代中期須恵器について－陶邑編年との比較を中心として－

坏蓋（9・101・118・119・213・214）　全形が明らかな118は、天井の1/2が回転篦削りで調整され、平坦になる。口縁部は内弯ぎみに外反し、その端部は微かな凹線をもつ。口縁部と天井部を境する稜は比較的丸く仕上げられている。内面の天井部分は不整方向の丁寧なナデ調整が施されている。これらは陶邑編年のⅠ型式2～3段階の特徴に対応するものである。9は内面の調整が回転ナデにより、口縁部は直線的に外反する。また口縁端部、稜などにシャープさが認められ、同時期かあるいは僅かに後出的と考える。214は小形で、口縁部から天井部のたちあがりが高くなり、口縁端部の凹線が明瞭となる。これらの傾向は陶邑編年では4段階にあらわれるものとされ、該期との併行が考えられる。

坏身（1・102・120・169・170）　169・170は底部の1/2から2/3を回転篦削り調整され、丸みをおびながら平らに近くなっている。蓋受部は水平か上外方に伸び、その端部は内傾する口縁部の端部と同様に丸く仕上がっている。焼成もよく堅緻な土器である。この特徴は2段階に近似する。口縁端部の形態からすると、微かな平面となる1、明瞭な凹線をもつ120は、169・170よりも後出的と考えられる。102は器高が高く小形化の傾向がある。口縁端部に凹線をもち、蓋受部は比較的短い。底部に施される回転篦削り調整は1/2程の範囲である。これらは4段階以降の特徴に近似する。

甕(76)　口縁部片であり、頸部から大きく外反し、端部に明瞭な凸線を有す。外面には凸線と櫛描波状文が1状ずつの組み合わせで2段巡っており、文様、形態とも3段階の特徴を示す。

聰、壺（10・171）　壺形の聰10は体部のみの遺存であり、器肉は厚く、肩部に2本の沈線で画された櫛描波状文が帯状に施されている。器面には凹凸があり整形、焼成は丁寧でない。直口壺と考えた171は小形の壺の口縁部であり、鋭い凸線2本とその下に1.3㎝幅に歯数17本の細かい櫛描波状文を巡らしている。焼成もよく、施文も丁寧で繊細な印象をうける。

高坏（121）　小形高坏の脚端部であり、鋭い凸線を有し、Ⅰ型式3段階の形態に近似する。

以上述べた各器種は、現存部分が少なく、坏身以外部分的な観察に留まるものであるが、陶邑窯編年との対比によるとⅠ型式2～4段階の様相に近似するものであり、その実年代を5世紀後半代に比定することができる。長野県の須恵器生産は松ノ山窯址いおいて6世紀初頭に開始されたことが確認されている。本遺跡の須恵器はその年代を遡るものであることが確実となり、他地域からの搬入が想定される。しかし、焼成、整形等の良否の差が各個体に顕著であり、粗雑なもの(10・102・214)も存在することから、全てを搬入品と断定し難く、在地生産の可能性が指摘されるところである。生産地についての問題は胎土分析を含めて今後の課題として残したい。(なお、須恵器の編年に関しては笹沢浩氏の御教示による部分が大きい。記して感謝申し上げたい。)　（横山かよ子）

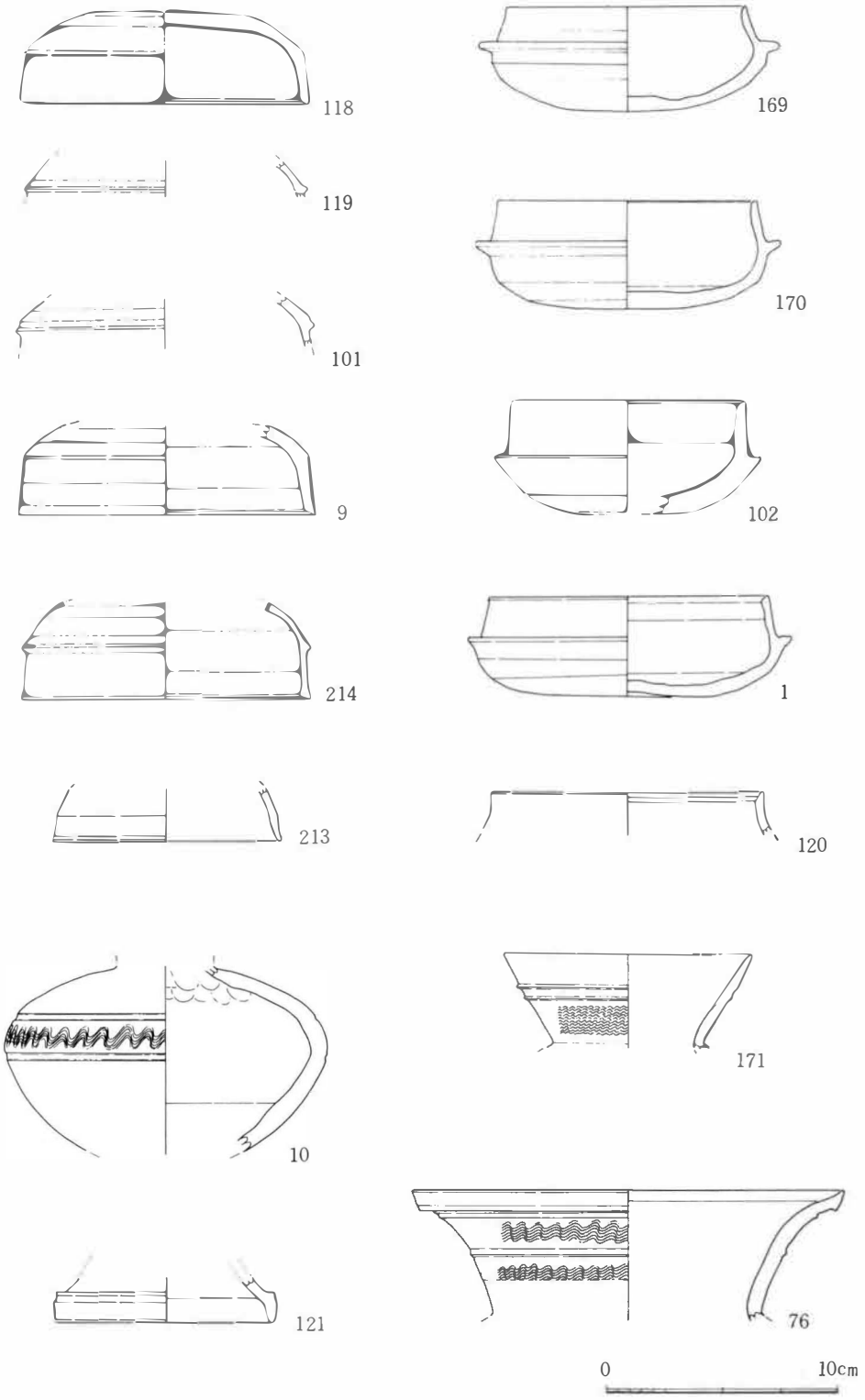


図99　B地点出土、古墳時代須恵器集成

2　平安時代搬入土器について

灰釉陶器　北信地方では、中南信地方に比較し、灰釉陶器の搬入が少い傾向にあり、今回の調査においても、多量の土師器・須恵器に伴出した灰釉陶器は7点を数えるのみである。しかしながら、土器群の年代提示においては、同資料の存在が中心的な根拠となっている。

埦、194・195（D地点11号住）　比較的厚手につくられ、口縁部が端部において外反する。底部から腰部にかけて回転ヘラケズリにより調整され、高台は短くつぶれて角高台に属する。釉は内面体部のみ刷毛塗りで施され、無釉部に重ね焼の痕跡が認められる。

G、126（B地点検出面）　口縁端部を強く屈曲させ、底部高台は角高台を呈する。釉は外面体部、重ね焼の高台接地面を除く内面に、刷毛塗りで施されている。無釉部に重ね焼痕を残す。

埦　238（D地点12号住）　底部破片である。高台が三日月高台を呈し、内面はやや内弯する。底部は回転ヘラ削りにより調整されている。釉の範囲は特定できないが、内面のみ確認される。

以上の特徴を猿投窯編年に対比させるとすれば、194・195・126を黒笹14号～黒笹90号窯式に、238を黒笹90号窯式に比定できる。この他図示されていないが、D地点8号住からは折戸53号窯式に対応すると思われる埦破片が出土している。これらの灰釉陶器は、前章において抽出した古様相には伴出せず、新様相との中間様相以降に共伴していることから、新様相を10世紀代、古様相を9世紀代にそれぞれ位置づけることが可能となる。

甕　土師器甕には、A（ロクロ調整によるもの）、B（ケズリ調整によるもの）、C（ハケ調整によるもの）の3種が存在する。その個体数ではAが圧倒的であり、B－7点、C－3点にとどまるものであり、Aを主体とすればB・Cは客体的存在にあるといえる。

Aは北信地方を中心とした分布が確認され、その成立に関しては北陸地方、特に新潟県との関連が重視される。古墳時代以来のハケ調整から、同地方の影響によるロクロ調整への転換は、本遺跡土器群の年代観から、9世紀代には確実に達成されていたことが明らかである。

ケズリ甕Bはいわゆる「武蔵型」であり、市内でも四ツ屋遺跡8号住、県町遺跡等で出土が確認されており、県内に比較的多数の検出例が報告されている。特に千曲川上流域の東信地方においては、同甕の出土数が多く、ケズリ甕Bを主体的とする地域と時間を設定することも可能と考えられる。本遺跡出土のケズリ甕Bに関しては、同地域及び群馬県からの搬入が予想される。

ハケ甕Cはロクロ甕A成立以前のいわば伝統的な甕調整によるものである。中南信地方においては平安期に至ってもロクロ甕への転換が認められず、ハケ甕Cを主体としていることが知られ、本遺跡出土のハケ甕Cに関しては、同地域からの搬入が予想される。

平安期という時代背景を考えれば、灰釉陶器に代表される活発な土器の流通が想定されるものであり、土師器、須恵器の地域内変遷過程と地域間動向も含めて、総括する必要性が痛感される。

（灰釉陶器に関しては笹沢浩氏の御教示による部分が大きい。）　（中殿・青木）

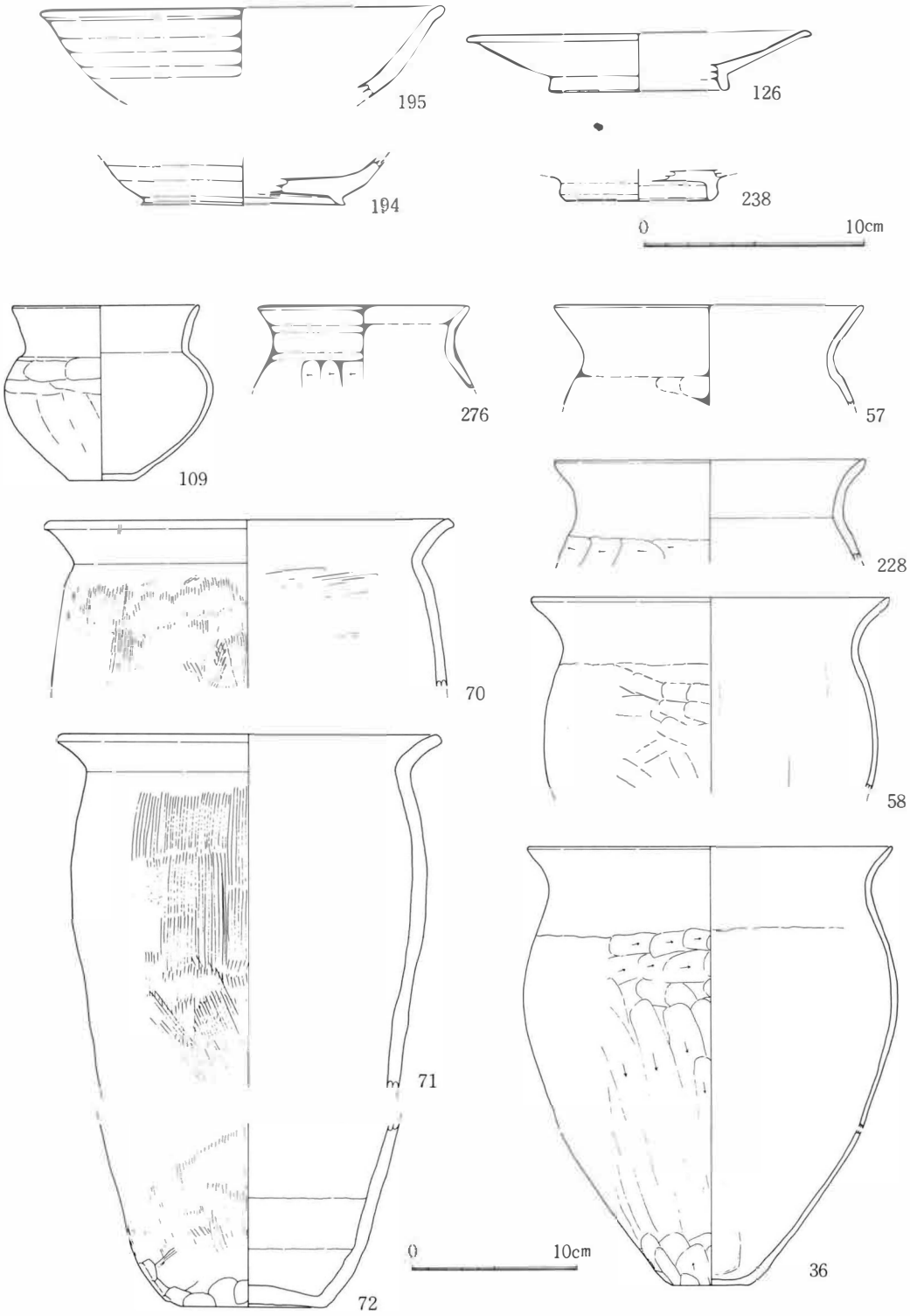


図100　B・D地点出土灰釉陶器、ハケ甕、武蔵型甕集成

3　いわゆる善光寺瓦について

今回の緊急学術調査で発掘された資料のうち、いわゆる善光寺瓦と呼ばれている布目瓦については、かつて長野市元善町の旧善光寺本堂址周辺からの土木工事等によって発見された古い様式の文様をもった瓦や、今回の発掘地点近く、長野市若槻東沢地籍から発見された瓦から、その概要は理解されていた。それは、完全にその全面を残した瓦当部に丸瓦の一部をつけた軒丸瓦(鎧瓦)や、瓦当部の一部が残されていた軒平瓦(宇瓦)であった。今回の一連の調査では、一部を欠損した瓦当部の軒丸瓦とほぼ完全に全体を復元できる軒平瓦が発掘できたことにより、今迄より以上に善光寺瓦について精査できる資料として注目されるものである。

軒丸瓦の瓦当部は、大正年間に旧善光寺本堂址から、土木工事により発見された一部を欠損したもの(1)と、昭和30年代になって善光寺仁王門近くから発見された、完全な瓦当部と丸瓦の一部が接合したもの(2)に代表される。いずれも複弁蓮華文の瓦当部だが、文様は外区弁区に差違の認められる資料である。そのうち、(2)の軒丸瓦と同笵と認められる資料は、今回の発掘により得られたものもふくめ、現在長野市立博物館で採拓できたものは合計6点にのぼっている。この中には、現在善光寺が保存している、昭和28年頃に旧善光寺本堂址から水道工事等により得られたものも含まれており、他にも、善光寺関係の寺院等で保存されている資料もあったとされているがその資料は今回の検討資料には含まれていない。この他、現在善光寺が所蔵し、長野市立博物館で展示している軒丸瓦の一点は、(1)に該当する唯一の資料で、同笵と認められる資料は他にはない。

軒平瓦は、軒丸瓦同様の折、大正時代及び昭和20年代以降、瓦当部の欠損した一部が発見され、都合3点を精査でき、何れも同笵の文様をもってはいたが、全体を確認することは不可能だった。しかし、復元できた瓦当部から、唐草文の特異な文様の軒平瓦であることで注目されていた。今回の発掘により瓦当部をほぼ完全な形で残し、平瓦部分を直線顎又は段顎に接合している軒平瓦を確認でき、そのうちの1点は、住居址の床面から須恵器を伴って発見された。

今まで、発表された多くの善光寺瓦は、何れも土木工事等の際に掘り出された資料で、埋蔵状況等については確認できない資料であったが、この調査結果をもとに、新たな研究の礎とされるため、今回の調査で発掘された軒丸瓦と軒平瓦と同笵の資料について、その特徴を指摘し、それぞれの製作にかかわる歴史的な背景及び両者の関係などについて検討される資料に供したい。

軒丸瓦　瓦当部文様の概形と特徴を列記すると、

1、弁区は復弁8蓮華文で、それぞれの蓮華の間には間弁を配している。ただし、正確には8蓮華のうち1蓮華は間弁を間に配し、完全な単弁の蓮華を対に並べている。

2、外区は、26枚の凸面外行鋸歯文で飾っているが、その形状は不均整で、法量がそれぞれ違う。

3、中房は、中央に周環をめぐらした蓮子を置き、その外側には周環もなく、他の蓮子より小形の4つの蓮子を、さらに一番外側には周環をめぐらし、中央の蓮子と同様の大きさの8つの蓮子を配している。蓮子の断面はつぶれた形の三角形である。

4、内区の間弁のうち、1で指摘した単弁の蓮華を並べた左に配された間弁の、中央に直交して、幅6㎜、長さ20㎜の長方形の凸文がある。

5、外区の内側と弁区の外側に、それぞれ凸線文をめぐらしている。

以上が軒丸瓦瓦当部の文様の概形及び特徴である。

複弁蓮華文、特に8蓮花文の軒丸瓦については、7世紀後半に創建された、奈良県明日香村川原寺に最古の資料が求められ、いわゆる川原寺式の軒丸瓦として、その類型は各地の寺院址から発見されている。当該瓦もその系列に加えられ検討されて来た。

原形となっている川原寺出土の軒丸瓦の瓦当部の文様を見ると、(1) 外区の鋸歯文は、面違いに掘られ、外行鋸歯文が48個、均斉に並んでいる。(2) 中房の半径と弁区の幅との比は中房の方が広く、中房に配された蓮子は、中から1・5・11で、それぞれ周環をもち、配置は幾何学的で均斉である。(3) 蓮華の花弁及び間弁の彫刻は精巧で、花弁は間弁に添って外区近くまで広がり、間弁の先端の中央には切り込みがある。などをあげることができ、整斉であることが第一の特徴ともいえる。ちなみに、中房中央の蓮子から8間弁を結ぶ線はそれぞれ半直角に近く測定でき、配された蓮花弁も、8弁ともほぼ同じ形をしている。これは、同寺の仏像の製作に当たった仏師たちの手により造笵されたためと言われている。

これに比較して、当該軒丸瓦を見ると、瓦当部に描かれた文様は不整形で、花弁の一つ一つはまちまち、そのうえ、単弁の蓮華も描かれるほどである。各間弁の間隔もまちまちで、それぞれ隣の間弁となす角度も、40度から50度と、10度もの違いがあり、一見して蓮華の大きさや型の不揃いが分かるほどである。さらに特徴的なことは、弁区の中に置かれた長方形の凸文である。この凸文は、出土例の少なかった当初は、これを上下を識別するしるしと考えられていたが、資料が多くなると、丸瓦の接合位置とは関係のないことが確認された。何れかの必要があって施文されたものとは考えられるが、規格を正確に踏襲することが本来と考えられる技法の伝承が、これほどまでに不均衡で、不正確である事実は意味深い。当時の仏教文化、政治文化の中心地から遠隔の地信濃とはいえ、単に距離的、地域的条件に原因を求めることは短絡すぎはしないかと思われる。

軒平瓦　今回の発掘調査により得られた軒平瓦から平瓦の凹面の曲線から推定すると、軒先に向けた部分で、半径24～25㎝の桶型で製造されたことが分かり、さらに、凹面の上方3分の2の面に押されている布目は荒布、凸面に残された叩目(たたきめ)痕は縄目である。

瓦当部に描かれた文様の概形と特徴を列記すると次のように指摘できる。

1、凸線をめぐらしている上下外区の2本の平行線は、内側が外側より細く、外側は一部を欠いている。脇区は左右とも上下区の凸線同様の平行線で、それぞれ内側・外側の凸線につながっている。

2、内区の主文は、右上角から左上角に向けて、大きく波状にW形の太い茎が描かれ、内区を5区画に分けている。

3、区画された各部分の形は、左右下角の横長の三角形と、中央下部分と、その上左右対象に

並んだ半楕円形に区画されている。

4、右上角から約2㎝中に入った茎に第一節を描き、等間隔に第三、第四と節を配し、それぞれの羽根型をした節から、長い葉柄をもった丸く図案化したパルメット葉2と蕾1を派生している。

5、右下角の区画には、第一節の下方に派生した長い葉柄をもった葉と蕾が描かれている。

6、右上の半楕円形の区画には、第一・第二節から派生した葉柄が丸く交叉し、大小の葉をつけ、第二節から派生した蕾が描かれている。

7、中央下の区画には、第二・第三節から派生した葉柄が区画の中央で丸く交叉し葉をつけている。第三節から派生している蕾は退化している。

8、左上の区画には第二・第三節から派生している葉柄が丸く交叉し、大小の葉を配している。

9、左下角の区画には、第四節から派生している文様があるが、何を描いているか判別できない。

以上を要約すると、主文の茎は波状に描かれ、均等に割り振られた4つの節からは、原則的には葉2、蕾1を派生、葉柄は長く、区画の中央で丸く交叉し、その先に丸く図案化したパルメットが描かれている。

この軒平瓦については、筆者の研究範囲の狭さか、20年来類例を求めたが、いまだに納得できる資料を他に指摘することができなかった。しかし、瓦当部の全面に波状に主文を描く例は、奈良県橿原市藤原宮址出土の偏行忍冬唐草文宇瓦などに求められ、そこには法隆寺所蔵橘婦人厨子須弥座に描かれた忍冬唐草文に祖形を求められる変形唐草文が整然と配され、上下の外区がこれを挟んでいる。この文様を、当該瓦の文様と直接結びつけて考えることは構成上むずかしい。むしろ、茎を波状にめぐらし、そこから派生する葉の葉柄を交叉させる構成は、法隆寺献納宝物の中にある光背の中に幾つかを求めることができるし、法隆寺金堂の天蓋の葺返しに描かれている文様も、同様の構成である。

今回の調査で発掘された軒平瓦と軒丸瓦はかって善光寺境内で発見されたが、これが一対の軒瓦として葺かれていたという証拠は今のところない。そして、川原寺式軒丸瓦と対をなす軒平瓦は、原則的には重弧文軒平瓦が使われることが例となっているという報告がある。しかし、善光寺境内からはいまだにこれに該当する軒平瓦は発見されていない。さらに、発掘された軒平瓦二点の顎は、無顎形式のものと段顎形式のものであり、この例からすれば、同笵の文様をもちながら、瓦自体の基本的な形を違うという検討を要する問題点もある。これは、仮定ではあるが笵は保存され、ある期間これを使いながら製作していく段階で、建築物の軒先の構造が変化し、それに合わせて軒平瓦も形を改めたということも考えられる。

今回の発掘地点は、近くから窯址の存在を指摘されていたが、正確にその実態は確認されていない。これを機会に新しい資料への対応を検討していかなければならないが、9世紀代に製作された須恵器と共に発掘された事実はその出発点と考えられる。　（山口　純一）

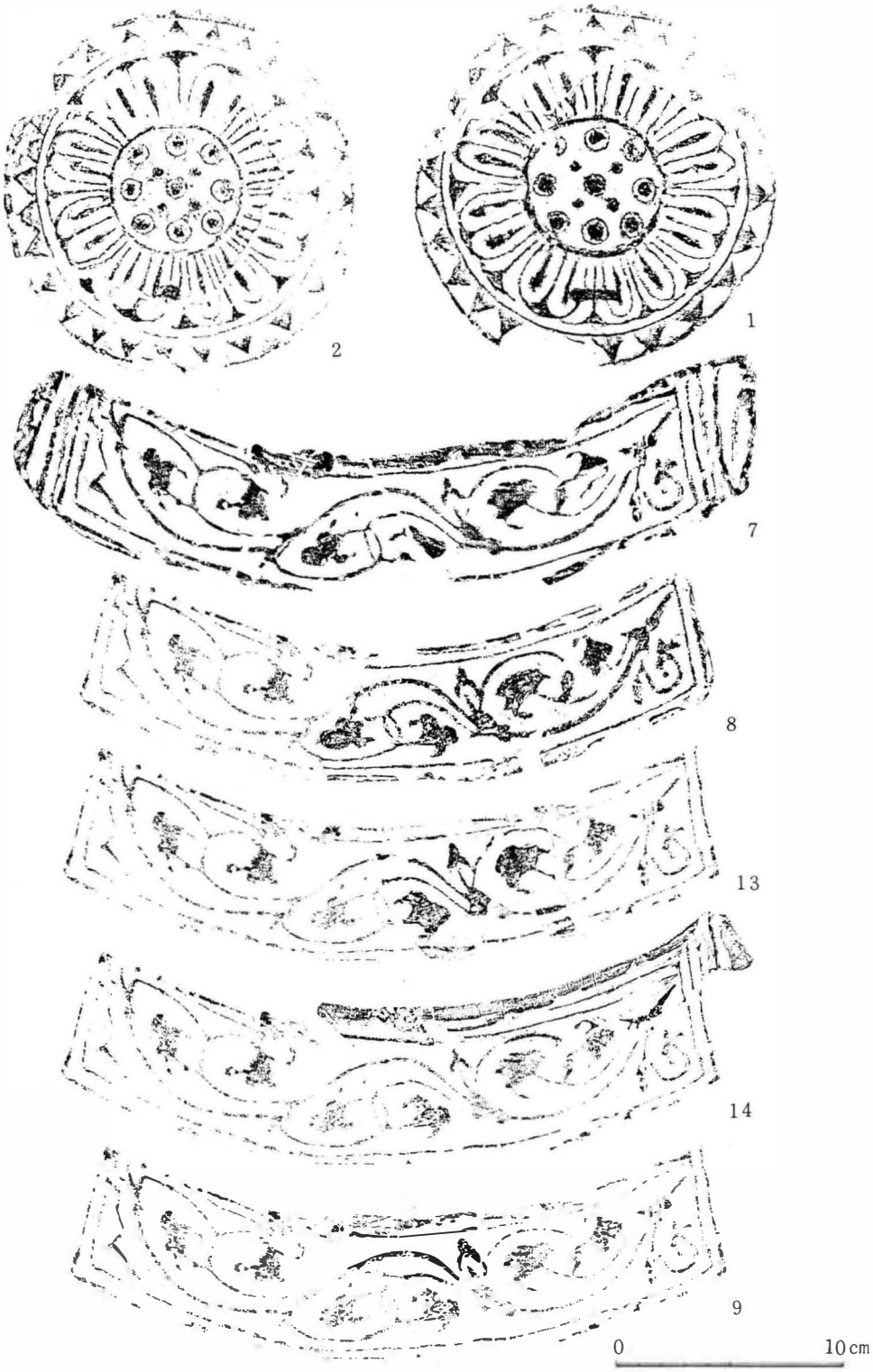


図101　軒瓦瓦当面集成

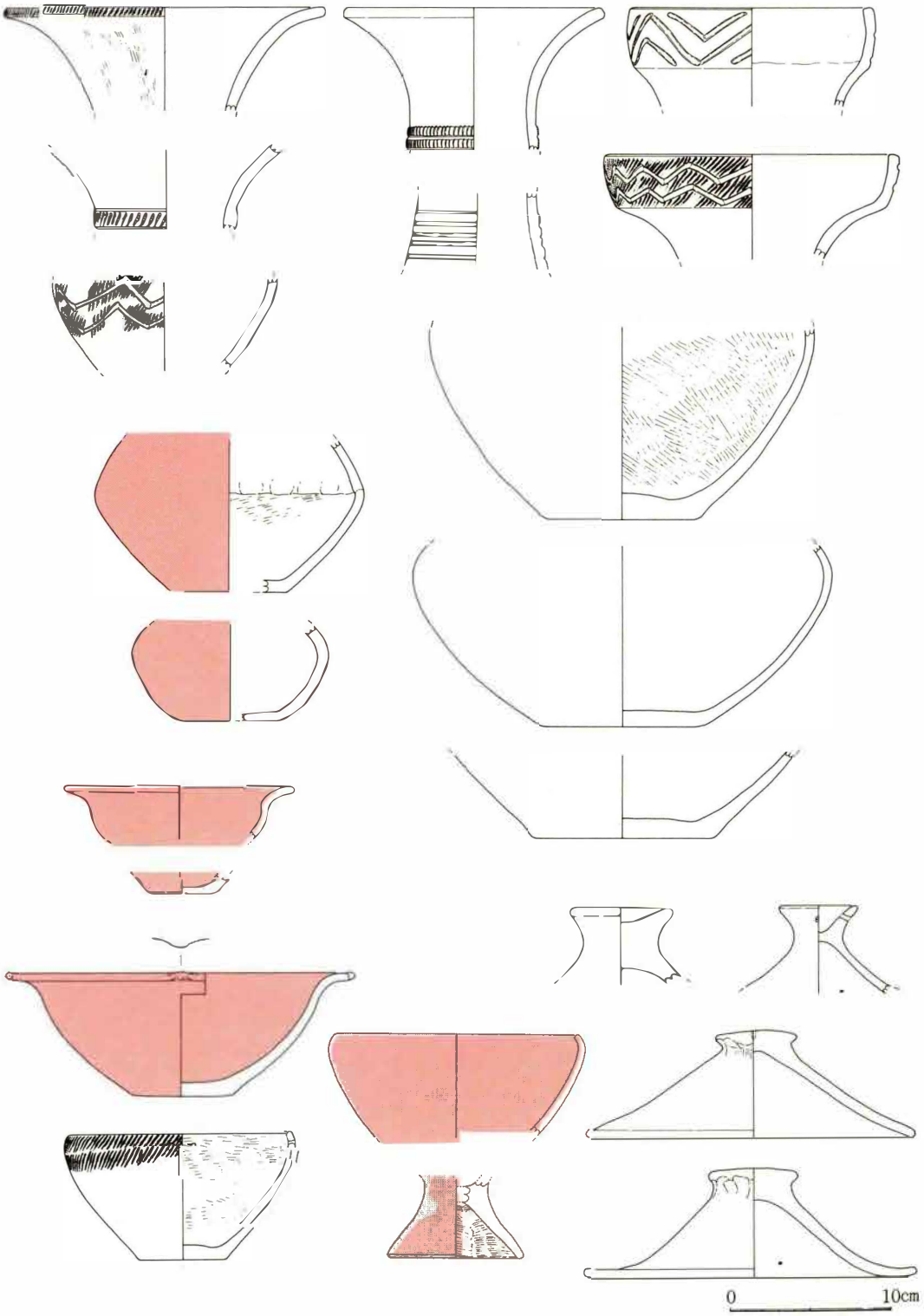
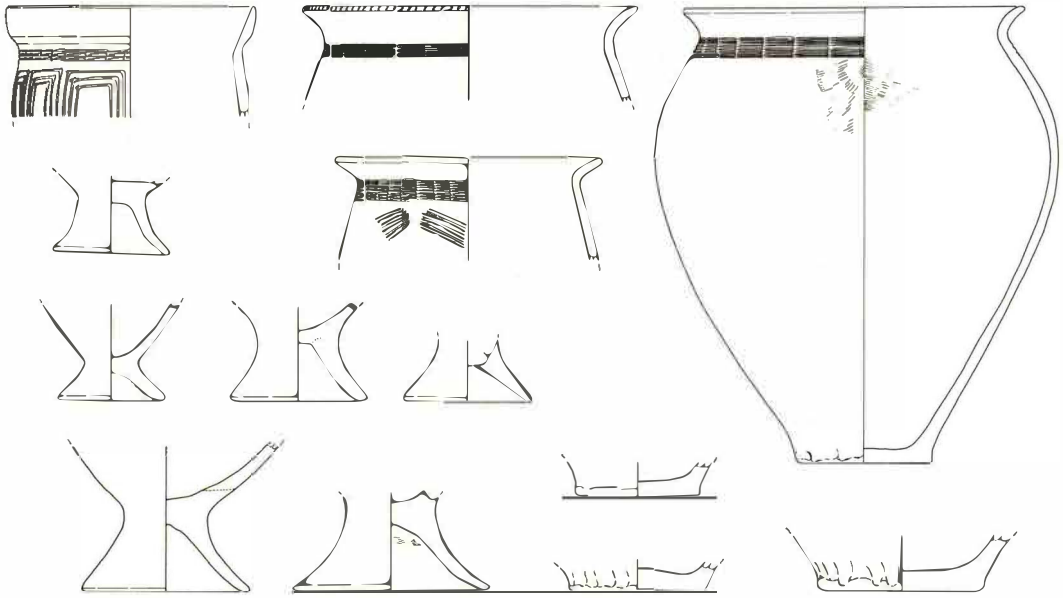


図102　徳間遺跡(1)出土土器

徳間遺跡



迎田遺跡

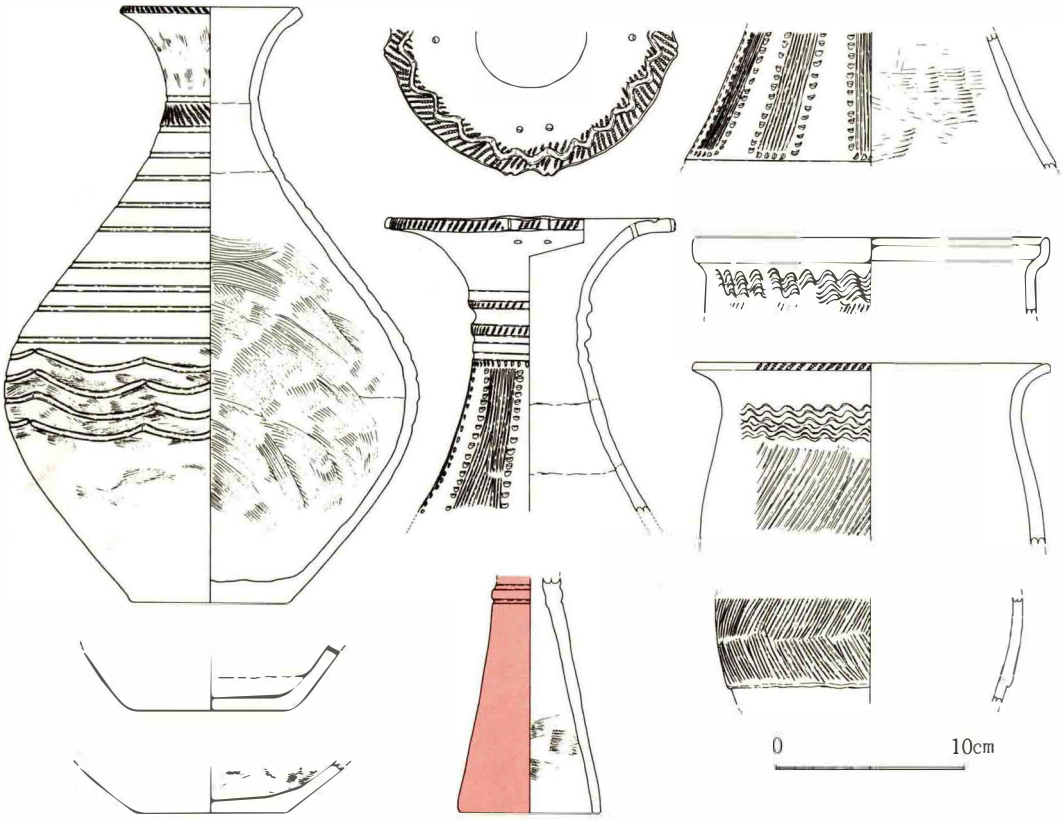


図103　徳間遺跡(2)・迎田遺跡出土土器

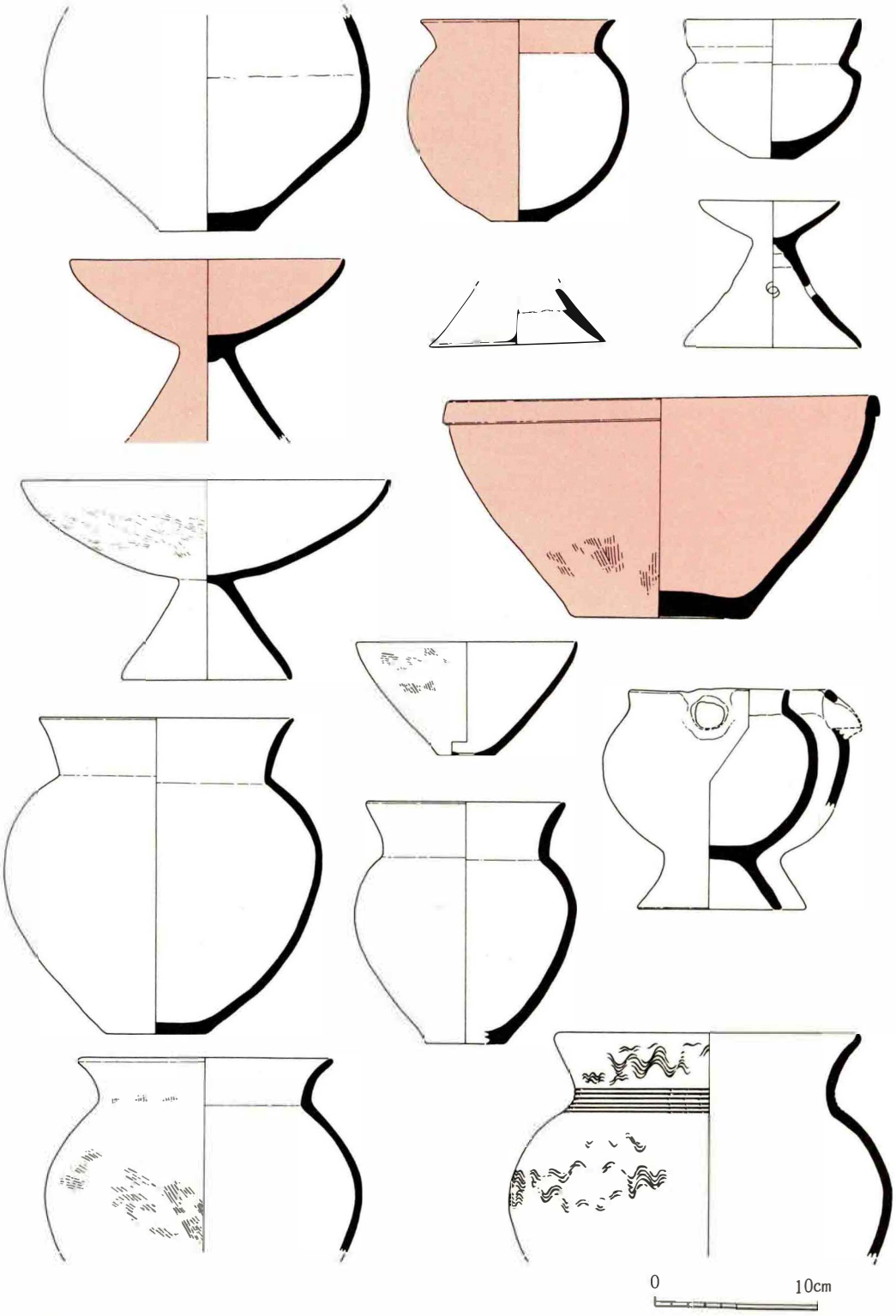
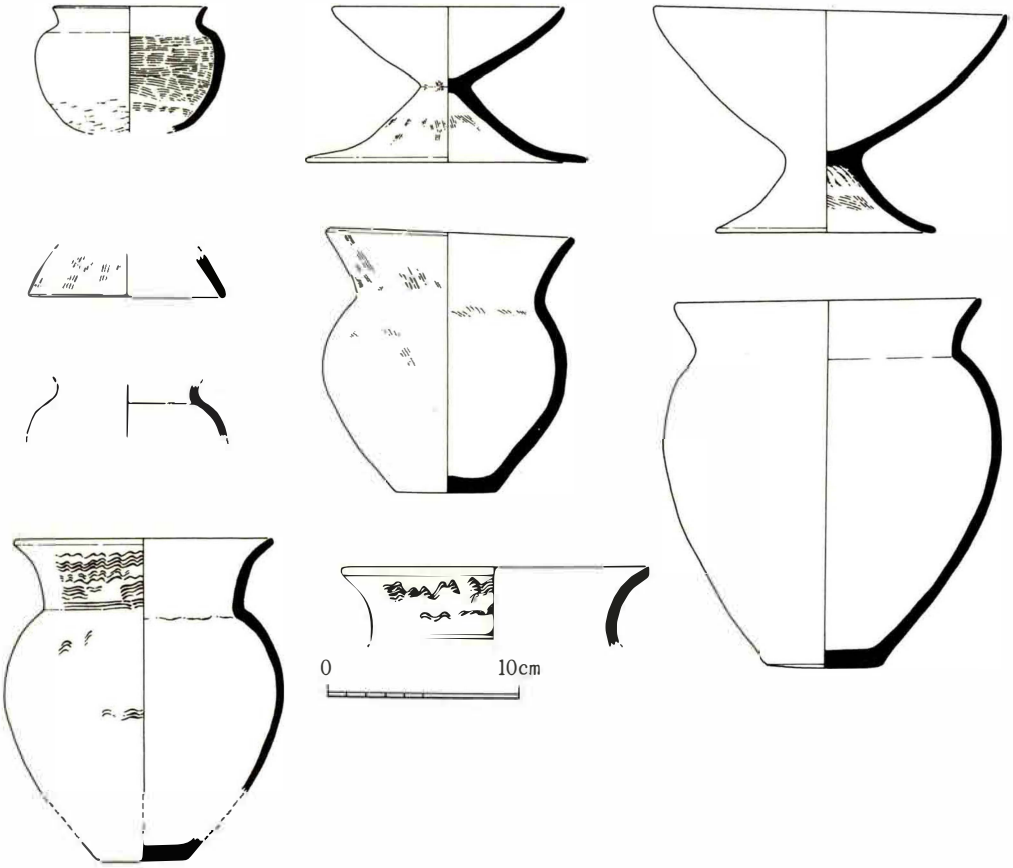


図104　A地点2号住居址出土土器

1号住



土壙

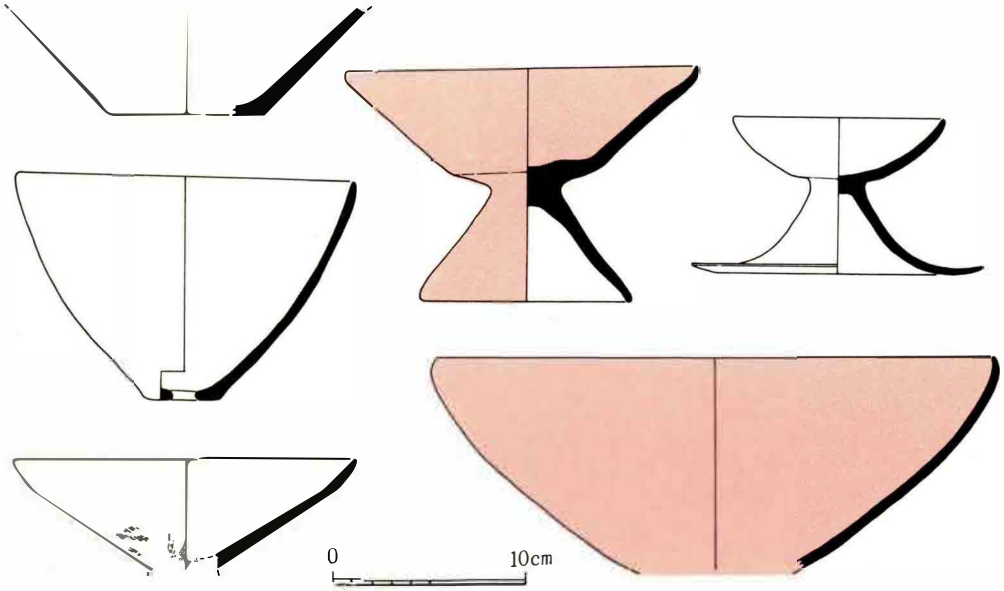


図105　A地点1号住居址、土壙出土土器

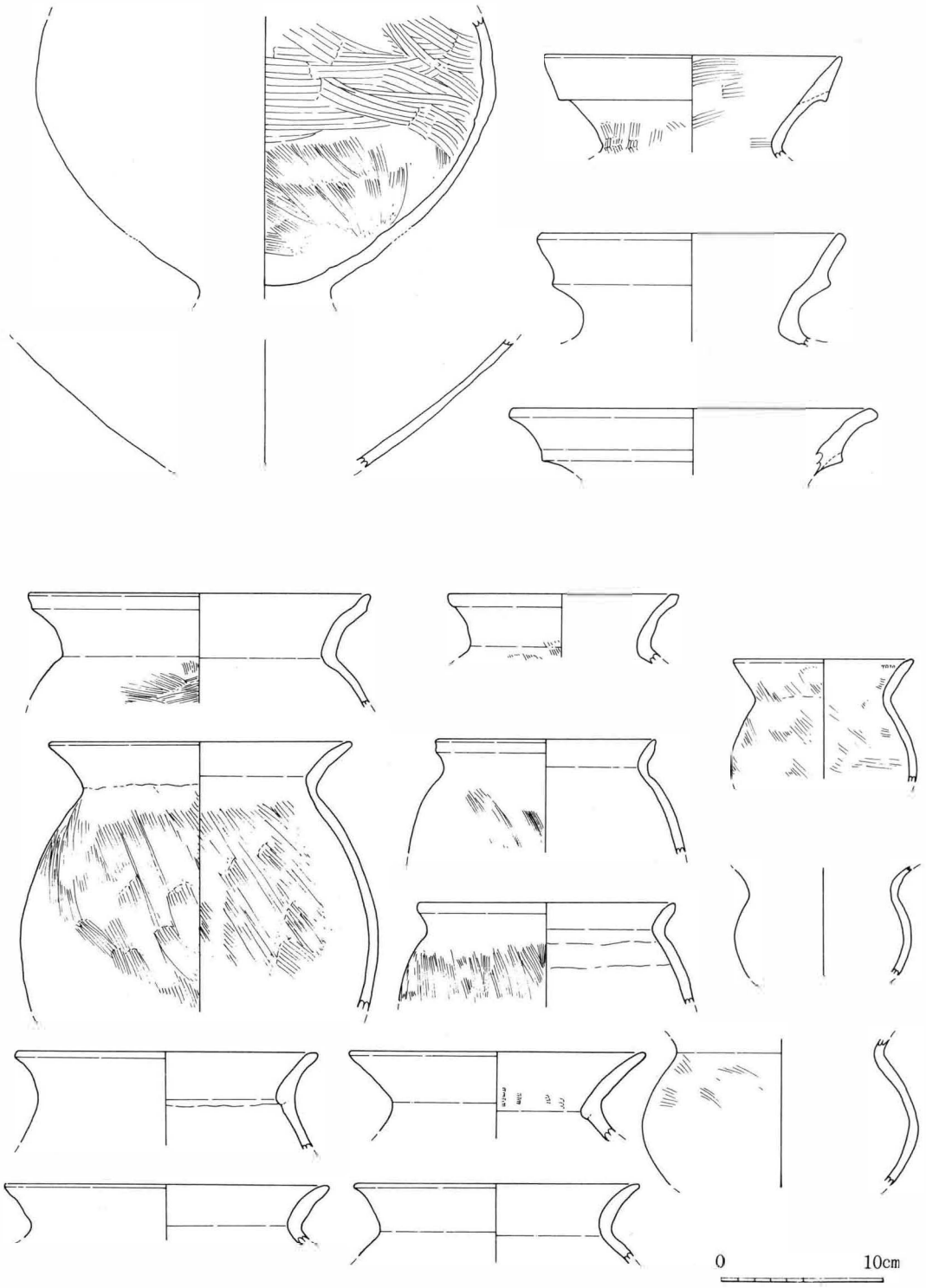


図106　小島境遺跡出土土器(1)

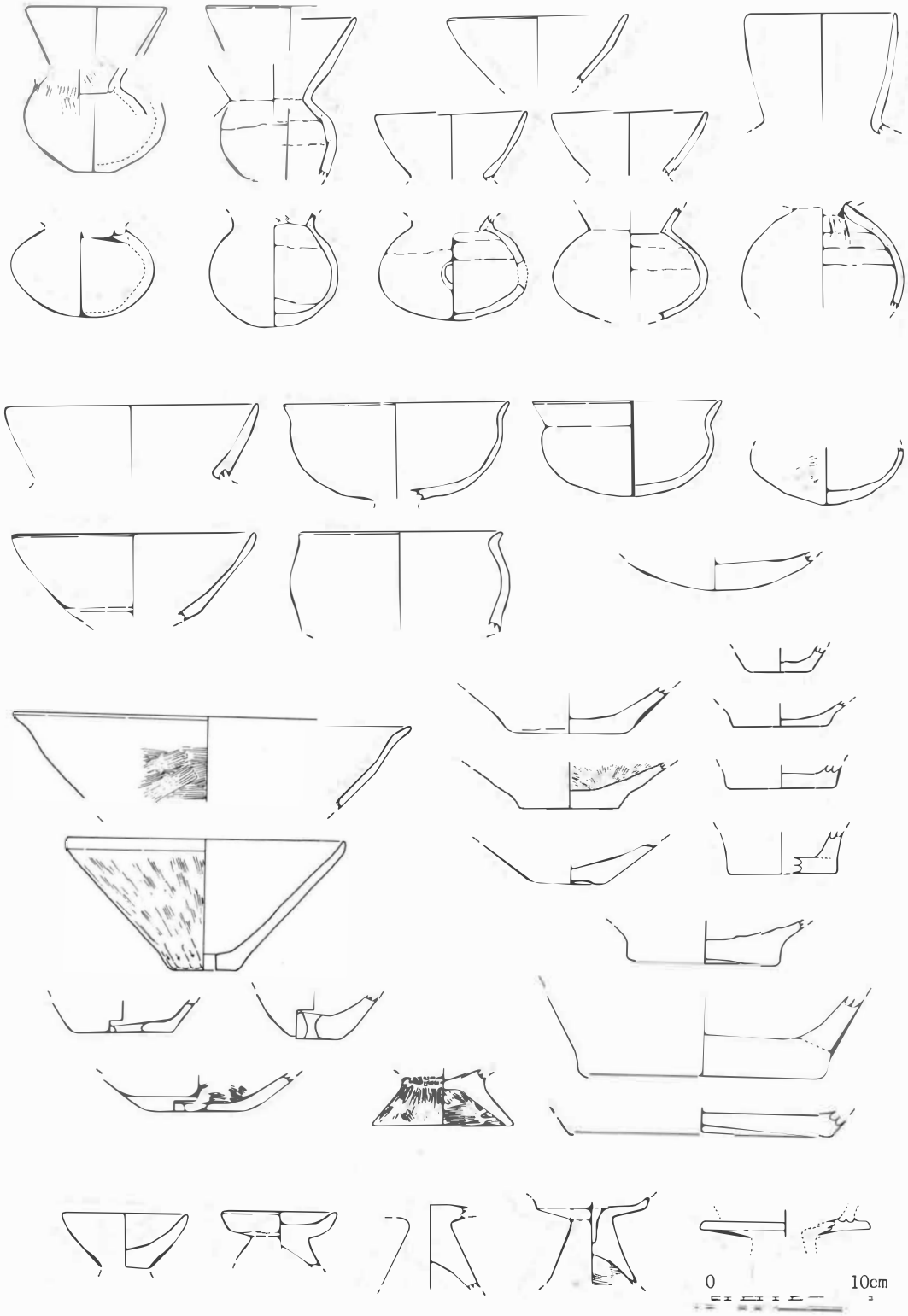


図107　小島境遺跡出土土器(2)

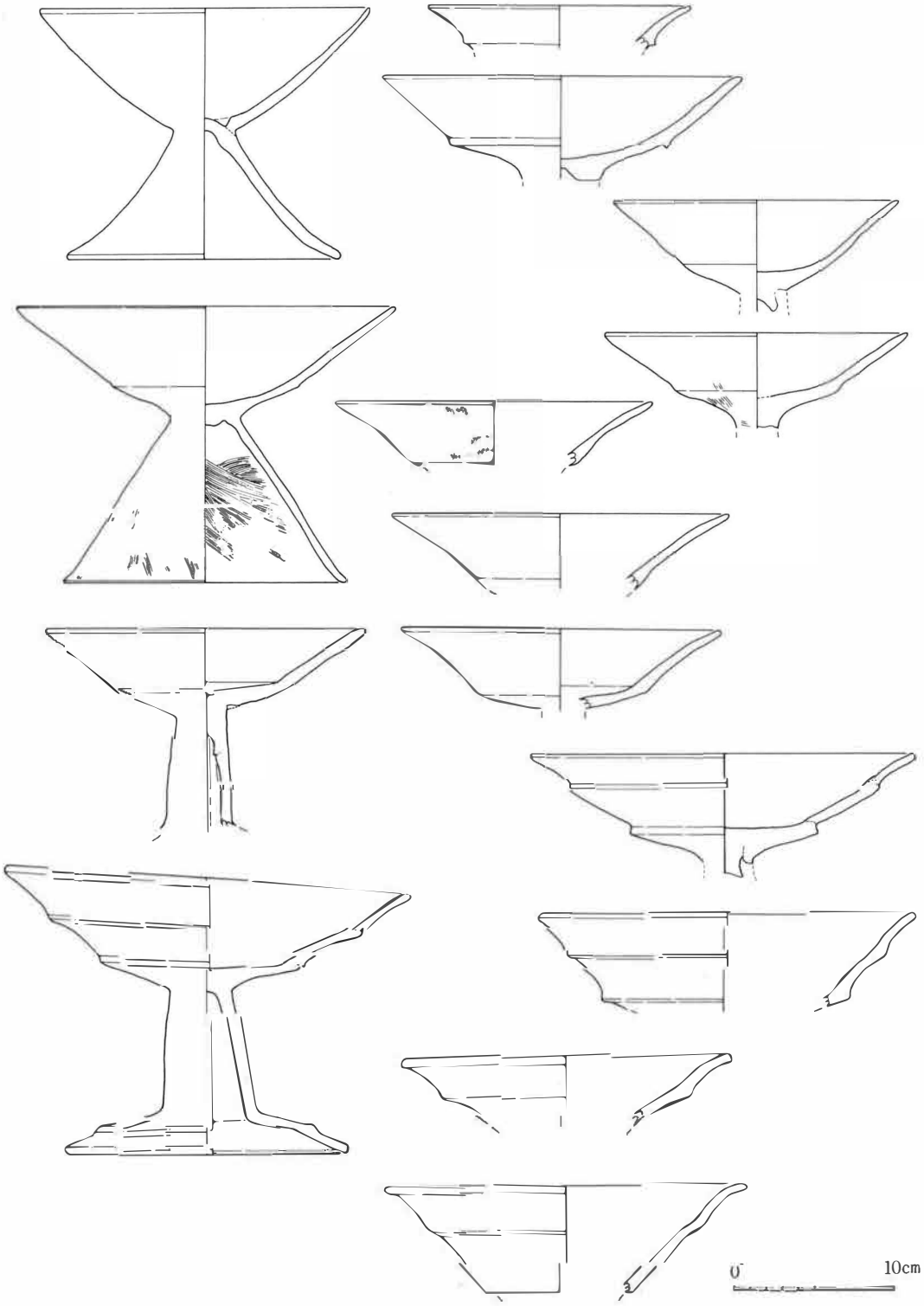


図108　小島境遺跡出土土器(3)

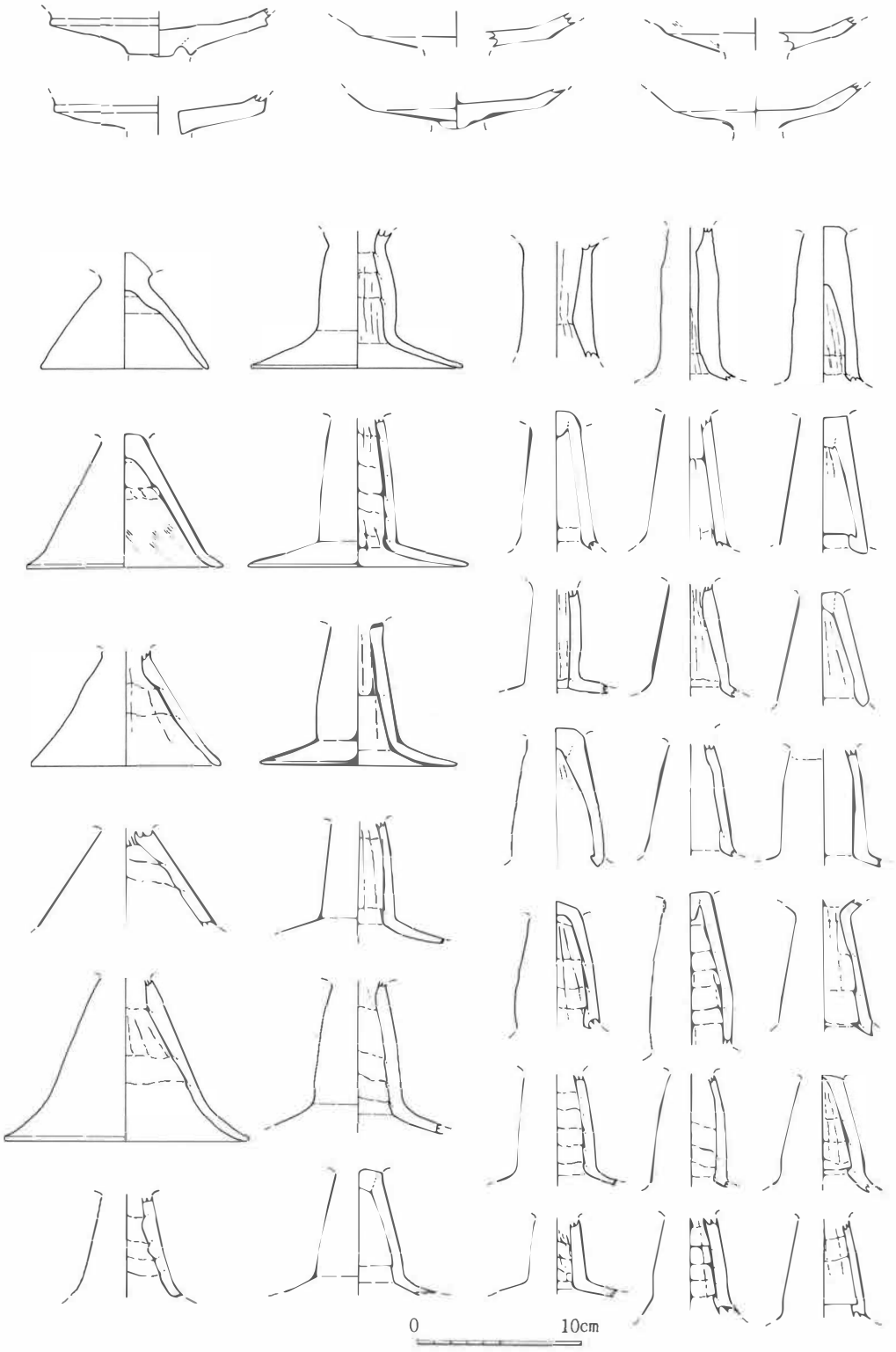


図109　小島境遺跡出土土器(4)

〈参考文献〉

総合　長野県史刊行会『長野県史　考古資料編』1巻　1980

縄文　五味一郎　「石匙」『縄文文化の研究　9、縄文人の精神文化』

鈴木次郎　「打製石斧」『縄文文化の研究　7、道具と技術』

鈴木道之助　「石鏃」『縄文文化の研究　7、道具と技術』

弥生　笹沢浩　「善光寺平における弥生時代中期後半の土器」『信濃』33巻12号　1971

笹沢浩　「弥生時代」『長野県上水内郡誌歴史篇』1976

笹沢浩　「入門講座・弥生土器－中部　中部高地1～3－」『考古学ジャーナル』131・133・134　1977

千曲川水系古代文化研究所　『編年－中部高地における型式－』　1980

古墳　大阪府教育委員会『陶邑』III　1978

亀井正道　「土製模造品」『神道考古学講座　第三巻　原始神道期』　1982

更埴市教育委員会　『城の内』　1961

笹沢浩・原田勝美　「長野県下出土の須恵器　上・下」『信濃』26－9・11　1974

笹沢浩　「古墳時代・生活遺跡」『上水内郡誌歴史篇』　1976

椙山林継　「石製模造品」『神道考古学講座　第三巻　原始神道期』　1982

田辺昭三　『須恵器大成』　角川書店　1981

寺村光晴　『古代玉作形成史の研究』　吉川弘文館　1980

宮坂光昭　「弥生末期にみる祭祀形態試論」『信濃』34－4　1982

平安　坂井秀弥　「越後における七、八世紀の土器様相と画期について」『信濃』35－4、1983

斎藤孝正　「猿投窯における灰釉陶の展開」『考古学ジャーナル』211、1982

笹沢浩　「第四様式期の生活」「第五様式期の生活」『上水内郡誌歴史篇』　1976

田口昭二　「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」『考古学ジャーナル』211　1982

玉口時雄・小金井靖　『土師器・須恵器の知識』　東京美術　1984

奈良国立文化財研究所　『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅰ・瓦編Ⅰ』　1974

石田茂作　『飛鳥時代寺院址の研究』　1944

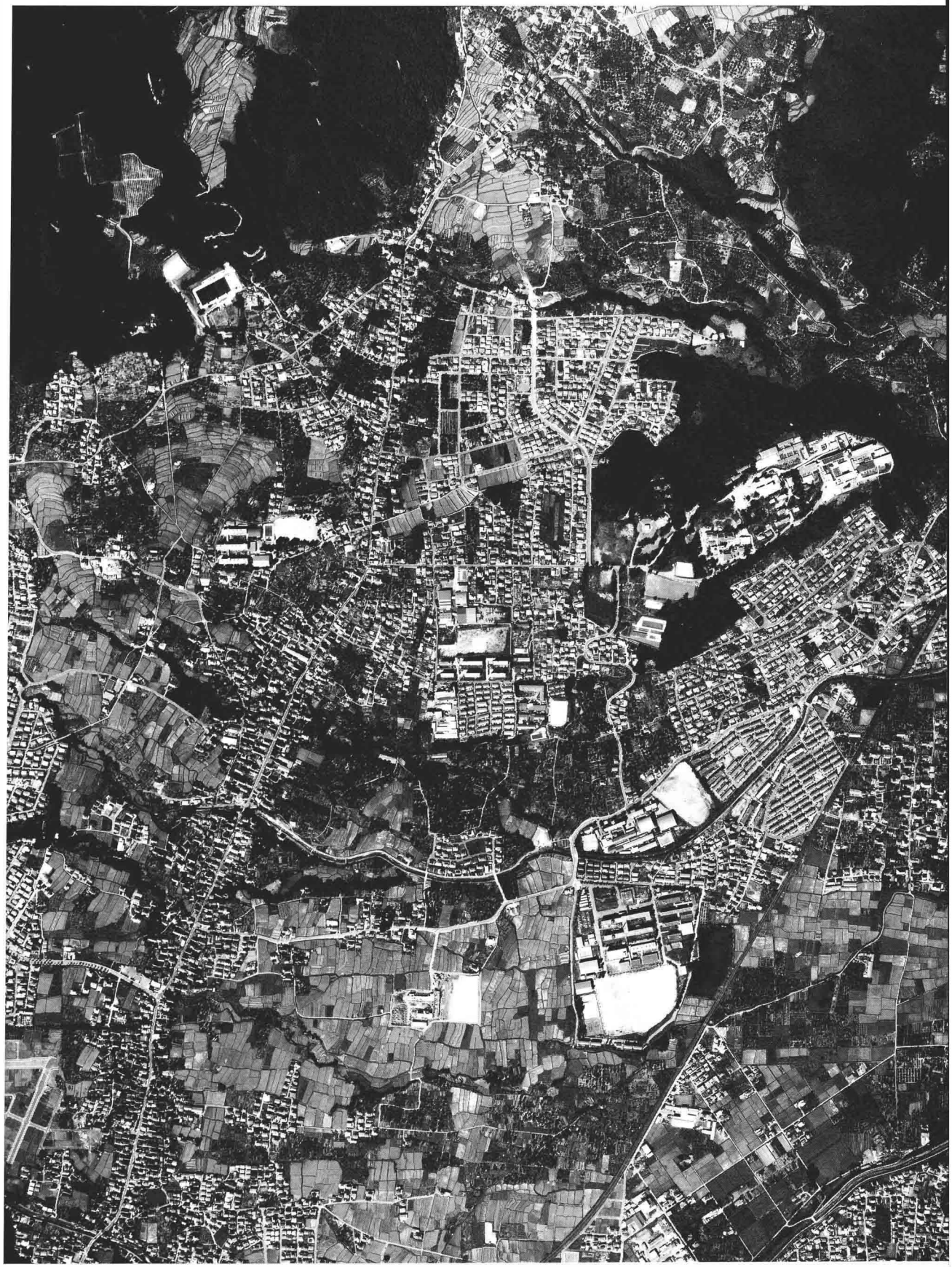
『奈良六大寺大観II』　同刊行会　1968

米山一政　「信濃の古瓦」『一志茂樹博士喜寿論文集』　1971

米山一政　「信濃の古瓦再論」『中部高地の考古学』　1968

『仏具大辞典』　鎌倉新書　1982

『法隆寺献納宝物目録』　東京国立博物館　1979



図版２　Ｂ地点

全景
調査開始時

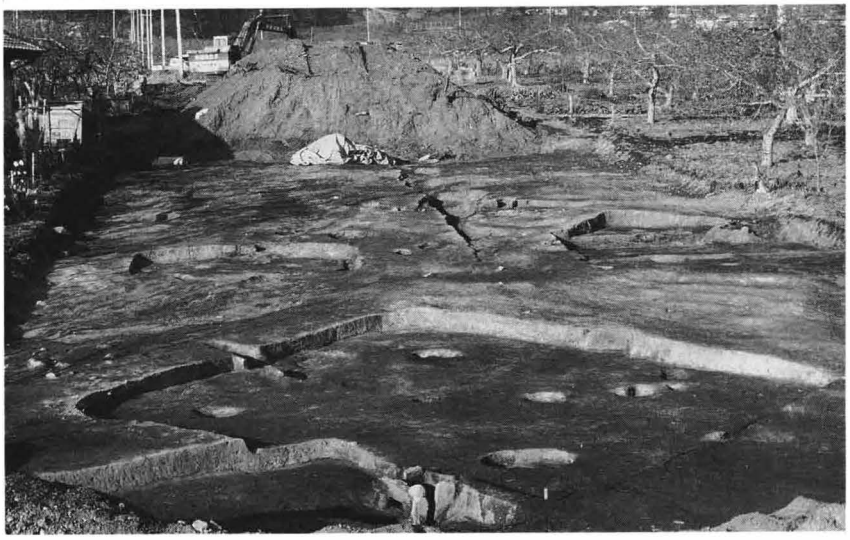
北半全景
北より

北半全景
南より

13号住居址
以北

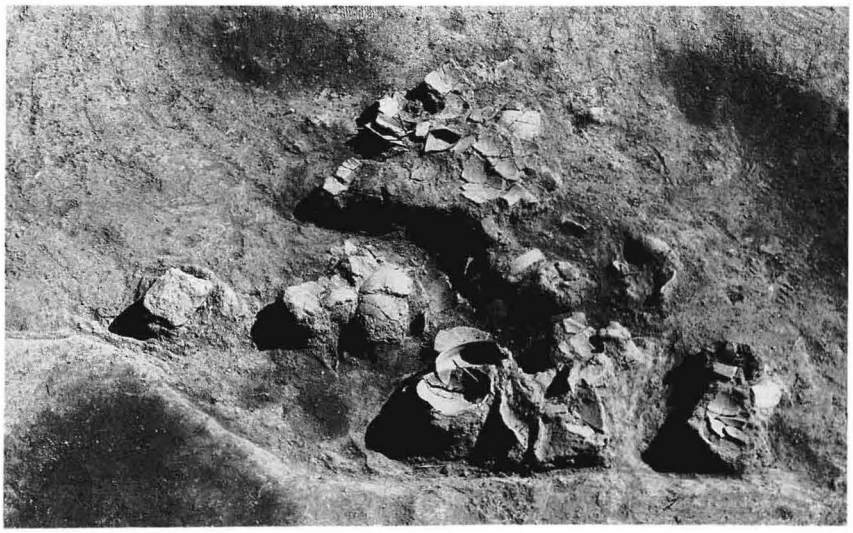
南半全景
北より

南半全景
南より



図版4　B地点

1号住居址



1号住居址
遺物出土状況

2号住居址

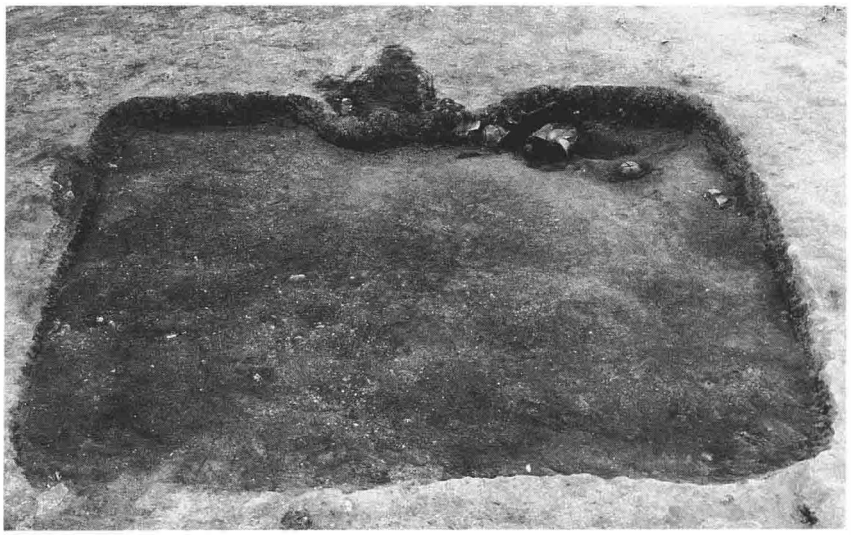
3号住居址

3号住居址

3号住居址
カマド付近
遺物出土状況

図版6　B地点

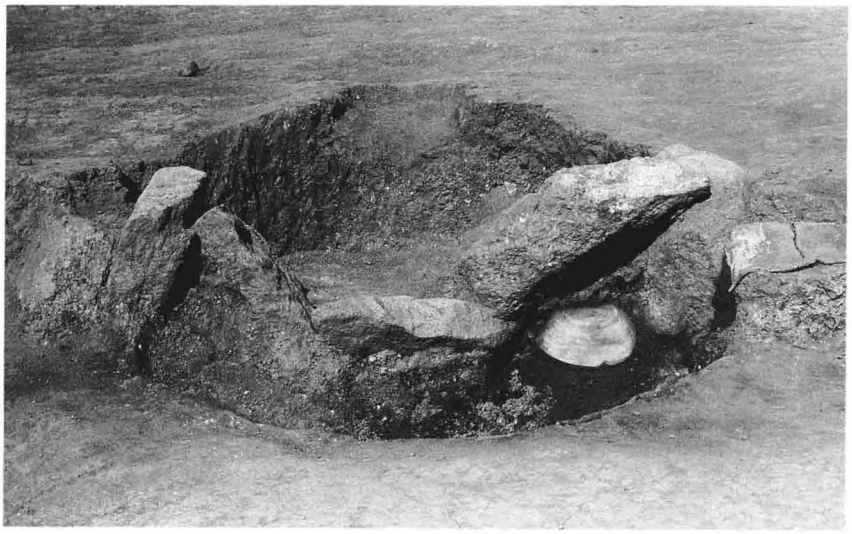
4号住居址
遺物出土状況



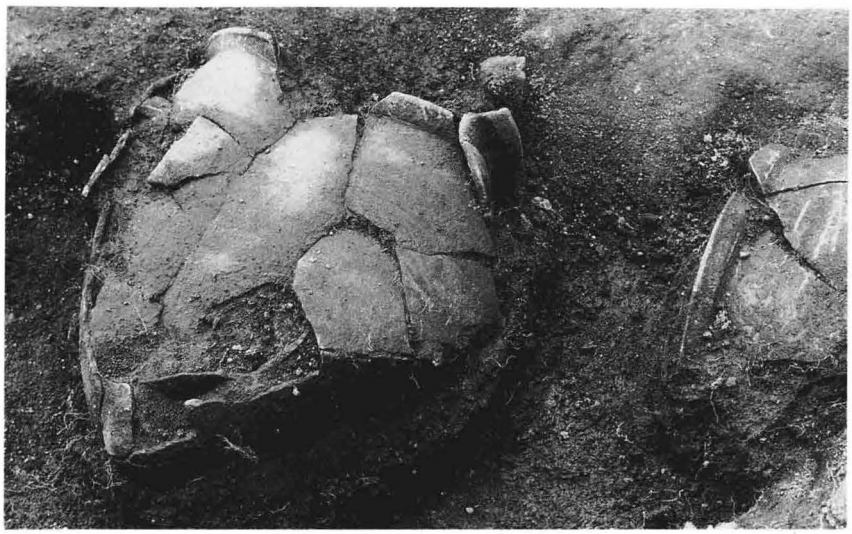
5号住居址

5号住居址
カマド付近

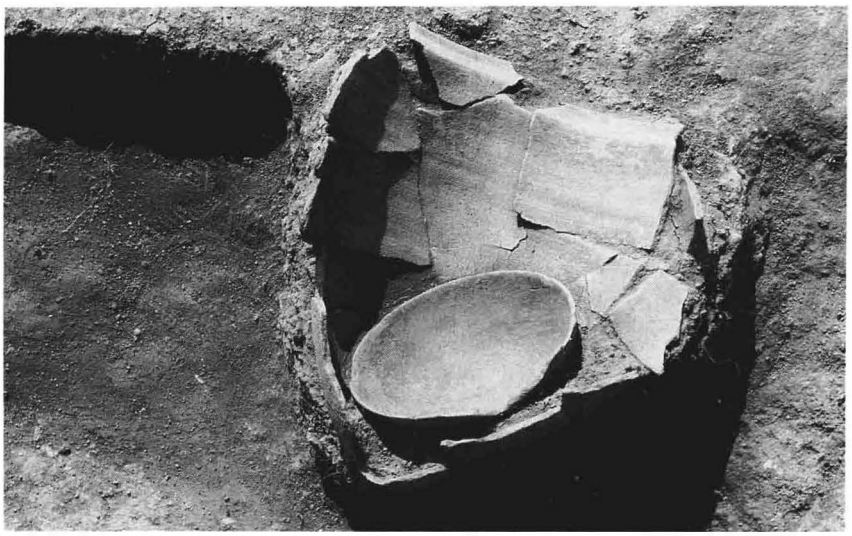
5号住居址
カマド



5号住居址
カマド横
遺物出土状況

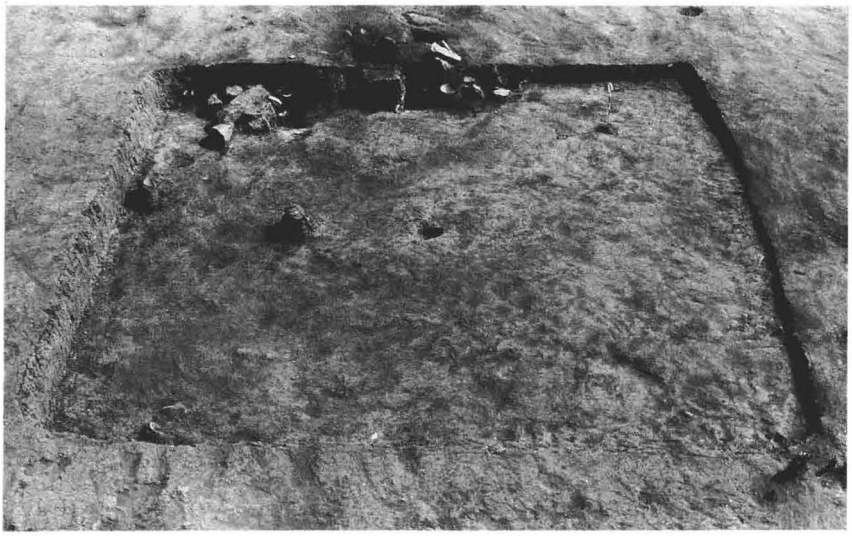


5号住居址
カマド横
遺物
内面

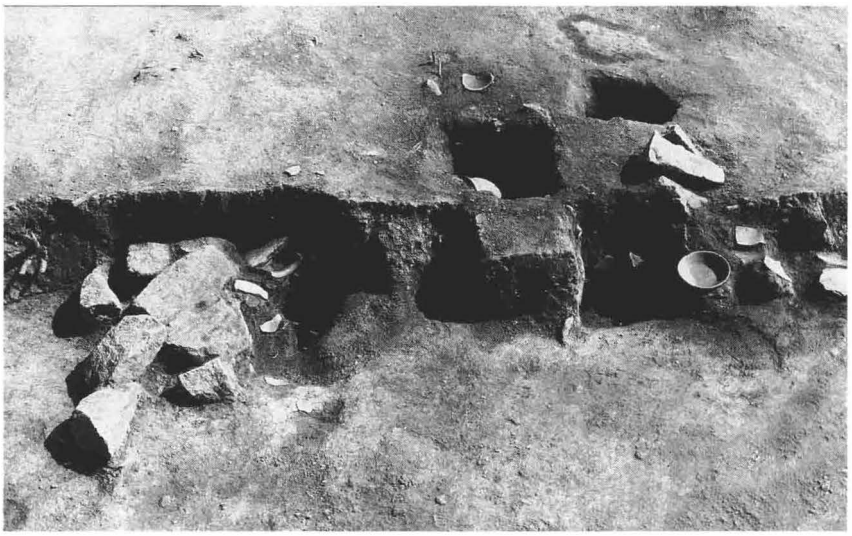


図版８　Ｂ地点

６号住居址



７号住居址



７号住居址
カマド付近

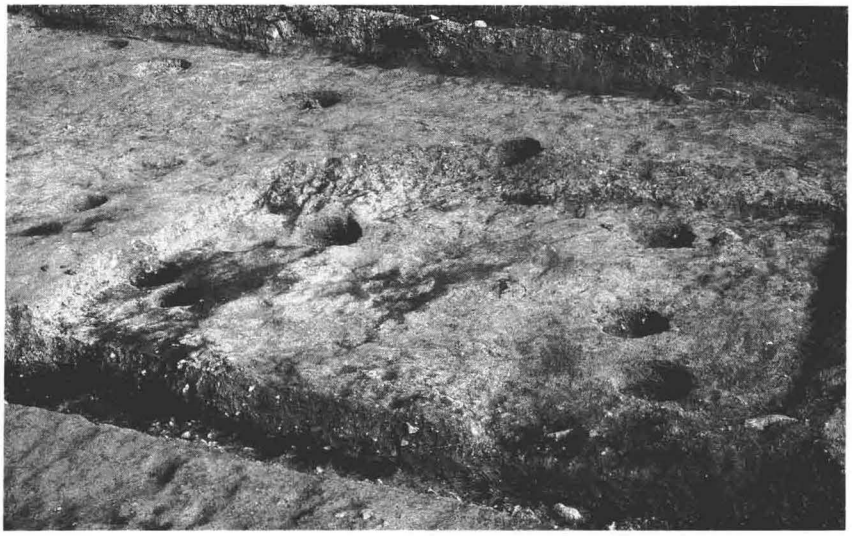
7号住居址
カマド

8号住居址

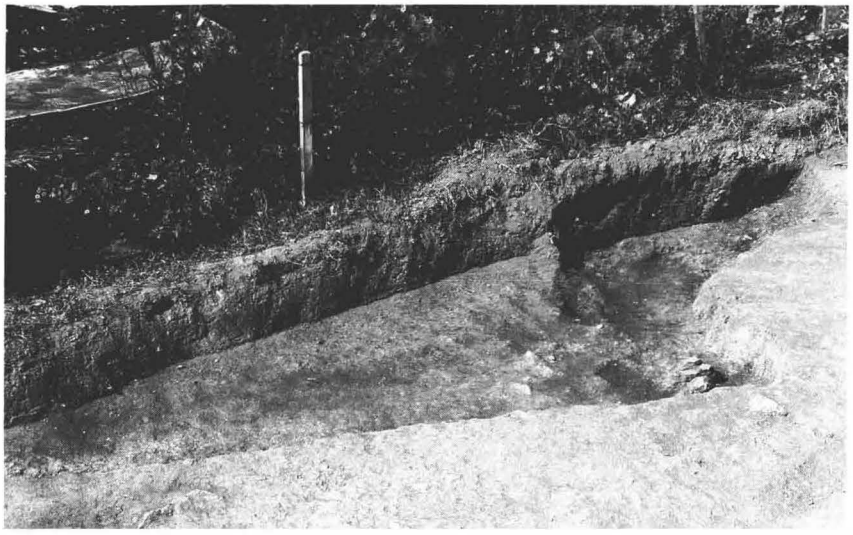
8号住居址
カマド付近

図版10　B地点

8号住居址
南西隅
遺物出土状況



9号住居址

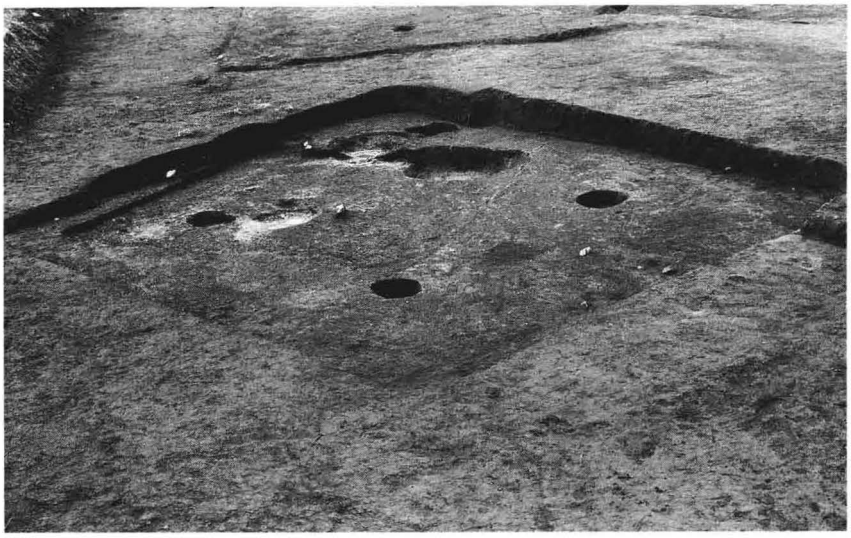


10号住居址

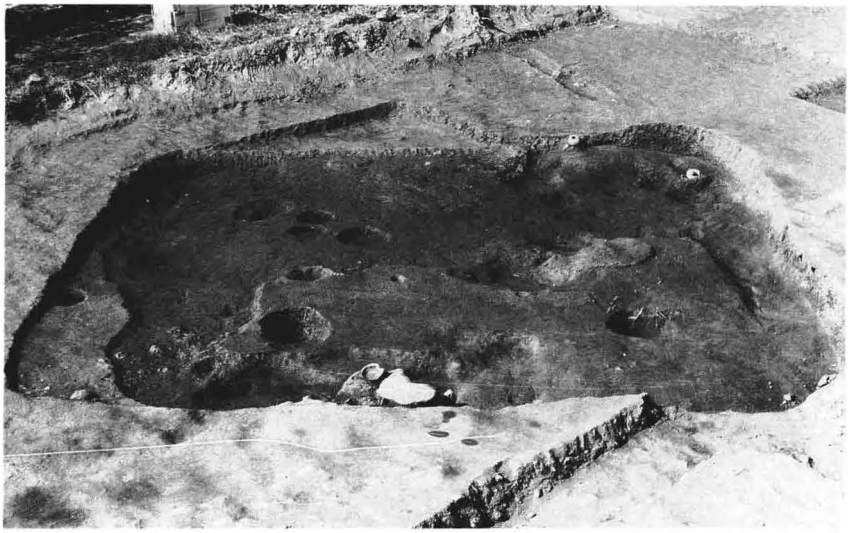
11号住居址

11号住居址
カマド付近
遺物出土状況

11号住居址
13号住居址



図版12　B地点



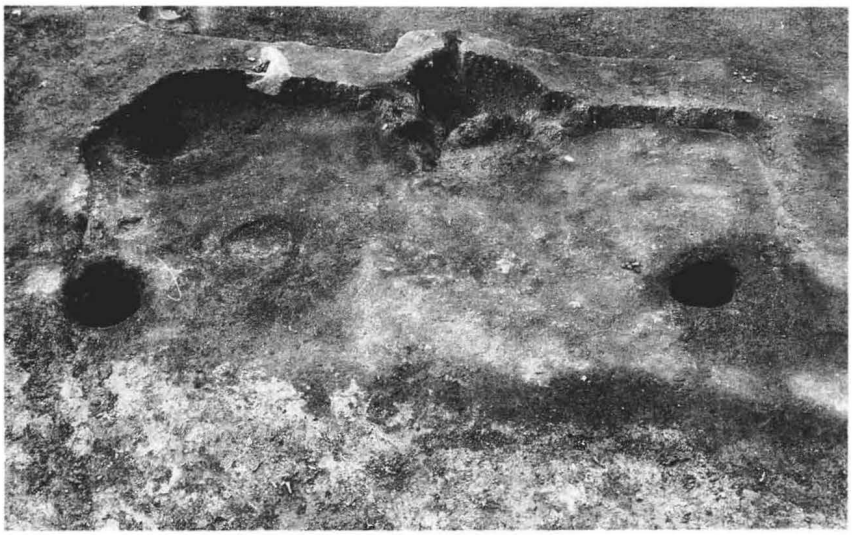
12号住居址

14号住居址

14号住居址

15・18・21号住居址

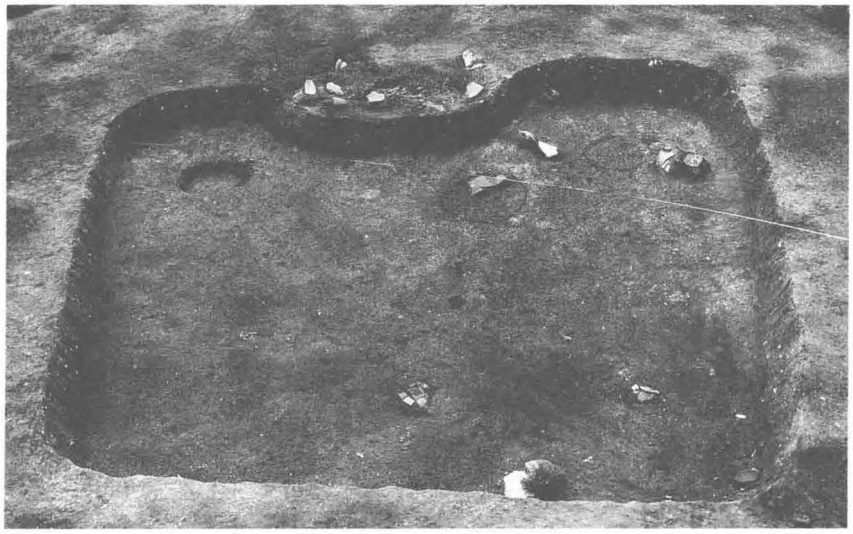
21号住居址



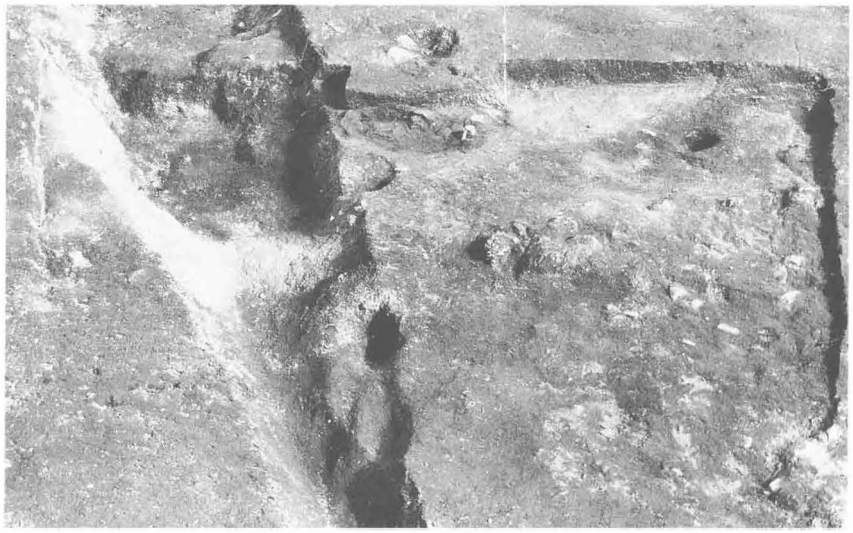
16号住居址

図版14　B地点

17号住居址



20号住居址



22号住居址

23号住居址

23号住居址
カマド

23号住居址
カマド側面

図版16　C地点

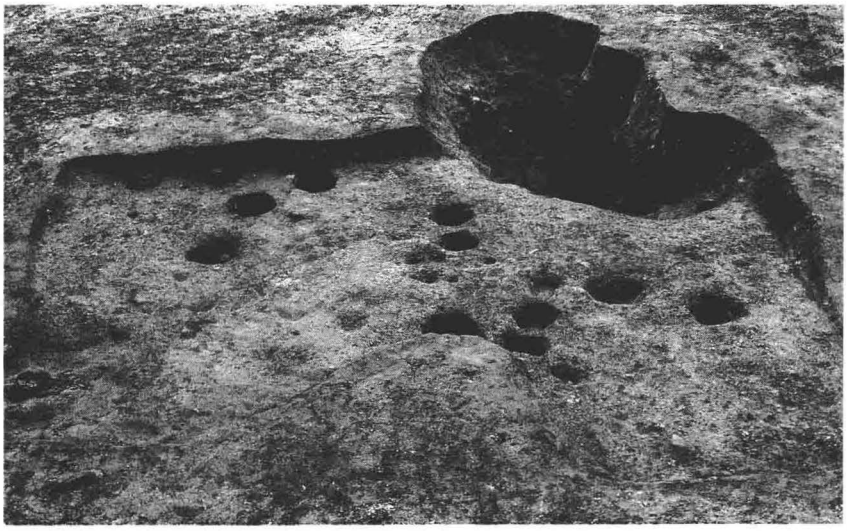
全景
北より

1号住居址

1号住居址
銅椀
出土状況

1号住居址
遺物出土状況

2号住居址

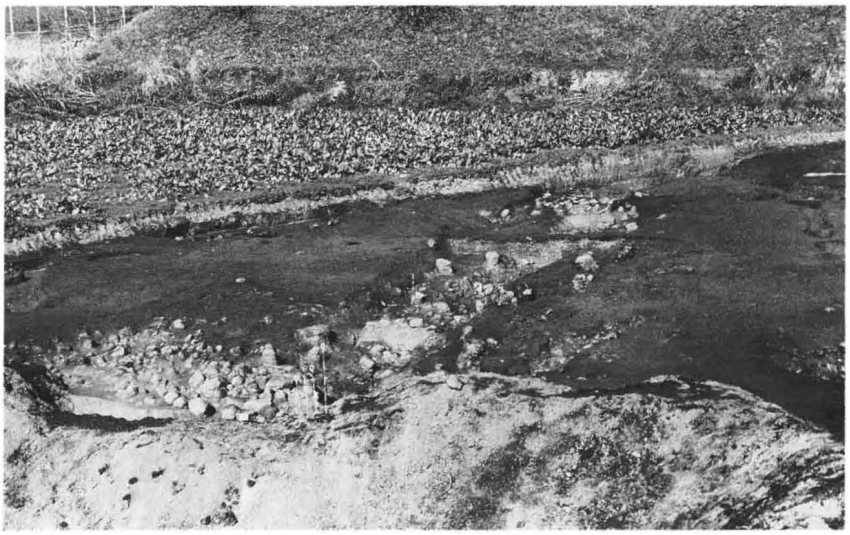


3号住居址

図版18 C地点

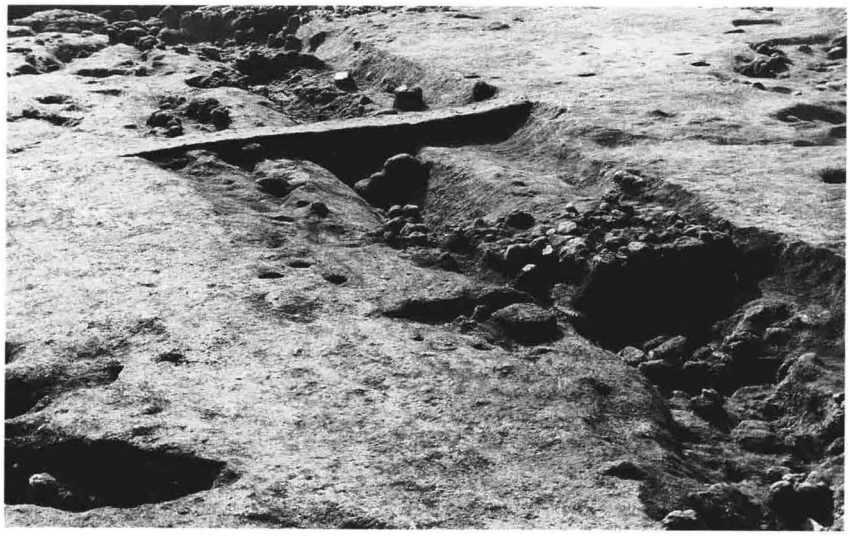
3号土坑

8～14号土坑



溝全景
南より

溝
北より



溝　南端
集石

溝
南より
ピンポール
軒丸瓦出土位置